エスパー幼女

メノメノ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

卵から生まれたエスパー幼女の話。

処女作なので文章は下手ですが目を瞑って下さい。それか感想にて何かご指摘ありましたらどんどんお願いします。

目次

始まり 1
卵 6
名前 10
ローグタウン 16
リヴァースマウンテン 24
クジラ 30
ラブーン 37
引き分け 42
ウィスキーピーク 50
裏の顔 56
出港 60
発音練習（番外編） 67
怪我（番外編） 73
リトルガーデン 78
巨人 89
決闘 98
キャンドル 106
カラーズトラップ 118
誇り 128
病気 142
ドラム島 155
夜中（番外編） 182
雪崩 186
城 199
チョッパー 216

バロックワークス ―― 230
ワガママ（番外編） ―― 245
特訓（番外編） ―― 251
Ｍｒ．２ ―― 259
アラバスタ ―― 275

始まり

天気は晴れ、波も穏やかな航海日和の日。
可愛らしい羊の船首がイーストブルーを駆け抜ける。
「んーー良いー天気だーー!!」
その船首の上で気持ち良さそうに伸びをしているのが、この船の船長である３０００万ベリーの賞金首、モンキー・Ｄ・ルフィである。
「ちょっとルフィ、落ちないでよー」
航海士であるナミが船首にいるルフィに声をかける。
麦わらの一味はナミの故郷であるココヤシ村を出港し、グランドラインへと向かっていた。その途中島が一つ見える。
「お、島が見えたぞーー!」
ゴーイング・メリー号の視線の先にあるのはさほど大きくはない至って小さな島だった。
ルフィが声を上げると他の仲間たちもその島の存在に気づいた。
「おいナミ、どんな島なんだ?」

狙撃手であるウソップがナミに訪ねる。
「比較的平和な島のはずよ。一応、食料なんかの補充に立ち寄りましょうか。」
「そうだな、ここらで少し食料確保出来た方が、あの船長の胃の大きさ的に見ても良いだろうな」
コックであるサンジもナミの意見に賛成のようだ。
この船の食料は大半がルフィの胃に収まる為、その意見には誰も反対は無い。

「よーし、あの島に向かって前進だー!!」
「「おおー!!」」

ーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

「いやー、それにしても平和な島だな。」
島に降り、パッと見た印象は今し方ウソップが述べた通りだった。

平和で平穏。観光などに特段力を入れている様子もない為、海賊に襲われる心配も少ない。故にただただ何もない島というのが一同の感想だった。

しかしそれに不満を持つ者が一人。

「何だ、つまんねーの」

ルフィは期待はずれな様子を隠すこともせずに表情に浮かべていた。冒険というものがとても好きである彼には、この島の平穏は気に入らないようだった。

「はは、まぁそう落ち込みなさるな若い人。」

ウソップが島の事を色々と聞く為に話しかけていた老人がそうルフィに声をかける。

「確かにこの島は平穏で、平和なものだ。だがしかしあの森の中、北の方角には昔研究施設があってな、そこならば面白いものもあるだろう。」

「研究施設ー!?面白そーだ!!」

老人の話に途端に表情を変え、ルフィは瞳を輝かせる。

「おーし、ウソップ行ってみようぜ!」

「おう!!」

ウソップも普段は臆病な性格だが、流石にこの島の欠伸のでるような平穏さにいては刺激を求めたくなっているようだった。

――――――――――――
――――――――――
――――――――

　二人は老人の話の通りに森へと入り、その北にある研究施設へと向かっていた。
「おい、ウソップあれが研究施設じゃねーか!?」
　ルフィが指をさした方向を見ると、確かに何らかの建物の痕跡が伺える。
「おー、確かにあれっぽいな」
「じゃあ、早速行ってみよーぜ!」
　ルフィは腕を伸ばし、建物の近くの木へと腕を巻き付けて一気に移動する。それに気づきウソップは慌ててルフィの後を追いかける。
　建物へと近づいていくとどうやら使われなくなって何十年も経っているらしく、施設の表面は植物に覆われている所が目立つ。
「しっかし一体何の研究をしていたんだ?」
　中に入って見ても難しげな資料や写真、薬品らしき物もあるが、少々恐ろしげにも見えるそれがしかし何の研究なのかはウソップには全く検討もつかなかった。
　人体の一部らしきホルマリン漬けやおどろおどろしさを感じる模型のような物は、面

白いというよりは恐怖を駆り立てるようで既にもうここから出て行きたいという気持ちが大きい。
「あ!!!」
「な、なんだ!?ルフィ、て、敵か!?!?」
「違うぞ、卵だ!!!」
最初は何のことか分からなかったが、その視線の先には確かに卵のような物があった。
しかしそれは普通のニワトリとは比較にならないほどには大きい。そしてこんな研究施設の跡地にあるような卵だ。絶対ただの卵ではない。それだけはウソップにも分かった。
「これ、サンジに料理してもらったらウメーかな!?」
「いや食べんのかよ!?」
ウソップはそれだけは勘弁してほしいと願った。

卵

その後もルフィは不思議卵を食うと言い張り、結局二人は大きな卵をメリー号へと持って帰ってきた。勿論残りの仲間たちも顔をしかめていたが、こうなったルフィが何を言っても聞かないのも知っている。

「にしても研究施設の跡地にある卵って…」

恐らくこの件で一番大変であろうサンジはため息をつく。なんせ何の卵だか分かりもしないものである。ため息くらいはつかせて欲しい。

「これウンメーのかなー!?」

当の本人は目を輝かせて卵料理への期待でヨダレが溢れているのだが。その時どこからともなくビシッともパキッとも取れる音が聞こえてきた。最初は皆何の音か検討が付かなかったが、しだいに卵の殻が割れ始めている音だということに気づく。

「お、おいおい…何が出てくるんだ…?」

皆が卵へと視線を向ける中、少しずつその殻には亀裂が入り中身が見えてくる。

「えっ!?」

中身は誰も予想などしていなかった。いや予想など出来る物でもなかったのだ。ま

さか、卵の中から生まれたのが、
「に、人間?!?!」
　人間だということに。

ーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

　その後、生まれてきた子供を慌てて毛布で包み、一同は真剣な眼差しで話し合っていた。
「で、この子は一体何なの?何で卵から生まれてきたの??」
「さぁな、嘘みてぇな事だが実際この目で俺たちはコイツが今卵から生まれてくるところを見ちまったからな。」
「でどーすんだよ」
「ははは、おもしれーなー!!不思議卵から人が生まれてくるなんて!!」
「笑いごとか!?」
　若干一名はこの事態を楽しんでるようだが。

そして残りの四人は嫌な予感がした。
「おい、ルフィ…」
「決めた!!コイツ仲間にしよう!!」
やっぱり。ルフィは面白い人間を仲間にしたがる傾向がある。そしてこの不思議な卵から生まれた子供を仲間へと誘わない訳が無かったのだ。
「しかし大丈夫なのか?コイツは…」
どう見ても普通ではない子供を船に乗せることにナミやウソップは不安を隠せない。
「まぁ大丈夫だろ。」
「また根拠の無いことを…」
サンジはそんな風に答えるルフィに呆れたようにし、生まれてきてまだ目を開ける事も出来ていない子供を観察する。子供は三、四歳ほどの女の子で藍色の髪をしていた。
「あ、仲間にすんなら名前も考えないとな!」
「おいルフィ問題はそこじゃねーよ!?」
ウソップがツッコむもルフィの中ではこの子供が仲間になることは決定事項のようだった。
「確かに名前は考えてやらなきゃな。」
「別に何だっていいだろ。」

「はぁ!?そんなんだからお前は頭の中までマリモなんだよ!!」
「んだとゴルァ!?誰の頭ン中がマリモだってェ!?」
「もー喧嘩してる場合か!?」
すぐに喧嘩を始める二人をナミが物理的に制裁する。
それを笑うルフィ、呆れるウソップといつもの賑やかな一味の声に眠っていたはずの子供の瞼がそっと開かれた。

名前

「お、目ェ覚めたのかお前。」
子供が目を開けると五人の瞳がこちらを見つめていた。
なんだろう？ここはどこだろう？
子供の頭の中は疑問でいっぱいになっていた。
「やっぱ名前考えてやらなきゃなー」
そんな子供の疑問など気にすることもなく、目の前の麦わら帽子を被った人物は子供が目を覚ます前の話を続ける。そしてああでもない、こうでもないと当の本人を置き去りに話は進んでいく。子供がその様子を見るのにも段々と飽き始めてきた頃にようやく話はまとまったようだった。
「よし、今日からお前の名前はメア、メアだ!!」
麦わら帽子の人物が子供の目の前に立ち、そう告げる。
子供は、メアはその言葉をジッと聞いていた。
メア…メア。わたしのなまえはメア。
心の中で何度もその名を呼ぶ。思いのほかその名前はしっくりとくるようにも感じ

た。
「あ、俺の名前はモンキー・D・ルフィだ!!」
麦わら帽子の人物、ルフィは胸を張り自らの名を名乗った。
「ロロノア・ゾロだ。」
「私はナミっていうのよ。」
「お、俺はウソップだ。」
「俺はサンジ。よろしくねメアちゃん」
残りの仲間たちも次々と自己紹介をしていく。
るふぃ、ぞろ、なみ、うそっぷ、さんじ…
生まれたばかりの脳みそはまるでスポンジのようにその名前を覚えていく。
「そして俺たちは海賊だ!!」
かいぞく?かいぞくってなんだろう?
海賊が何だか分からずにメアは首をかしげる。
「ん?メアお前海賊知らねーのか?」
ルフィのその問いかけに対してメアはコクリと首を上下に振る。
「海賊っていうのはな、色んな海とか島とか冒険して宝を見つけたり、宴をやって肉食ったりすんだ!」

宴で肉を食べるのは主にルフィなのだが。しかしそんなことはメアには分かるわけがないのでルフィの話をジッと聞いていた。

「そんで海賊王に俺はなるんだ!!」

かいぞくおー?

「海賊王ってのはな、この海で一番自由なヤツのことだ!!」

うみで、いちばんじゆう…

生まれたばかりのメアにはまだ本当の凄さが理解出来ないのかもしれない。しかしそんなメアにも海賊王になることがルフィにとってとても重要なことであるのは理解出来ているようだった。

「今日からはお前もこの一味の仲間だからな!!」

ニシシシとルフィは笑う。

なかま、なかま…

ふと周りを見れば他の仲間たちもルフィと同じような笑顔でいた。

なんだかむねがあったかい。ぽかぽかする。

メアには不思議とそんな感情が宿っていた。彼女がこの感情が生まれて初めての〝嬉しい〟だと気づくのはもう少し先の話であるが。

「あ!」

「笑った!!」
皆に釣られてにぱっとメアの顔も笑顔になる。それは子供特有の可愛らしいものであった。
「よし、じゃあ新しい仲間が増えた事だし宴だあぁぁ!!!」
『キャッキャ!!』
甲高い笑い声を上げるメア。そしてメアは嬉しさの余り周りの物を浮かばせていた。
「「はあああああぁぁぁぁぁぁ!?!?!?」」
今はまだ分からない胸の温かみを感じながらメアは麦わらの一味の仲間入りを果たした。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「おいしいかい?メアちゃん」
「♪」
あまい、もっとたべたい。

　現在メアはサンジに作ってもらったフルーツヨーグルトをモグモグとおいしそうに頬張っていた。生まれたてとはいえ歯はしっかりと生えているようだったし取りあえずのメニューということらしい。初めてのスプーンに四苦八苦しており、頬にヨーグルトがべったりと付いてしまっているが。そんなメアをサンジは時折頬を拭いてやりながら、微笑ましく見つめていた。
　藍色の髪はナミにツインテールにしてもらい、お下がりである大きめの服を着せられていた。
　そして一同はメアが仲間になった宴を行っていた。話の内容は先ほどメアが使った能力の事である。
「今日一日で何回コイツには驚かされるんだ…？」
「ホント、メアって分からないことだらけね…」
　ウソップとナミがそう力無く言う。先ほどのメアの能力は驚かされるものだか、すでに人間が卵から生まれるというビックリな所を見てしまった為にその衝撃もいくらか薄らいでしまっているようだ。
「やっぱメアはおもしれーなー!!」
　ルフィだけはそう言って楽しそうに笑う。
「しかしあの研究施設は何だったんだ？」

「入ってはみたが、今はもう古過ぎてメアの手掛かりになるものも残ってるかどうか…」
そして研究施設のことも話に上がっていた。
だがもはや何の研究をしていたのか、研究の結果に生まれたのがメアだったのか、分かることはほとんど無い。
「まぁ何だっていいじゃねーか、メアが仲間になったんだしよー！」
「…それもそうだな。」
結局はそんな船長の声で話はまとまった。
「じゃあ改めてメアが新しく仲間に加わった記念に、」
「「乾杯!!」」

ローグタウン

　メアは海を眺めていた。かれこれ一時間近くはずっと飽きずに同じ姿勢でいる。海賊ならば見慣れた海も、メアには初めて見る景色であり興味を引く対象であった。故にずっと飽きずに海を見つめ続けていたのだ。メアがそうしている間にも船は次の町へと辿り着く。
　ここはローグタウン。始まりと終わりの町。

「メア！新しい服を見に行きましょう！」
「！」
　ずっと海を眺めていたメアにナミがそう話しかける。
　メアの服は前の島でナミが買い与えた物だったが、ナミからすればそれらだけでは物足りないらしくこの町でも服を見に行こうというのだ。
　正直メアからすれば服に興味など無かったが、断る理由も無いためその誘いにコクリと頷く。
「よし！じゃあ早速行きましょう！」

可愛い子供服があるといいわねなんてナミは言いながらメアの手を繋ぐ。
メアからすればこれが自分の着せ替えショー及びナミの服選びも兼ねた地獄のショッピングだということには気づく筈もなかった。

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

あきた…つかれた…
メアはもうヘトヘトになっていた。
その後ナミに何度も試着を繰り返され、やっと解放されたのだ。今ナミは自分自身の服を選んでいる。しかしこの店の価格は高すぎるようで服を買う気は無いようだ。すなわちまだまだメアの受難は続きそうである。
これならうみ、みてるほうが、よかったかも…
子供が親の買い物に待たされ暇をもてあますのはよくあることで、メアも例に漏れず暇だった。
しかしナミからすればまだ幼いメア一人を自由にさせる訳にもいかず、またもやナミ

の買い物を待つ羽目になりそうだ。
――――――――――――
―――――――――――
――――――――――

しばらくしようやくナミの買い物は終わりウソップとサンジと合流したところで、ナミが異様な気圧の低下に気づく。メアもなんだか嫌な予感を感じ取っていた。
「嵐が来る…この島に」
「嵐がァ!?」
　早く船に戻ろうとするナミたちの前にゾロが現れる。
「アイツを見なかったか?」
「ルフィか?」
「あぁ逸れちまった。それに何か妙な気配がしやがる…」
　それにとんでもない事が起こりそうな気がするとゾロは言った。それと同時に町人達が慌ただしく逃げ始めた。
　聞けば海賊、道化のバギーだと言っている。ゾロとナミはその名前に聞き覚えがあっ

た。そしてバギーがルフィを処刑するという話まででている。
「ルフィが処刑!?」
「あのバカ…」
ゾロとサンジは処刑台へと走り出す。ナミとウソップも急いで船へと戻る。バギーやルフィ達が暴れれば海軍も出てくるだろう、そこで船が流されていては終わりだ。
「ゴーイング・メリー号が危ないわ!!」
「ゴーイング・メリー号が海軍の手に!?おいナミグズグズすんなぁ!!」
「まってよぉ!!」
その言葉を聞きウソップのスピードが上がり、それをナミとメアは慌てて追いかける。
しかしそれよりも先に港にはモージとリッチーがゴーイング・メリー号の元へと辿り着いていた。二人の仕事はもしもルフィ達が逃げ出した場合に船を燃やすことのようだ。けれどもこの雨の為に中々マッチが付けられないようだった。
「えい!えい!くそおぉ~なぜに突然のこの豪雨!俺たちはこの船を燃やしちまわねばならんのにいい~」
付いたと思った火も雨で早々に消えてしまう。それでもモージとリッチーは何度もマッチに火を付けようとしていた。

「貴様ら何してる!?」
そこにようやくウソップ達が船へと戻ってきた。
なんだろう…あれは…
メアは見たことのないライオンと変な髪型の男モージにとても困惑していた。

「行けー！リッチー！」
「ウアアアアウ!!!」
「必殺新鮮卵星!!」
ウソップが先ほど市場で買った卵をリッチーに向かい撃つ。
しかし新鮮な卵はリッチーに当たることなく地面へと落下し割れてしまった。
「あんたねぇ…」
ナミとメアは呆れたような表情を浮かべる。しかしお腹が空いていたリッチーには十分な足止めになったようである。その隙にウソップ達は船へと乗り込もうとする。
「撃てぇ!!」
しかし海軍の手もすぐそこまで迫ってきているようだった。間一髪なんとか三人はジャンプで船へと乗り込むことが出来た。けれども海軍は大砲を撃ち込み攻撃の手を緩める様子はない。

「このままじゃゴーイング・メリー号が沈められちゃう!!」
『!!』
「おお!!ナイスメア!!」
「な!?」
船を攻撃されてはたまったものではないとメアは能力を使い、銃弾が船に当たる前に止めていく。
「怯むなァ!!撃てェ!!!」
しかし海軍の攻撃も止むことはない。
そこで一旦三人は船を出すことにした。ここで沈むよりはマシとの判断である。そしてそこにやっとサンジが帰ってきた。ウソップが海に入りサンジを援護する。
メアもエスパーの力で必死に船の帆や舵を取るのを手伝うが潮の流れは強く、まだ非力なメアでは焼け石に水のような状態だった。
その時、一瞬雨が止み、とてつもなく強い突風が吹き抜ける。
メアは自分自身に能力を使うことで何とか船に踏み留まった。しかしナミ以外の男四人は未だローグタウンに残されたままだ。
「ルフィー!!ルフィー!!」
「ナミ!メア!」

「速くしねぇと流されていっちまう！」
「よーしゴムゴムのぉーー！うりゃあーーーー！」
「なぁ!?」「待てっ!?」「ヤな予感が…」
「ロケットオオオォォォォォォ!!!」
逃げる三人を巻き込みルフィは無理矢理全員を船に乗り込ませる。それにナミとメアは驚きながらもホッと胸をなで下ろす。
よかった…
「うっひゃー!!船がひっくり返りそうだ!!」
「あの光を見て！」
あの光が導きの日、あの先にグランドラインの入り口があるとナミは言う。
「あの先にグランドラインが…」
「よっしゃ、偉大なるグランドラインに船を浮かべる進水式でもやるか。」
「おおう！」
「おぉーー！いーぞ！」
「やりましょう！」
「♪」

「俺はオールブルーを見つけるために。」
「俺は海賊王！」
「俺は大剣豪。」
「私は世界地図を描くために」
「おお俺は、勇敢なる海の戦士になるためだ！」
「!!」
「あぁ、メアもね」
　身長の届かないメアはサンジに支えてもらいながら足を樽に乗せる。
「行くぞ!!グランドライン!!」
「おお!!」

リヴァースマウンテン

その後一味はカームベルトへと侵入してしまいながらも、しっかり本来の航路を進んでいた。

いよいよグランドラインに入るとあり、ルフィも浮き足立っている。かくいうメアも冒険の匂いを感じ取りワクワクしていた。

ぐらんどらいん…ぼうけん…どんなとこだろう…？

期待と興奮と、様々な感情が入り交じり上手く言葉にならない感覚だ。

しかし一つ問題があるようだった。

「これを見て」

ナミの差し出した海図にはグランドラインの入り口は山だと描かれているのだ。他の仲間たちもにわかには信じられないようだった。メアからすれば船は山を昇らないということを初めて知ったのだが。

「舵とんの手伝ってくれよぉ!!」

「サンジくん、ウソップを手伝って上げて。うるさくて考えられないから。」

「ハーイ！ナミさん♡よっと…ん？」

「な、何だか海流の流れがキツいだろォ？」
「え？」
ウソップの言葉を聞きナミは暫し考える。そしてやはり船で山を登ると言ったのだ。ゾロは未だ信じられない様子だが、ナミは海図を指差し皆に見るよう促す。
「いい？導きの日が射していたのは間違いなくここ。レッドラインにあるリヴァースマウンテン。」
「おい!!コイツはどうすんだよ!!」
ウソップの声も気にせずナミは話を続ける。
四つの海の海流が全てこの山に向かって流れているとしたら、四つの海流はこの運河を駆け上り頂上でぶつかりグランドラインへ流れ出るということだ。
さらにリヴァースマウンテンは冬島であるため、このレッドラインにぶつかった海流は表層から深層へ潜るという。
「誤ってグランドラインに入り損なったりしたら、ゴーイング・メリー号はレッドラインの岩壁にぶつかって船は大破。海の藻屑って訳、分かる？」
「はー、なーるほど。よーするに不思議山なんだな。はっはっはっ」
「…まぁ分かんないでしょうけど…」
??かいりゅー？うんが？ひょーそー？しんそー?????

「…まぁあんたは分かんなくて当たり前だけどね」
ちなみにメアもよく分かっていなかった。
こちらは0歳児なので無理はないが。
とにかくこの船は海流に乗っているため、舵取りさえ間違わなければリヴァースマウンテンまで一気に昇れると、考えすぎて頭の中が回りそうなメアを撫でながらナミは言った。
「聞いたことねェな船で山越えなんて。」
「俺は少しあるぞ。」
「不思議山の話かァ?」
「いやグランドラインに向かったヤツらは入る前に半分死ぬと聞いた。簡単には入れねェと分かってたさ」
どうやら大変な事になっているのはメアにも何となくわかったようだった。
そしていよいよリヴァースマウンテンが見えてきた。
大きい…
とてもそんな一言では片付けられない、しかしメアはそれ以外に言葉を知らなかった為の感想だ。

あれが、あの巨大な岩壁がレッドラインなのだ。てっぺんは雲で見えない程に高く、横を見てもどこまでも壁が続いている。凄まじい嵐の中にあっても尚、それは堂々とした威厳すら感じられるかのようだった。

「うわああぁぁ吸い込まれるぞォォォ!!ォ!!舵をしっかり取れェ!!!」

「まかせろ!!」

このままでは壁にぶつかりそうだが、ナミはそのまま真っ直ぐ進むよう指示する。

「ナミ、あれが運河の入り口か?」

「恐らくね。」

嘘みたいだが確かに海が吸いこまれるように山を駆け上る。

…なんだかよくわからないけどすごい…

ナミと色違いのレインコートを着せられたメアはその光景にポカンと口を開けてしまっていた。

「あの水門を上手くくぐり抜けるのよ!でないと船がバラバラになっちゃうからね!?」

なんとかリヴァースマウンテンに入ろうとする一味だったが、ここで舵が折れるという悲劇が起こる。

「「舵がーー!?!?!」」

『!?』

これには流石のメアも驚いた。能力で補おうとするもメア一人の力ではどうにもならない。

「ゴムゴムのォ！風船!!」

とっさにルフィが船とリヴァースマウンテンの間に入り込み、大破を免れた。

なんとかリヴァースマウンテンに入る事ができてナミは胸をなで下ろし、ウソップとサンジは興奮する。

「「入ったー!!!!!!!!!!」」

『!!!!』

ゴーイング・メリー号がリヴァースマウンテンを駆け上がる。これで後は一気に頂上まで行けるようだ。その様子にメアも大はしゃぎである。

「すげぇ!!!雲の上に出ちまったぞ!!」

頂上では雲よりも高く駆け上った水は気温の低さに結晶となり、砕け散る。

「見て！頂上よ！頂上だわ！」

そして頂上を越えたメリー号は一気に落下するメアは慌てて自分に能力をかけて落下の衝撃を減らす。

どんなしまがあるのかな！

どんなぼうけんがあるんだろう！

「この先のどこかにワンピースがあるんだァ!!」
みてみたい！わんぴーすをみてみたい！
メアはこの先の冒険に胸を高鳴らせていた。

クジラ

メアたちはクジラに飲み込まれていた。
どうしてそんなことになったのか、事は数分前に遡る。
無事にリヴァースマウンテンに入り、山を運河と共に駈け下りていたゴーイング・メリー号の目の前にそれは突然に現れた。黒い壁のような山のようなそれは、しかしどちらでも無かった。
それは巨大なクジラであったのだ。
『!?』
あまりの巨大さ故にメアは腰を抜かし尻餅を付いてしまった。
「あ、そうだいいこと考えた――!」
「ルフィ!?なーにすんのよー!?」
メアが呆気に取られている間にルフィは何かをやろうとしているようだった。
そして子供のため学習能力の高いメアは、それがまた面倒事を起こすだろうという予測までしていた。
ってそんなことを考えてはいる場合ではない、何とか船をあのクジラに当たらないよ

うにしなくては、とメアも

微力ながら能力を使い男たちに混ざり舵を動かそうとしていた。

『んんんん!!!』

「もうだめ…」

ナミがそう思ったその時、突如大砲が発射された。

しかしそれでも船は止まらず、メリー号の可愛らしい船首がバキリと折れる。

「最悪…死んだかも」

「うえええええぇぇ!?!?俺の特等席いいいい!?!?」

メアの予感は的中した。ある意味これが初めての女の勘かもしれない。

こちらの存在に気づいてないのかとも思われたクジラだったが、次の瞬間大きな鳴き声を上げる。それは人間にしてみれば耳をやられかねないほどの大音声だった。それでも早くこの場を離れようと一同は必死にオールを漕ぐ。

「ルフィ…?」

「お前…俺の特等席に一体何してくれたんだァ!!」

「「ドアホーーーーー!!!!!」」

『……』

ルフィがクジラの目玉に向かってパンチを繰り出す。

…ええ…

流石のメアもこの展開は予想など出来なかった。

そしてクジラの目がメリー号に向けられる。

「どうだァ!!コノヤロウ!!かかってこい!!」

それでもケンカを売るルフィをゾロとウソップが蹴り飛ばす。

だが次の瞬間にはクジラは大きな鳴き声を上げ、船が吸い寄せられていく。

『!?!?!?』

その際にルフィはその衝撃で船から落ちてしまった。しかし器用にもクジラの歯を伝い、頭まで辿り着く。

けれどもメリー号はすっかりクジラに食べられてしまっていた。

そして現在、メアたちはクジラのお腹の中で島と家を見つけていた。

「あの島と家は何なの…?」

「幻だろ…」

バシャアアアア!!!

「じゃあこれは…?」

「「ダイオウイカだーーー!!!!」」

こちらをジッと見つめるダイオウイカにゾロとサンジが攻撃体勢に入ったのも束の間、どこからか槍が飛んできてダイオウイカを仕留めてしまった。そしてダイオウイカは島の方へと引き寄せられていく。

『…?』

一体どんな人物が住んでいるのかメアはちょっぴり緊張しているようだった。

「花だ!!」

「花ァ?」

「違う、人か…」

「何だアイツ…」

『……』

家の中から出てきたのは、頭に花びらのようなものが生えたおじいさんだった。

「……」

「……」

「……」

「何か言えよテメーー!!」

たまらずサンジがツッコむ。

「や、やるならやるぞコノヤロー!!こっちには大砲があるんだ!!」

「……やめておけ、死人が出るぞ。」
「へぇ、誰が死ぬって?」
「私だ。」
「オマエかよ?!?
!?」
『ハァ…』
　メアはソッと息を吐く。
…なんだか悪い人ではないような感じである。
　そしてやはりここはクジラのお腹の中で間違いないようだった。メアは普通のクジラのお腹の中にも島があるんだと思っているようだが、その場にその間違いを正せる者は誰もいない。どうでもいいがその後しばらくメアのこの勘違いは訂正される事は無かった。
「や、やっぱりクジラに喰われたんだ…けどこれがクジラの胃の中なのかァ!?」
「ちょっと待ってよ!?どうなんのよ私たち!?消化されるなんてやーよー!!」
「……」
「……」
「……」
「いやそれはもういいって!!」

「繰り返しのギャグってのをしらんのか？」
「「ギャグかい!!」」
「出口ならあそこだ」
「「出られんのかよ!!」」
空やカモメもこのおじいさんが描いた絵のようだった。曰く医者の遊び心だとか。
結構お茶目なおじいさんのようだ。
けれど次の瞬間一同は大きな揺れに襲われた。
「なんだァ!?」
「始めたか…」
「見て！」
ナミが指を差したおじいさんの島は、実は島ではなく鉄の船であったのだ。当然だ、こんな所に木造船で長居していては、胃酸で溶けてしまう。
「おおい！何を始めたんだ!?説明しろーー!!」
「このクジラが、ラブーンがレッドラインに頭をぶつけ始めたのだ。」
くじらがれっどらいんに…？なんで…？
メアにはクジラの行動の理由が分からなかった。
「そっか、それがあのジジイの狙いか！」

「多分体の中からこのクジラを殺す気なんだわ！」
「あくどいやり方しやがるぜ…」
このおじいさんがクジラを…？メアは皆がいうソレをにわかには信じられなかった。

しかしそんな事を言っている場合では無いようだ。早くでないと船が溶けてしまう。けれどもクジラが暴れているせいで出口の扉まで辿り着けそうもない。
『あっ!!』
「おじいさんが飛び込んだわ!!」
「あぁ？何する気だ？溶けちまうぞ…」
どうやら入ったらまずいこの海に飛び込んだおじいさんをメアは心配する。
みんなはいったらとけちゃうっていうけど、おじいさんはどうなっちゃうの…？
そんなメアの心配は杞憂であったようで、おじいさんは溶けてはおらず、扉に掛かる梯子を登っている。そして何故だかルフィと謎の二人組が扉の向こうから飛びだしてきた。
「『!?』」
なんでるふぃがここに??
もうメアの頭の中はパンク寸前であった。

ラブーン

謎の二人組は近くの町のゴロツキで、このおじいさんはクジラ…ラブーンを守っているだけのようだった。

そしてラブーンがレッドラインに頭をぶつけているのには何か訳があるそうだ。

「アイランドクジラと言ってな、ウエストブルーにのみ生息する世界一デカい種のクジラさ。食料になどさせるものか。」

せかいいち、おおきいんだ…

メアはその凄さに圧倒される。

「コイツはな…人の心を持ったクジラなのだ…そしてひたすらある海賊を待ち続けている…５０年間も。」

わたしたちとおなじ、ひとのこころを…

５０年という時間の長さなどメアには想像も付かない。メア以外の一味だってその半分も生きてはいないのだ。

一同はおじいさんからラブーンの昔話を聞くことになった。

ラブーンはウエストブルーの気のいい海賊たちと共にこのレッドラインを超えて双

子岬へとやってきたようだった。ラブーンにとってはその海賊たちが自分の群れ、すなわち仲間だったからだ。そして船が故障して数ヶ月そこに停泊していた為にクロッカスとも交流があったようだった。出発の時、その海賊船の船長はラブーンをクロッカスに二、三年預かって欲しいと頼んだそうだ。その後船は双子岬を出港しグランドラインへと入っていったと。

「もう５０年も前の話になる。」

「５０年も!?」

「ラブーンは５０年もソイツらを待ってるのか?」

「だから吠え続けるの?体をぶつけて壁の向こうに…」

「あぁ…」

『……』

ずっとまってるんだ…らぶーんは…

メアはなんだか胸が締まるような思いだった。ちょっぴり目が熱くなる。

そして一同はクロッカスの作った水路から外へ出る。この水路も医者の遊び心だというのだ。

「私はこれでも医者なのだ。昔は岬で診療所もやっていた、数年だが船医の経験もある。」

「ホントかよ？じゃあウチの船医になってくれ！」
ルフィがクロッカスを船医に誘うが、無茶をやる気力は無いとあっさりと断られてしまう。
「医者か…それでクジラの体の中に…」
「これは治療の痕なのね。」
「そういうことだ。これだけでかくなってしまうともう外からの治療は不可能なのだ。」
メアにもやっとクロッカスがクジラの中にいた理由が分かった。
「開けるぞ。」
遂にクジラの中の扉が開かれて、麦わらの一味は外へ出ることが出来た。
「出たあああぁぁぁ!!!本物の空あああぁ!!!」
「しっかし５０年か、随分待たせるんだなその海賊達も。」
「バーカここはグランドラインだぞ、死んでんだよ。もういくら待とうが帰ってくるもんか」
『!?!?!?』
その言葉にメアは衝撃を受ける。
じゃあらぶーんは？やくそくは？
「確かに５０年前といえば、ここは今よりさらに混沌とした恐ろしい人跡未踏の海域

だったわけだもん…」
「てめぇらなんでそう夢の無ェこと言うんだよ！まだ分かんねェだろうが！帰ってくるかもしれねェ！いい話じゃねェかよ…仲間との約束を信じ続けるクジラなんて…そうだろ!?おっさん!?」
「…ああ、だが事実は残酷なものだ。確かな情報で確認した、ヤツらは逃げたしたんだ。このグランドラインからな。」
「そんな…まさかこのクジラを置いて…!?」
　カームベルトを生きて出られたとしても、弱い心ではグランドラインの恐怖に飲まれ二度とここへは戻って来ないだろうというのがクロッカスの意見だった。
「見捨てやがったのかこのクジラを!?コイツは５０年も待ち続けてるのに!?そりゃヒドいぞ!!」
　らぶーんはずっと…まっているのに…
　その話にメアは目から涙が溢れ落ちていた。胸が苦しくてなんだかとても悲しい。
「それが分かってるんだったらどうして教えてあげないの!?あのクジラは人の言うことが理解できるんでしょ?」
「言ったさ、全部包み隠さずな。」
　それでもラブーンは信じなかった。信じたくなかったのだろう。その気持ちはメア

にも痛いほど分かった。
「それ以来だ。ラブーンがリヴァースマウンテンに向かって吠え始めたのも、レッドラインに自分の体をぶつけ始めたのも。まるで今にも彼らは壁の向こうから帰って来るんだと主張するかのように…」
「なんてクジラだ…」
「待つ意味も無ェのに…」
待つ意味を無くすからクロッカスの言葉を拒むのだと言う。待つ意味を失う事が何より怖い。故郷への帰り道も無く、だからこそ仲間だった彼らだけが希望なのだと。
サンジはクロッカス自身も裏切られたのだからもう放っておく事はしないのかと問うが、クロッカスは５０年も一緒にいるのだ、このまま見殺しになどできないと言う。
その話を聞いてしんみりとしてしまったメアの横をルフィが通り過ぎる。見ればその両手にはメインマストがあり、クジラの傷口にそれを叩き込んだ。
「って船こわすなよぉーーー!!!」
そうすれば当然の事ながら痛みにラブーンは暴れ始める。
「なにやっとんじゃーー!!お前ーーー!!!」
『!?!?』
もはやメアのしんみりとした気持ちなど吹っ飛んでしまった。

引き分け

　その後ルフィはラブーンとケンカをしていたようだったが、あえてそのケンカを引き分けにした。
「俺たちの勝負はまだ付いてねェんだ。だからまだ戦わなきゃならない。お前の仲間は死んだけど、俺はずっとお前のライバルだ！」
「必ずもう一度戦ってどっちが強いのか決めなきゃならない！」
「俺たちゃグランドラインを一周したらまたお前に会いに来る。」
「そしたらまた、ケンカしよう!!」
　ラブーンの目から涙が溢れる。ルフィはラブーンに新しい約束を、待つ意味を与えたのだ。
　よかったね…らぶーん…
　その様子にメアも感動し、ラブーンと同じように涙ぐむ。メアには初めての悲しみと約束だった。
　その後ルフィはラブーンの頭に戦いの約束として下手な海賊旗を描いていた。メアはルフィの予想以上の絵の下手さに内心ビックリして涙が引っ込んだ。

「俺たちがまたここへ帰ってくるときまで頭ぶつけてそのマークを消したりするんじゃねェぞ？」

「ブオォォ」

その様子をクロッカスは微笑ましく見守る。

そしていつの間にか謎の二人組は消えていたようだった。

ドカアアアァァアァアン

『⁇』

派手な爆発が遠くで起こったのをメアは目撃していたものの、それがまさか任務に失敗した謎の二人組に対するお仕置きだということに、メアが気づく訳も無かった。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――

「ブオォォ‼」

『♪♪』

メアはラブーンと戯れていた。まだ幼い子供と一際大きなクジラ、互いに言葉は話せないがそれでも二人は楽しそうに遊んでいた。ラブーンがメアに体をこすり付けるよ

うにすると、メアもラブーンの手触りが面白いのか真似をしてひっついている。
「あああああああぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」
「『!?』」
突然のナミの悲鳴にメアとラブーンはビックリしてしまう。どうしたんだろうとメアがナミの元へと駆け寄ると他の仲間たちも続々と現れた。
ナミが叫んだ訳はコンパスが方角を指さないからだった。しかしルフィとメアは事の重大さを今一つ理解しておらず、クルクルと回るコンパスをつついて遊んでいたが。
聞けばこのグランドラインは一切の常識が通用しない。コンパスも壊れているわけでは無いのだとクロッカスは言った。この海のデタラメさは噂以上にとんでもないものようだ。
けれどメアにしてみればそんな難しい話よりもルフィが飯を食べ始めているほうが問題だった。なにしろルフィの食欲は凄いのでぼうっとしているとあっという間に全て食べられてしまう。
基本的にはサンジがメアの料理は守ってくれてはいるが、何度か奪われそうになることもあった。
メアは慌てて手を合わせ、料理に齧りつく。そしてその美味しさにまるでほっぺたがとろけるかと思ってしまった。

お、おいしい!!おいしい!!!

普段はサンジからテーブルマナーを教えてもらってはいるが、こんな美味しいものの前で作法など気にしてられないとルフィさながらに料理に食らいつく。

奪われないように能力を使って料理をたぐり寄せ必死に食べる。

ものの数分であっという間に机の上の皿は空っぽになっていた。勿論その内訳は九割がルフィであるが。

難しい話を続ける一同にお腹が一杯になったメアは少し眠くなっていたが、話の中にワンピースという言葉を聞き一気に目が覚める。

どうやらワンピースはラフテルにあるというのが有力な説らしい。

「そんなもん、行ってみりゃわかるさ!」

「あー飯も食ったし準備すっか!」

『(コクリ)』

「お前ら二人で食ったのか!?」

「骨までねェし!」

「おのれクソゴム!俺はナミさんにもっと!ナミさんにもっと!食って欲しかったんだぞ!!!」

「ゴフウゥゥ!!」

サンジがルフィを蹴り飛ばした風圧でログポーズが粉々に砕け散る。
「ってぇ～なにすんだ」
「思い知ったかクソゴム」
「サンジくん…」
「ハーイナミさん♡」
「二人とも頭冷やしてこおおおぉぉぉぃぃぃぃ!!!!」
「うあああああぁぁぁぁぁぁ!!!!／♡♡♡♡」
ログポーズを壊したことに対するナミの制裁が加わった。

「おい、ちょっと待て、それってもの凄く大事なモンだったんじゃねーのか!?」
「大事な…ログポーズが…」
「慌てるな、私のをやろう。ラブーンの件の礼もある。」
どうやらログポーズは無事クロッカスから新しい物を貰えそうだ。
ラブーンがルフィとサンジ、それに謎の二人組を陸に打ち上げてくれた。
「はぇー死ぬかと思ったー」
「おい、頼みがある。」
王冠を被り頬に9と書いてある男がそう口にした。

聞けばウィスキーピークまで連れて行って欲しいのだと言う。そこにこの二人は住んでいるらしい。どうやら自分たちの船も壊れて無くなってしまったようだ。
「虫が良すぎるんじゃないＭｒ．９?クジラ殺そうとしといてさ?」
「お前ら一体何モンなんだ?」
「王様です。」
そう答えるＭｒ．９の頬をナミが嘘つけと抓る。
どうしても自分たちの身分を明かしたくは無いようだった。謎がモットーの会社であるのだと、だから何も喋る訳にはいかないと。しかしそれでも町へ帰りたいと言う。
「あなた方のお人柄を見込んでお願い申し上げます!」
「受けた恩は必ずお返しします!」
クロッカスも、ロクなモンじゃないと怪しげな二人を船に乗せることに反対する。
「ところで私たちログポーズ壊しちゃって持ってないのよ、それでも乗りたい?」
「なにーー!?壊しやがっただと!?俺のじゃねーかそりゃあ!!」
「下手に出てりゃつけ上がりおって!!あんたらもどこへも行けないじゃないかーー!!」
「あぁ!!でもクロッカスサンにもらったのがあったか～」
「!?あなた方のお人柄でここは一つ…（クソ!カマかけやがったあのアマ!!）」
そんな二人に船に乗ってもいいとルフィは声を掛ける。

続けてウィスキーピークへいってもいいとも。
ウソップは反対するが細かいことは気にするなとサラリと受け流す。
「しかし航路を選べるのは始めのこの場所だけだぞ。」
そうクロッカスは言うが、
「気に入らねェ時はもう一回りすりゃいいじゃん!!」
ルフィはその言葉にそう言って返す。
「さぁ、そろそろ行くか。クジラと約束したしそろそろ出港の準備だ!」
「あなた一体何者なの?」
「俺か?俺は海賊王になる男だ!!」
「そろそろ良かろう、ログが溜まったはずだ。地図通りの場所を示したか?」
「うん。ウィスキーピークを指してる。」
「じゃーな、花のおっさん!ログポーズありがと!」
「あぁ、行ってこい!」
「じゃーな!行ってくるぞクジラ!!」
「ブオォォォォォ!!!」
ルフィたちはラブーンとクロッカスに別れを告げる。
らぶーん、またね…

メアも心の中で別れを告げた。

「ウィスキーピークに向けて、全速前進!!!!」

「おーーー!!!!」

「ブオオオオォォォォォォ!!!!!!」

大きなクジラは別れを告げる。いつか再び出会う日を夢見て…。

ウィスキーピーク

双子岬を出港し一本目の航路に入ったメアたちを待ち受けていたのは、とんでもなくデタラメな天候だった。

『(ブルブル)』

メアは初めての寒さにすっかりやられナミの腕の中に収まっていた。ナミも子供体温で温かいためメアを抱きかかえていた。ルフィとウソップは上着も着ないで雪だるまを作っているようだが、メアにはその感覚は理解出来ない。

どんなからだしてるの…

卵から孵った人間にまでそう思われるとは、ある意味凄いのだろうか。

バリバリッ

『ひっ!?』

一瞬で空が黒に染まり、雷が落ちてくる。メアはその音に軽くパニックになっていた。

『え!?!?ええ!?!?』

「落ち着きなさい、ただの雷よ」

ナミにそういって宥められる。
「けど一体どうなってんのここの天候は…？」
先ほどまでは晴天だったのに突然の雪、しかもこんどは雷まで鳴る始末。噂以上のとんでもない天候だ。
「それがここグランドラインなの」
「君ら何も分かってないようだな」
「さっきからずっと舵取ってないけど大丈夫？」
Ｍｓ．ウエンズデーのその言葉にナミは先ほど方向は確認したと言うが、再びログポーズに目を向けると進路と１８０度違う方向に進んでいた。
「あああああぁぁぁぁぁ!?!?!」
ナミは急いで皆に指示し、船を旋回させる。
Ｍｒ．９とＭｓ．ウエンズデーも蹴り出され船の舵取りを手伝わされる。
こうしちゃいられないとメアも能力を使いできる限りのサポートをする。本当は雪が冷たくて寒いがそんなことを言っている場合ではない。
「おい、待て！風が変わったぞ!!」
「嘘っ!?」
こんどは日差しが差し込み、強風が吹き荒れる。

「春一番だ!!」
「何で!?」
　皆は忙しく船の中を駆け回る。一難去ってまた一難。今度は大きな氷山が目の前に現れる。正面からぶつかれば、メリー号がただでは済まないだろう。
「波が高くなってきた！十時の方角に氷山発見！」
「ナミさん！霧だァ!!」
「何なのよこの海はァ!!?」
　そんなことを言っている間にも氷山はすぐそこまで迫ってきている。メアはサンジとナミと舵を取るのを手伝う。何とか正面からの衝突は免れたが、今度は掠った船底に穴が空いてしまったようだ。
「おい、船底で水漏れしてっぞ!!」
「すぐに塞がなきゃ!!」
「うっしゃあ！」
　雲の流れがとても速く、あっという間にまた黒い雲に覆われてしまった。
「風だわ!!」
「デカい!!」
「…来る！」

このまま風を受けては転覆してしまうと帆を畳むようナミは皆に指示する。そしてサンジが食事を持ってきてくれた。小さなメアの口は一個食べただけで一杯になってしまう。苦しさに慌てて飲み込みナミの手伝いに行く。

帆も裂け、さらにもう一カ所船底に穴が空いてしまい、一味はもうてんやわんやだ。

それでも何とかこの嵐を乗り切ったようで、また穏やかな気候に戻ったようだ。

極度の疲れにメアは床に倒れ込む。見れば他の者達も皆同じようだった。

「あーよく寝た。ん?おいおい幾ら気候が良いからって全員だらけすぎだぜ、ちゃんと進路は取れてんだろうな?」

「『(お前……)』」

やっと起きてきたゾロに湧いてきたのは初めての殺意だった。

そしてやっと二人組がこの船に乗り、ウィスキーピークへ向かっていることも知ったようだった。

ゾロは二人組のことを何か知っている風だったが、後ろからナミがそれをど突く。そのまま3発の拳骨をお見舞いされていた。

ナミ…こわい…

そしてメア、初めての恐怖である。

ナミはまだまだ気を抜かないように声を掛ける。自身の航海術が一切通用しないか

ら間違いないとも。
だいじょぶかな…
皆の心には不安しかない。
「大丈夫よ、それでもきっと何とかなる！その証拠に、ホラッ！一本目の航海が終わった。」
ナミが指を差す先には、霧の向こうにうっすらとサボテンのような島が見えていた。
「うはは!!」
「おー!!」
「ここがウィスキーピークか。しっかし妙ちくりんな島だなぁ。」
「デッカイサボテンだぜっ！」
Ｍｒ．９とＭｓ．ウエンズデーは船の縁に乗り、ルフィたちに礼を言うとそのまま泳いで島の方角へ向かっていった。
「行っちゃった…」
「一体何だったんだ…？アイツらは？」
「ほっとけェ、上陸だァ!!」
島には川が見え内陸に入れそうだった。ただし化け物やら何やらがいる可能性もある。ここはグランドラインなのだ。

ナミは全員に滞在しなければならない時間について説明する。ログポーズが磁力を記録出来なければ次の島を指すことは出来ない。つまり、化け物がいてもすぐには出港が出来ないのだ。

ルフィはそしたらその時考えりゃあいいさといつもの調子で言う。

「ルフィの言う通りだ、行こうぜ。考えるだけ無駄だろ。」

「何があってもナミさんとメアちゃんのことは俺が守るぜ！」

ゾロとサンジもルフィの意見に賛成のようだ。

「おい、待てみんな聞いてくれ…急に持病が…島に入ってはいけない病が「じゃあ入るけど、」

ナミはウソップの言葉を遮り話を続ける。ちなみにメアはウソップの嘘を心配していた。

「いい？逃げ回る用意と戦う準備は忘れないで。」

「いや…だ、だから俺の持病が…」

『!?!?!』

メアはその後すぐウソップの嘘だと教えられていた。

裏の顔

わぁあああああぁぁぁぁぁぁ

ようこそグランドラインへ!!!!!!!!

島を警戒する皆に釣られてメアも緊張していたが、待ち受けていたのはまさかの歓迎の嵐だった。真逆のそれに最初は困惑するメアだったが、段々注目されている状況に恥ずかしくなったのかゾロの足にひっついてしまった。それを見て更にかわいいーといった声が掛かる。

それにますます顔をリンゴのように赤くする。

『／／／』

なんだかはずかしいな…

メア、初めての照れである。

その後、イガラッポイというウィスキーピークの町長が挨拶に来た。この町は酒造りと音楽が盛んな町のようで、それらでメアたちをもてなしてくれるようだった。

「「喜んで!!!!」」

「三バカ……」

ルフィ、ウソップ、サンジはその誘いにすっかり浮かれてしまっている。ナミとゾロは未だ警戒が抜けていないようだが。ナミがログの溜まる時間を聞いてもイガラッポイは旅の疲れを癒やすようにというばかりで、質問に答えない。

メアには何だかあの男が答えをはぐらかしたようにも見えた。少しの不安が芽生え、ゾロの足をギュッと両手で掴む。

「…大丈夫だ。」

それに気づいたゾロはメアの頭を撫で落ち着かせる。

いよいよ宴が始まるようだった。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

宴は随分と盛り上がっていた。

ウソップは法螺話に花を咲かせ、サンジは綺麗な女性に囲まれてうっとりとしてしまっている。

ルフィはコックが倒れるほど料理にがっついていた。

メアは近くにゾロとナミもいる安心感からか殆ど何も食べる事も無く眠ってしまっていた。恐らくは昼間の事でかなり疲れていたのだろう。持ってきてもらった毛布を掛けて、この煩さの中でもスヤスヤと眠っていた。

メアが眠っている間にも宴は続く。ナミは乾杯競争に参加するようだった。勿論賞金が出るものだ。皆思い思いにこの宴を楽しんでいる。

「いや、ホント…何よりで…」

そんな一味に気づかれないようにイガラッポイは裏の顔で笑った。

ーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

ゾロとナミもベロベロに酔ってしまい、ルフィもコックが三人倒れるほどの料理を食べ尽くしていた。

ウソップとサンジもそれぞれ酔っ払っているようだ。

しかしこれはウィスキーピークの町民全てがグルの暗殺計画だったのだ。

皆より早く眠っていたメアは、皆が眠った後、コソコソと動き回る町民たちを怪しみ、ひっそりと後を尾けてイガラッポイ…いやＭｒ．８の話を聞いていた。

たいへんだ…このままじゃみんなやられちゃう…

そうメアが焦ったその時、

「なぁ、ワリいんだが、アイツらを寝かしといてやってくんないか？昼間の航海で皆疲れてんだ。」

ゾロ…！よかった…！

ゾロは油断していなかったようだ。町民の殆どが集まっているようだが、ゾロの強さを知っているメアは大丈夫だろうとその場を後にする。なんだか安心したからか眠くなってきたのだ。ここはゾロに任せてもう一眠りしようと、メアは再び部屋に戻り眠りについた。

出港

「おい！メア！起きろ!!」
『んんぅ…??』
　メアはルフィに声を掛けられ目を覚ました。
　未だに少し寝ぼけているが、取りあえずこの島から出港することだけは何となく分かった。
「いくぞぉっ!!!」
『んむぅ…』
　サンジとウソップを引きずるルフィを、目をこすりながらもメアは追いかける。
「アダダダダダダダダ!!!」
「痛ェ!?何だ!?何だ!?」
　引きずられてゆく二人の悲鳴で頭が覚醒してきたものの、ルフィのただ事ではない様子にメアは声を掛けるのを躊躇ってしまう。
「おぉい、連れてきた！」
「いつでも出せるぞ。」

船ではゾロが出港の準備をしていたようだ。肝心のルフィが連れてきたサンジとウソップは、先ほど引きずられた衝撃で軽く意識を失っているようだが。
それとなぜかＭｓ．ウエンズデーと呼ばれていた水色の髪の女性もいる。状況は全く分からないが、とにかく今は敵という訳ではなさそうだ。それにいつの間にかカルガモも乗っていた。
「よっしゃあ！いくぞぉ!!」
帆を張りメリー号はウィスキーピーク出港する。
「おい、いったいどれくらいの追っ手が来てやがるんだ?」
「分からない。バロックワークスの社員は全部で二千人くらいはいて、この町のような拠点がいくつかあると聞いているわ。」
「まさか、ホントに二千人も…?」
そこでようやくサンジとウソップが目を覚ましたようだ。現状が全く分かっていない二人はまだこの町で過ごしていこうと叫んでいる。
ゾロが二人に説明をしてやれと言うがナミが面倒くさいところは省いたと拳骨で沈めていた。やはりナミには逆らわないでおこうと思うメアだった。
辺りが明るくなってくる。
朝も近くなり、辺りは霧が発生していた。

「あぁ、追っ手から逃げられて良かった。」
「ホントよねぇ。」
「船を岩場にぶつけないよう気を付けなきゃね。」
「まっかせときなさい！って今のルフィ？」
「いや、」

「……いい船ね。」
振り返るとそこには紫の帽子を被った、見たことの無い女が手すりに座っていた。
「ひっ!?」
「なっ!?誰だ!?」
「あ、あんたは…!?」
女の口振りからして、どうやらそのバロックワークスに関係のある人物らしい。
「何であんたがこんな所にいるのよ!!Ｍｓ．オールサンデー!!」
彼女はこの件の黒幕である、クロコダイルのパートナーのようだ。最もメアは周りの人間の会話から何となく事態を察しているだけで、バロックワークスやクロコダイルの存在や危険性も分かってはいないが。
Ｍｓ．ウエンズデーが何らかの理由でバロックワークスに潜り込もうとしていたの

も、彼女は最初から知っているようだった。
「あんたの目的は一体何なの!?」
「…さぁね。」
Ｍｓ．オールサンデーは、本気でバロックワークスを敵に回して国を救おうとしている王女様が、あまりにも馬鹿馬鹿しいと言った。
おうじょさま?えほんでよんだことある…
Ｍｓ．ウエンズデーの正体が王女だったことにメアはビックリしてしまった。ドレスもティアラも付けてはいなかったが間違いないようだ。
それにしてもＭｓ．オールサンデーの言い方は何となく嫌な感じがするなとメアは思った。あまり好きではないかもしれないとも。
「ナメンじゃ、ないわよーー!!!」
一斉にそれぞれが武器を構える。しかしそれらをいともたやすく弾いてしまった。彼女自身は指一本動かしてはいない。まさか悪魔の実の能力者だというのか。全員の頭にその考えがよぎる。
しかし一体何の能力なのか、そう考える内にまた能力を使ったのか、ルフィの帽子が風もないのに彼女の元へ飛ばされる。それにルフィは帽子を返せと怒り狂う。
そしてＭｓ．オールサンデーは麦わら帽子を被り、一味も王女のことも不運だと言っ

た。けれど一番の不運はログポーズが示す次の進路だと言う。
「次の島の名は、リトルガーデン。」
　Ｍｓ．オールサンデーはバロックワークスが何も手を下さなくともアラバスタへ辿り着けず、全滅するとさえ言う。しかしみすみす全滅するのも馬鹿な話だと彼女は王女にログポーズにも似たものを投げ渡した。
「…エターナルポース。」
「それでリトルガーデンを飛び越えられるわ。」
　その指針が示すのはアラバスタの一つ手前の何もない島らしい。バロックワークスの社員ですら知らない航路であると彼女は話す。
　ナミは良いヤツなのかと混乱するが、ビビとゾロはあからさまに警戒している。
　ビビがそのエターナルポースをどうすべきか迷う所へルフィが近づく。そして次の瞬間、そのエターナルポースを握り壊してしまった。ナミにはアイツが良い奴だったらどうするのかと詰め寄るが、
「この船の針路をお前が決めんなよ!!」
「…そう。残念ね。」
　ルフィは、Ｍｓ．オールサンデーはイガラムを爆破したから嫌いだという。
「私は威勢のイイヤツは嫌いじゃないわ。生きてたらまた会いましょう。」

「ヤだ!!」
その答えに微笑み、Ｍｓ．オールサンデーはデッカイ亀に乗りメリー号を後にした。
そんなＭｓ．オールサンデーを何を考えているか分からないとビビはいうが、ナミやゾロは、ならば考えるだけ無駄だという。そういうヤツはここにもいるからと。
その後訳の分からなかったサンジ、ウソップ、メアに状況が説明された。
「…私、本当にこの船に乗ってて良いのかしら…」
そう弱気になるビビにナミは、迷惑を掛けたくなかったら初めからそうしてと言う。ナミが同意を求めルフィへと聞けば腹減ったぞー!と至極どうでも良さそうな答えが返ってくる。
困惑するビビの手を、心配そうな表情でソッとメアが撫でる。その行動の理由が分からずナミに説明を求めると、ビビに元気になってほしいのではないかとナミは言った。
こんな小さな子にまで心配されてるようでは駄目ね、とビビはメアの頭を撫で返し、もう大丈夫だと告げる。
その様子にメアは心配そうな表情から一転してニパッと弾けるような笑顔を見せる。
か、かわいい!!
その笑顔に胸を打ち抜かれるビビと、そんなことは知りもせず首を傾げるメア。そん

な二人の様子を一味は温かく見守っていた。

発音練習（番外編）

新しくこの船に乗ったビビは一味で一番幼い幼女であるメアのことを観察していた。

『あ〜う〜あ〜♪』

まだ言葉は話せないようだが、他の仲間たちの真似をしているのか最近では歌を歌うことも多くなった。

自作の歌なのか音程も歌詞も滅茶苦茶でよく分からないが、メアがご機嫌で歌っているその姿はそれだけで癒やされる。時折こちらを向いてえへっと笑った顔にはつい、こちらも笑顔になってしまうほどだ。

『あ〜♪あ〜〜♪う〜〜♪』

「しっかし最近のメアはよく喋るようになってきたな。」

「ホントね、そろそろ私たちの名前も言えるようになってきたかしら？」

歌うメアの姿を見てそうウソップとナミは言う。その会話を聞き、ルフィが自分の名前を言ってみるように詰め寄るが、そんなにすぐしゃべれるか！とナミに殴られる。

「ってーぞナミ!!」

『なみ？』
「そーだ！ナミの拳骨はじーちゃんと同じくらい…って」
「「うえええええええええええ?!?!」」
　メリー号にメアを除く全員の絶叫が響き渡った。
「おい、メア!!俺の名前も呼んでみろ!!」
「いや、俺のが先だ!!」
　ルフィとウソップが自分の名前も呼んで欲しいとばかりに詰め寄るが、メアはそんな二人を前にしても困った表情を浮かべ、あーうーとしか言わない。
「クソォ…何でナミの名前だけ…」
「多分発音しやすいんじゃねェのか？」
　拗ねる二人にサンジはそう声を掛ける。
「二文字で尚かつ濁点なんかも無いしな。一番呼びやすかったんだろう。いやーそれにしてもメアちゃんは良い子だなー！」
「お前はメアの親父か！」
「サンジは良いのかよォ、メアに呼んでもらわなくて。」
「そりゃあ呼んで欲しい気持ちはあるが、それ以上にナミさんの名前をメアちゃんが言えるようになったことのほうが俺は嬉しいぜ!!」

メアを抱き上げすっかり親バカモードに入ってしまったサンジに、これは何を言っても無駄かと悟るウソップ。しかし何か言いたげにあーと言うメアにサンジがどうしたと問いかける前にメアが口を開く。

『しゃ、しゃんじ』

「!?!?」

「ナミの次はサンジかー」

名前を呼ばれたサンジはその衝撃にその場に蹲り、何やら悶えている。ナミはそんなサンジからそっとメアを引き離すと、もう一度自分の名前を呼ぶように催促する。

「メア、メア!もっかい言ってごらん!私の名前は?」

『なみ!』

「よくできました!」

そう言ってナミはメアの頭を撫で回す。ナミに褒められてメアも上機嫌のようだ。

「メアー、俺の名前も呼んでみろよー」

ルフィも呼んでほしそうにしているが、メアは上手く発音出来ずに苦戦しているようだ。

『うーいー、うーい』

「んー、言おうとはしてるみてェなんだけどな…」

「やっぱりメアには難しいんじゃない？ルフィって」
『うー、りゅ、りゅふぃー！』
「おっ!!」
「近くなってきたな！」
　何度か発音する内に段々と発音が近くなってきたようだ。
「もう少しだメア!!」
「ルフィだ！るーふぃーい！」
『うー、りゅー、りゅー』
「がんばってメア!!」
　その様子を全員が固唾を飲んで見守る。
『りゅー、るふぃー！』
「おっ!!!!!」
「おおー!!!!!」
「言えたっ!!!!!」
　遂にメアがルフィの名前を言えた。その瞬間一味は歓喜に湧く。
「メアー!!よくやったなー!!!」
『キャッキャ!!』

メアも皆から褒められて嬉しそうに笑う。
ウソップが俺も俺もとメアに詰め寄るがメアの口からでた言葉はしかし、ウソップの名前では無く予想外のものであった。
『にく！』
「肉ゥ!?」
「何だメア、腹減ったのか？」
にく！にく！と続けるメアにサンジが何か気づいたように呟く。
「もしかしたらメアには肉＝飯ってことなのかもな。」
「ん？肉は飯だろ？」
「メアは肉よりも卵料理とかのほうが好きだ。けどルフィが飯の度に肉って言うモンだから、飯のことを肉って言うんだと覚えちまったんだろう。」
「あーなるほど！」
確かにそろそろ飯にすっかとサンジが言うとルフィが飯ー！と言い、メアもにく！にく！とルフィに続く。
「よし、今日の晩飯はメアの好きなオムライスにすっか！」
『っ！しゃんじー！』
ほっぺたが落ちそうなほど美味しかったオムライスをメアは思い浮かべ、口の端から

はジュルリとヨダレが出そうになる。
「オラ、さっさと手ェ洗ってこい。」
「「はーい!!」」
『あーい！』
今日の夜はきっとメアが初めて名前を呼んだ記念として宴をすることになるだろう。
ビビは心が温まるのを感じると共に、改めてこの船に乗ることが出来て良かったと一人思った。

怪我（番外編）

「あっ!!」
最初に叫んだのは誰だったか。それに気づいた時にはもう遅く、メアは思いっきり顔から床にビタンとすっ転んでいた。
「お、おい…メア、大丈夫か?」
それを間近で見ていた一人であるウソップは、未だ動きが無いにメア恐る恐る話しかける。そうすればメアはおもむろに顔を上げる。その顔は自分の身に一体何が起こったのか分からず呆然としているようだった。
「おーい?メア?」
もう一度ウソップが呼びかけた声でやっと意識が戻ってきたようで、メアの真ん丸の大きな瞳からはポロリポロリと涙が零れ落ちる。
『ふえぇぇぇぇぇぇぇぇぇん!!、』
メアの大きな泣き声がメリー号に響き渡った。

――――――――――――――

ーーー

はメアに近づく。
「おい、メア。」
『ふぇぇぇん…ヒック…』
「メア、お前は海賊だろう?」
　メアの隣に膝を突きゾロは問いかける。
「海賊ならこんな怪我くれェで泣くな。」
『うぅ…』
　コクリとメアは頷く。その目にはまだ涙が溜まってはいるがどうやら泣き止んだようだ。
「よし!」
　そう言ってゾロはメアの頭を撫で、メアは嬉しそうにえへへっと笑う。
「おお!メアが泣き止んだ!」
「さすがゾロ!」
　他の仲間達もホッとした様子だ。
「そろそろおやつの時間だな。」
「今日は何だ!?」
「今日はアイスクリームだ。」

そんなルフィとサンジの会話にメアはあいすくりーむ?と首を傾げる。そのメアの様子にルフィが気づき、まだメアは食ったことないのかーと言いアイスっつーのはなと教えてあげる。

「ひゃっとして甘くてうめーんだ!」

『!!』

それを聞き、メアの瞳は先ほどの涙とは対称的にキラキラと輝く。

「サンジー!アイスー!」

いち早くキッチンへ向かうルフィを慌ててメアが追いかける。その姿に走るとまた転ぶわよとナミが声をかけたものの少し遅かったようだ。

ビタン!!

再びメアが盛大にすっころぶ。

ウソップとナミはあちゃーというような表情だ。

メアはうるうると瞳に涙の膜を張ってはいるもののさきほどとは違い、泣き叫んだりはしていない。

それにゾロは気づきメアの頭を再び撫でる。

涙を滲ませているがメアは満足げにしている。さしずめ、もう泣かないもんと言っているような表情だ。

そんなメアをゾロはフッと笑い、その子供らしく軽い体を抱っこしてキッチンのテーブルに座らせた。

リトルガーデン

麦わらの一味を乗せたゴーイング・メリー号は次の目的地リトルガーデンへと向かい航路を進む。
「雪ィ降らねェのかなぁ。」
「降るわけねェだろォ。」
「降るんだぞォ。オメー寝てたから知らねェんだよ」
「？」
『ゆき、ちゅべたい。』
ゾロとルフィはそんな会話する。その隣に座っているメアは昨日の雪を思い出し、その冷たさに身を震わせた。メアはあまり外へは出なかったがウソップとルフィはなにか雪像のようなものを作っていたし、案外面白いものなのだろうかとも考える。次に降ったら自分も遊んでみようか。
「なぁ雪はまた降らねェのかなぁ？」
「降らないことも無いけど、一本目の海は特別なのよ。リヴァースマウンテンから出る七本の磁力が全てを狂わせていたから。…だからって気を抜かない事ね。」

ビビは一本目の航海ほどに荒れ狂う事は稀だが、普通の海よりもはるかに航海が困難であることに間違いないと続ける。
「決してこの海を舐めない事、それが鉄則。」
「おおぃ野郎共!!俺のスペシャルドリンク飲むか?」
『すぺさる!』
そこへサンジがスペシャルドリンクを持ってきた。メアや他の男達もそれを飲もうと集まって来る。
『おいち!』
「そーか、そりゃ良かったぜ!」
最近では美味しいも言えるようになったメアはその美味しさにグビグビと一気飲みをし、頭がキーンとしてしまう。
『!?!?』
「そんなに急がなくても無くなったりしねーから落ち着いて飲みな。」
「シシッバカだなーメアは!!」
メアはルフィにバカと呼ばれるのは何だか不満な様で頬を膨らませる。それをウソップが突くと簡単に空気が抜けてしまい、面白がられて何度も頬を突かれる。
『キャッキャ!やー!』

メアも先ほどの不機嫌さはどこへやら、嫌と言うが楽しそうな声を上げる。
その様子にビビは何か言いたげな顔をしており、そこにナミがやってくる。
「いいの!?こんなんで!?」
「はい、アンタの。」
「え…?」
「いいんじゃない?時化でも来たらちゃんと働くわよ、アイツらだって。死にたくはないもんね。」
「それはそうだけど…何か気が抜けちゃうわ…」
「悩む気も失せるでしょ!こんな船じゃ。」
そのナミの言葉にビビは再び甲板を見やる。そこではカルーがサンジのスペシャルドリンクを飲み過ぎて目を回してしまい、ひっくり返っていた。そんなカルーを見ていた他の仲間達は愉快そうに笑っている。
それを見てナミはビビに視線を投げかける。それにビビは随分楽だと答えた。

ザバアアアアア!!
「おい皆見ろよ!イルカだぜ!」
『いりゅか!』

「わぁ！かわいい!!」
確か図鑑で見た事がある動物だとメアは思い出す。
だがそのイルカは…
「デカいわーーーーー!!!!」
図鑑よりも大分大きいようだったが。
「逃げろーーーーー!!」
ルフィのその言葉をきっかけに一味はイルカから逃げる。先ほどとは打って変わったその手際の良さにビビは呆気に取られる。メリー号はそのままイルカの起こした波に乗り逃げられたようだ。
そしてついに二本目の航海にも終わりが見えたようだ。
「間違いない、サボテン島と引き合ってる。私たちの次の目的地はあの島よ!!」
「ウッハハ!!」
「ホー!!」
『!!』
メアもワクワクが止まらない。
「あれが、グランドライン二つ目の島かァ!!」

ーーー

「上陸せずに次の目的地まで向かおうぜ!?」
『ぼーけんしないの？』
「ったりめーだこんなとこ!!何がいるか分かったもんじゃねェ!!」
　ウソップの言葉にメアは残念そうに眉を下げるも怒涛の反論を受ける。
「でもすぐにはログは溜まらないわ。」
「それにそろそろ食料を補給しねェとな。」
　ウソップの意見は却下されそうだ。その会話を聞き、メアの瞳はまたもキラキラと輝く。そしてどうやら河口から島へと上陸できそうだ。
「焼き肉屋あるといいなー！」
「んなモンあるかァ!!」
「だって言ったろォ？食料を補給するって」
「材料を集めるんだ！ったく何考えてんだテメーは!?」
　そんなアホな会話を聞きつつ、ナミは上陸は危険と反対する。
「大体見てよこんな植物！私図鑑でも見たこと無いわ。」
　ギャアアアアアア!!ギャアアアアアア!!
「「キャア!!」」
『わっ!!』

突然に何かの鳴き声が聞こえてくる。その鳴き声にメアは何の生物が全く検討が付かず、頭に?を浮かべる。
「かっわいい。」
「俺か?」
「ナミさんに決まってんだろう!!!」
「今の何なの!?」
「大丈夫さ、ただの鳥だよ。そしてここはただのジャングル、心配無ェ。」
　そのサンジの後ろに鳥のような生物の影が迫ってくる。
「うわあぁぁぁ!?!?!!」
「どした?」
『しゃんじ、うしろ!!』
!?何しやがるこのクソ鳥!!」
「トカゲかァ?ウメーのか?」
『なんだろー?』
　先ほどのアレはルフィの言うように確かにトカゲにも似ていたが、しかし羽が多すぎる。かといって鳥とも違うだ。
　一体アレは何なのか。メアの好奇心はもう押さえられそうにない。

ドカアアアアアアアン!!!

そこに謎の爆発音が響き渡る。

「これがただのジャングルから聞こえてくる音なの!?」

「まるで火山でも噴火したような音だぜ今のは…」

『あっ!!』

メアが何かに気づいたようで、茂みから姿を現したのは虎だ。

「虎ァ!?」

「デカすぎる!!」

虎は河口に浮かぶメリー号にピタリと張り付いたように着いてくる。しかし襲ってくる心配は無かったようだ。

「あっ!?」

虎は突然に血を吐き出し倒れたからだ。

その様子にナミは普通じゃないと狼狽える。

「なんでジャングルの王者の虎が血塗れで倒れるのォ!?」

それにウソップも頷き、上陸には反対のようだ。

船の上で静かにログが溜まるのを待って、一刻も早くこの島から出ようとナミは提案する。が恐らくはそんなことを言っても島へと上陸したがる人物もいるようだが。

「ニシシシシシ!!サンジ弁当!!」
「弁当?」
「あぁ!パワー補給だ!!肉一杯の野菜抜きの海賊弁当!!冒険の匂いがするゥ!!」
『メアも!おべんと!』
「ちょっ!ちょっと待ってよアンタたち!どこ行くつもり!?」
「冒険!!ニッシシ!!来るかァ!?冒険!!」
『ぼーけん!!』
「(ダメだ…止まらない…生き生きしすぎ…)」
「(嘘だろ…大虎ぶっ飛ばすバケモンいるんだぞ…)」
　最近ではメアもルフィに似てきたのか冒険という単語に心引かれるようだ。そこに関してはもう皆諦め始めている。しかしもう一人意外な人物が名乗りを上げた。
「ねぇ!私も一緒に行っていい?」
「えぇ!?!?」
「おう!!こいこい!!」
『びびもいっしょ!!ぼーけん!!』
「アンタまで何言うの!?」

「ジッとしてたら色々考えちゃいそうだし、ログが溜まるまで気晴らしに！」
「そんなァ!!ルフィはともかくあなたには危険過ぎるわ!!」
「大丈夫よ、カルルがいるから！」
「クエエエエエエ?!?!」
「本人言葉にならないくらい驚いてるけど…」
カルーはこの島の上陸にはあまり賛成では無いようだ。

そしてサンジは三人と一羽の弁当と飲み物を作り、ルフィとカルーに持たせる。
「さぁ！海賊弁当三丁にカルー用の特性ドリンク！全て入ったぜ!!」
「あぁ!!よっと!!」
「クワッ！」
『よっ!!』
「じゃあ行ってくるわね!!」
「おーし！行くぞー!!」
「おおよそで戻ってくるから!!」
『おー!!ぼーけん!!』
ルフィ、ビビ、メアはそのままジャングルへと探索に出かけ、ウソップとナミはビビ

の度胸の良さに唖然としていた。

巨人

『はっ!!はっ!!』
　リトルガーデンに上陸した三人は島の中を走り抜けていた。
「おっとと!!」
「どうしたの?」
『なにー?』
　突然に止まったルフィにビビとメアは何かあったのかと尋ねる。
「ほら、コレ見ろよイカみたいな貝がいるぞ!!」
『いかー?かいー?』
「これってアンモナイトによく似てる。」
『あもにゃにと?』
「イカガイだろ?」
　川でルフィが発見したのは既に絶滅したといわれているアンモナイトによく似た生物だった。
『ねぇるふぃ、びびなにあれ?』

メアも何かを見つけたようだ。ここからでは見えないと三人はそれに近づいてみる。
「何で丘に海王類がいるんだァ？」
「恐竜!?」
「恐竜ゥ!?」
『きょーりゅー？』
メアはまだ恐竜を分かっていないようだが、その姿にビビは驚きを隠せない。
「じゃあここは太古の島!?」
「んァ？」
「恐竜たちの時代がここに閉じ込められているのよ!!」
グランドラインにある島々はその海の航海の困難さ故に島と島との交流も無かったからそれぞれが独自の文明を築いているのだとビビは話す。
飛び抜けて発達した島もあれば何万年とも進化を遂げずにその姿を残す島もあると。グランドラインのデタラメな気候がそれを可能にしてしまうらしい。
「だから、この島はまさに恐竜たちの時代そのものなんだわ…」
「すっげェ!!」
「ルフィ!!」
『いいなー！』

ビビの話を聞いていたのかいないのか、恐らくは半分も理解出来ていないであろうルフィは首の長い恐竜に掴まる。
「飛びつくなーーー!!!」
『めあも！めあも！』
「メアも来るかァ？」
そう言ってルフィはメアを自らのいる恐竜の所まで腕を伸ばし連れてくる。
『すごーい!!』
「だろォ!?いい眺めだよな!!」
そんな二人に対してビビは焦る。
「危ないったら早く降りなさい!!大人しくても恐竜よ!!」
しかし二人はこのリトルガーデンの地形を面白そうに見ていた。
「大丈夫だよコイツ!!それよりあっちにデッケェ穴ぼこがあんだよ!!何か変な地形だぜ!!」
「地形なんかどうでもいいから降りてきて!!」
「なあ、物は相談だけどオメーあそこまで連れてってくんねーか？」
ビビの必死の叫びにも構わず、ルフィは自分の乗っている首の長い恐竜に話しかける。

だが勿論恐竜は無反応だ。
「なぁ、そんなケチなこと言わずにさぁ、連れてってくれよ。あっちだよ、あっち。」
『おねがい！』
勿論幼女の頼みでも無反応だ。
恐竜はムシャムシャと木に生い茂る葉を食べ続ける。
「そっちじゃなくて、ほらこっち!!」
グイッ!!
ブオオオオオオオオ!?!?
「するかァ!?!?」
『るふぃ、むいやいは、めっ!!』
なんとルフィは無理矢理に恐竜の首を向ける。それにメアはダメっと可愛く怒る。
辺りに恐竜の苦しそうな悲鳴が響き渡る。メアはそれに何だか嫌な予感を感じた。
「いやァワリィ…でもあのォ…」
「なっ!?!?」
ビビは驚愕する。なんと自分たちのいる恐竜の周りに他の仲間の恐竜達が集まってきたのだ。
「ウホホホホホ!!!!すっげェェェェェェェェ!!!!」

「ルフィさん危ないって!!さっさと降りてきなさい!!」
『ちょっとあぶないかも…』
「あっちの恐竜の方が高くて見晴らしが良さそうだ!!」
「そーじゃないでしょう!?!?!!」
『はぁ…』
「メア！掴まってろよ！」
そう言うとルフィはメアを自分の背中に掴まらせ、さらに高い恐竜へと乗り移る。
「やっぱりな、さっきの穴ぼこがよく見える!!」
『るひ！うしろ!!』
後ろから別の恐竜が襲いかかってくる。
「おおっと!!」
襲いかかってくる別な恐竜へとさらに乗り換え、次から次へ襲いかかる恐竜たちをルフィは躱していく。
ビビはそれにいつ食べられてしまうのかとドキドキだ。
そんなビビの心配も知らずにルフィは襲いかかる恐竜で遊んでいるかのようだ。恐竜の背中をすべり台のようにしている。
「ビビ!!こっち来るか!!楽しいぞ!!」

「「……」」
そんなルフィのようすにビビとカルーは言葉も出ないようだった。
メアは内心で恐竜たちにおもちゃにしてごめんと謝る。
「ここからの眺めは一際いいぞ～」
おそらくこの恐竜たちの群れで一番大きな個体の頭に乗り、ルフィは辺りを見渡す。
もう…すきにして…
ルフィに振り回されたメアはその背中にぐったりともたれかかる。
しかし休んでもいられないようだ。不意に恐竜の口が開き、ルフィとメアはパクリと恐竜に食べられてしまった。
「食べられてんじゃないのよーーー!?!?」
ビビとカルーは今日一番の驚きを見せる。だが驚くことはまだまだ続きそうだ。巨大な何者かがルフィとメアを食べた恐竜の首を切り裂く。おかげでルフィたちは消化されずに出ることか出来た。そしてその人物のこれまた巨大な手に受け止められる。
「ギャギャギャギャギャギャ!!、見ていたぞ、このジャングルの首長共と渡り合うとは生きの良い人間だな!!久しぶりの客人だ。」
「デッケーな!人間か?」

「人間か?ときたか、ギャギャギャギャギャギャギャ!!」
巨人は我こそがエルバフ最強の戦士であるドリーと名乗る。どうやら人間とはまた違う種族らしい。
「きょ、巨人…!!」
その圧倒的な存在感に思わずビビとカルーは腰を抜かしてしまう。
「俺はルフィ!海賊だ!!」
『わたし、めあ!!』
「ギャギャギャギャギャギャ!!海賊か、そいつは良い!!ギャギャギャギャギャギャギャ!!」
「あそこにいるのがビビとカルーだ。よろしくな!!」
コッソリと逃げようとしていたビビは内心で余計な事をと思う。
「ギャギャギャギャギャギャ!!お前達ウチへ招待しよう!!ギャギャギャギャギャギャギャ!!」
人間たちの心の内など知らず、気の良い巨人ドリーはどうやらルフィたちを気に入ってくれたようだ。

ーーー

ーーーーーーーーーーーーー

ルフィたちはドリーにもてなされ、恐竜の肉を振る舞われていた。ルフィはドリーとすっかり意気投合したようである。

「こりゃウメーな巨人のオッサン!!」

「オメーのこの海賊弁当とやらもいけるぜ!!ちぃと足りねーがな!!ギャギャギャギャギャ!!」

海賊弁当を不味いと言ったらぶっ飛ばすと言うルフィにドリーは面白れェチビだと笑い飛ばす。

そしてドリーの話ではグランドラインのどこかにエルバフという巨人族の村があるという。

きょじん…いっぱい…

メアはまだ見ぬエルバフに思いを馳せる。どんな所だろうか。建物は皆大きくて、人も巨大で…考えだすときりがない。

めあもきょじん、なれるかな?

子供の夢は発想力が違う。メアは自分が巨人になったところを想像する。

るふぃもびびも、みんなわたしよりもちっちゃくなっちゃうのかな!

いつもは見上げる事が多いメア。誰かを見下ろすのは彼女のちょっとした夢の一つである。

そんな想像をしている間に話は進んでいたようで、ドリーは百年もの間ある相手と戦いを続けているようだ。

ビビはそんなドリーになぜ百年も戦い続けるのかを訪ねるが、そこに巨大な噴火が起こる。

どうやらその噴火が戦いの合図だそうだ。

ビビは百年も殺し合いを続けるほどの憎しみとはどんなものなのか、争いの理由は何なのかと問うが、ルフィはそんなビビを止める。

ルフィには分かっているようだ。

それが誇りであると。

決闘

爆発音で目が覚める。

どうやら眠っていたようだ。まだまだ子供の体であるメアはお昼寝をしないといけない。先ほど昼食を食べたこともあり眠ってしまっていたようだ。

とそんな事情は置いておき、爆発音の正体は何なのかと寝ぼけ眼のメアは辺りを見回す。

ドリーが倒れ込んでおり、何故か彼の体からは煙が昇る。

『びび、どしたの？』

「分からない…突然ドリーさんが爆発を…」

詳しい事情はビビ達にも分からないようだ。

「巨人のオッサン!!」

どうやらドリーが飲んでいたのはメリー号から運んできた酒らしい。しかしならばおかしな話だ。船に積んである物に爆薬など入ってる訳もない。メアには事態がサッパリ分からなかった。

相手の巨人が爆薬を、というビビにルフィは一体何を見ていたんだと怒る。百年も

戦ってきた者が今更こんなことするかと。けれどであれば一体誰の仕業なのだろうか。
そんなことを考えている暇もなさそうだ。
「じゃあ、一体誰が…」
「キサマらだ…」
『るふぃ、びび!!』
ドリーはもう一人の巨人であるブロギーのことは信用しており、故にこちらの仕業であると剣を向けてきた。
「一旦逃げましょう!!多分今は何を言っても無駄!!」
「逃げても多分無駄だよ。」
そう言ってルフィはメアにちょっと持って下がってろと帽子を被せる。メアはルフィの言う通りにジャングルの方へと距離をとる。
「オッサンには悪いけど、ちょっと黙らせる。」
「二人とも止めて、お願い!!」
ビビは必死で説得しようとするがドリーはこちらの話など全く聞く様子も無い。
『びび、あぶない、はなれよ!』
メアが何とかビビの手を引き避難させる。
怪我を負っているとはいっても巨人は巨人。そのパワーは桁違いだった。ルフィも

盾であっさり叩き落とされてしまう。しかし先ほどの爆発の影響がまだ残っている為、攻撃の度に口から吐血している。

その度にメアは目を背けたくなった。

『うぅ…』

「ゴムゴムのォ!!ロケットオオォォォ!!!」

ルフィの攻撃がドリーの腹に決まる。しかしドリーの意識はまだ失われてはいなかった。

『!?!?』

ルフィがドリーの足によって踏み潰されてしまった。

『るふぃ!!』

「ルフィさん!!」

メアとビビは必死に叫ぶ。

そしてドリーもその場に倒れ込んだ。ルフィは何とか悪魔の実の力で無事だったようだ。

「ルフィさん、平気なの!?」

『だいちょーぶ?』

メアとビビはルフィに駆け寄る。

「オッサンは？」
「多分大丈夫…むしろこれぐらいじゃなきゃ大人しくしてくれないわ…」
メアはルフィに帽子を返し、その傷を心配そうに見る。
「俺は怒った!!」
「え!?」
『……』
「この酒はオッサンの言う通りもう一人の巨人のヤツの仕業じゃあ無ェし、俺の仲間はこんなくだら無ェ真似、絶対しねェ!!」
「じゃあ、一体…」
「誰かいるぞ…この島に。」

再び火山の噴火が起こる。火山の噴火は決闘の合図の筈だ。そのためドリーは決闘へ向かおうとする。
「おい待てオッサン!!行くな!!」
「ダメよドリーさん静かにしてなきゃ!!無理すれば死んじゃうわ!!」
『いっちゃだめ!!』
それを三人は止めようとするが、それでもドリーは向かうようだ。傷だらけの体を何

とか起こし、誇りを背負い向かう様は正しく戦士だった。
何を思ったのか突然ドリーは巨大な岩を持ち上げる。そしてルフィがそれの下敷きになってしまった。
「おおい!!何すんだオッサン!!この岩をどけろ!!」
「…止まれねェのさ。」
一旦始めた戦いから逃げることは戦士という名からも逃げるという事だとドリーは言う。
戦士でなくなれば、俺は俺でなくなるのだとも。
「悪かったな、お前らを疑った。」
どうやらルフィたちへの誤解は解けたようだ。
これは戦いの加護、エルバフの下した審判だと、自分には加護は無かったとドリーは続ける。
しかしルフィはそのドリーの考えに否定的なようだ。邪魔の入った決闘なんて決闘じゃないと言う。メアもエルバフやら加護やらは分からないがルフィの意見と同じような事を思う。
けれどたかが十年、二十年生きただけの自分たちにエルバフの高き言葉が聞こえるものかとドリーは決闘へ向かって行ってしまう。

えるばふ…ほこり…

難しいけれど、きっとそれはメアの思うより重く大切なものなのだろう。

いつか理解できるのかなとメアはドリーの決闘へ行く背中を見つめていた。

そうだ、どうにかしてルフィを助けなければとメアは思い出したようにルフィに駆け寄り、何とかして巨大な岩から助けだそうとする。

「折角スゲー戦士に会ったと思ったのに!!」

「ルフィさん…」

ビビには出会ったばかりの巨人の為に、どうしてここまでするのか疑問だった。とても懸賞金付きの悪党だとは思えないと。

「誰だ!!巨人達の戦いにケチ付けるのはーー!!!」

「…そういえばカルーがいない!」

そう言われてメアもカルーがいない事に気づいた。探しに行くべきか、しかしルフィをこのままにしていいものかと悩んでいたその時、ウソップが森から何かとんでもなく慌てたように出てきた。

「大変だーー!!ナミが恐竜に食われたーー!!」

「まーさーかーー!?!?」

『ええ!?!?』

「恐竜から逃げる為に一緒にジャングルを走ってたら突然いなくなって…あーー!!どーしよー!!俺は仲間を見殺しにー!!」
「ちょっ!!ちょっと待って落ち着いてよ!!二人とも!!」
「あーーーー!!
!!あ??」
「突然ナミさんが消えたって、じゃあ確認はしてないの？」
「ダアホがーー!!確認なんて恐ろしくて出来るかーー!!恐竜じゃなきゃ猛獣だ!!他に何がいるんだ!!」
　分からないがバロックワークスの追っ手の可能性もあるとビビは三人に告げる。ナミはウィスキーピークで抹殺リストに入っている為に、二人の内ナミだけが狙われた事にも納得がいくと。本来なら酒の事も自分たちを狙ったものだったかもしれないと。事情の知らないウソップにビビはドリーの事を説明する。
「何ィ!?!?胃袋で酒が爆発!?!?じゃあそんなボロボロの体で決闘場に!?!?」
　ルフィは止めたもののこの有様だと言う。
「多分世界で一番誇り高い戦いなんだぞ!?」
「あぁ…」
「こんな勝負のつき方があるかよ!?!?」
　そう思っているのは皆同じだ。その言葉に残りの三人も苦虫をかみつぶしたような

顔をする。

ドリーの血飛沫が見える。遂に勝負がついたのだ。

キャンドル

「お前らか!!」
　どこかへ居なくなっていたカルーを抱えて、謎の大男と傘を差した女がジャングルから出てきた。
　カルーはその男たちにやられてしまったのかボロボロだ。
「コイツは返す。必要無ェ。」
「キャハハハハハハ!!」
「カルー…!!」
「お前ら…!!おい、アイツら誰だ?」
　Ｍｒ．５とＭｓ．バレンタインのことを知らないウソップにルフィがウィスキーピークにいたヤツらだと説明する。
「何故アンタたちが…!!カルーには関係無いじゃない!!」
　ビビはカルーをやられた悔しさに叫ぶ。
「そうとも、この鳥には一切関係無ェ。ただ俺達が危険視していたのはその麦わらの男。ソイツと一緒にいる王女を一人おびき寄せる為にこの鳥に鳴いてもらおうと思ったん

だが…」
　カルーは怯えながらも決して鳴かなかったようだ。メアはその時のカルーはどれほど怖かったか、どれほど痛かったか、主人を守るためそこまでしたカルーに涙で目が潤む。
　しかしルフィは岩の下敷きとなり、もうカルーに用はないとＭｒ．５は言う。
「キャハハハハハ!!馬鹿な鳥ね。キャハハハハハハ!!」
　そのＭｓ．バレンタインの言葉にビビは怒りをあらわにする。
「アンタたち…!!」
「お前らなのか!!酒に爆弾を仕込んだのは!!」
　その問いに肯定しながら、リストには入っていないウソップを二人は不審がりながらも恐らくは仲間であるから消しておこうと話し合う。
「お前らが巨人たちの決闘を…!!!」
「アイツらかーー!!ぶっ飛ばしてやるーー!!!」
　ここでビビが動く。
「消えるのは、アンタたちよ!!」
「おー？足掻いてみるかＭｓ．ウエンズデー。」
「キャハハハハ!!私たちオフィサーエージェントにあなたが敵うの？」

「クジャッキースラッシャー!!」
「くらえ！必殺火薬星!!」
　ウソップの火薬星は確かに届いたように見えたが、Ｍｓ．バレンタインには躱されＭｒ．５には効いているように見えない。
「ノーズファンシーキャノン!!」
『うそっぷ!!』
　逆にこちら側が攻撃を食らってしまった。
「キャハハハハハ!!お気の毒!!」
「ウソップーーーーー!!!」
『うそっぷ!!うえ!!』
　まだウソップへの攻撃は止ま無い。
「一万キロブレス!!!」
『!!』
　あれは結構な衝撃だろう、果たしてあれを受けたウソップは無事だろうか。
「う〃わ〃ああああぁぁぁぁ!!!」
　ビビもＭｒ．５へと挑むが足元に爆風を受け、捕らえられてしまう。
「そうカッカしねーでも俺たちはまだお前らを殺しはしねーよ。ただ攫いに来ただけ

だ、Ｍｒ．３に言われてな。」
『…？』
「Ｍｒ．３!?ドルドルの実の男…!!アイツがこの島に…!!」
どうやらＭｒ．３という男が今回の黒幕だったらしい。ドルドルの実の蝋人間で体から絞り出す蝋を自在に操れるようだ。
「お前ら許さねェ!!」
「何が許さねェだ。」
そう言ってＭｒ．５はルフィとメアを爆破させる。
『うぅ…!!』
「メア!!」
幼いメアにはかなり堪えるようだ。しかしそんなことはＭｒ．５は気にする様子もなく爆破を続ける。
『だめ…るふぃ、めあがまもるの…!!』
「そこをどけ、ガキ。」
それでも尚、必死に立ち上がるメアをＭｒ．５が蹴り飛ばす。
『ぎゃんっ!!』
「いい加減しつけェんだよ!!」

流石のメアもとうとう動けなくなってしまった。
「お前…!!」
ウソップだけでなく、メアもやられてしまったルフィは本気で怒る。
だがルフィもＭｒ．５の爆破を受ける。ビビ以外の四人は動けなくなってしまった。
「キャハハハハハハ!!大人しくしなさい。あなたごときが本気でバロックワークスの追っ手から逃げ切れると思ってたの?キャハハ!!流石の三千万の賞金首もアレじゃあね。キャハハハハハ!!」
「ウィスキーピークでの礼が出来て嬉しいぜ。」
こういうデリケートな問題に海賊風情が首を突っ込むべきじゃ無かったとＭｒ．５は続ける。
「テメーの相棒の剣士ももう一人の女も捕獲済みだ。」
「…ゾロを捕まえた…?」
「あぁん?」
「じゃあ…お前ら斬られるぞ…!!」
「まだ口がきけるか、この俺のキッキーボムを顔面に受けておいて。」
「こんなもん効くか…!!お前らぶっ飛ばす!!」
「呆れた。」

「ハアアアアアアア!!」
ドカアアアアアアアアアアアアアン!!!!
「!?!?ルフィさんー!?!?」
「オラアアアア!!」
ルフィへの攻撃はまだ止まない。何発も爆破を体に受ける。ついにルフィは何も言わなくなってしまった。
「ケッ!!馬鹿が!!」
「ルフィさん!!ルフィさん!!」
「キャハハハハハハ!!」
「いくぞ、Ｍｓ．バレンタイン!!」
ビビは叫び続ける。
「ウソップさん!!カルー!!メア!!」
しかし一人ではどうすることも出来ずにビビは、Ｍｒ．５とＭｓ．バレンタインに連れて行かれてしまった。

ーーー

ーーー

ーーー

「そんなことしても無駄よ!!そんなことしてここを降りてもすぐ捕まっちゃうわ!!」
「そんなモンやってみねーでわかるかよ。ここにいたらどうせやられちまうんだ、見苦しく足掻いてみようじゃあねーか。」
　こんなカス相手に潔く死んでやる筋合いは無ェとゾロははっきりと断言する。これにはＭｒ．５も正気かと戸惑っている。Ｍｒ．３はハッタリ、強がりに過ぎないと言う。
　しかしその姿にブロギーも心を揺さぶられ、その提案に乗ったようだ。
「嘘でしょう!?本気!?そんなことしてどうやって戦えるっていうのよ!?」
「さぁな、だが勝つつもりだ!!」
　本気で足を切り落とすという策略に出るつもりらしいのにまるで勝機を失っていない。その姿にＭｒ．５はイかれてると動揺を隠せない。ビビはそのゾロの目にかつて自分の犠牲となったイガラムを重ねていた。
「待って!!私も戦うわ!!」
「ビビ!?」
「よし、分かった。」
「いくぞォ!!」
「ふざけるな!!何ができるものかァ!!」

「「『うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!!』」」
しかしそこに何かが飛んでくる。
「お前らぶっ飛ばしてやるからなァ!!」
それはルフィたち四人であった。
「やるぞウソップ!!メア!!鳥!!」
「おう!!」
『うん!!』
「クワァァァァァァ!!」
「ルフィ!!ウソップ!!」
「メア!!カルー!!」
四人が無事であったことにナミはホッとした。
「ブロギー師匠!!あんたの悔しさは俺たちが受け継いだぜ!!」
「ウソップ…!!」
「んもぅ!!そいつらホントに原型がなくなるくらいボッコボコにして遠くへぶっ飛ばしちゃって!!」
「あぁ、そうするさ!!コイツら巨人のオッサンたちの決闘を汚したんだ!!」
ルフィもドリーとブロギーの決闘に水を差したことを本気で怒っているようだ。

「君かね？イーストブルー最高額の賞金首とは？海軍本部も目が落ちたものだ！」
「あちゃー！変な頭ー！」
「やかましいガネ!!」
「あちゃー数字の３燃えてるし!!」
「黙れ!!」
『ははー！へんなのー!!』
　Ｍｒ．３のよく分からない頭にルフィは戸惑い、メアはケタケタと笑う。
「その前にルフィ、この柱壊して！私たち今蝋人形になりかけてるの!!」
「んぁ？なんだヤバかったのか？」
「いや、問題無かった。」
「ちょ!!アンタ足!?」
「あぁ、半分くらいいったかな。」
「それのどこが問題無いのよ!?」
『!?!?』
　ゾロは半分足を斬っていた。ルフィ達がくるのがもう少し遅ければ完全に斬れていただろう。
　その血溜まりにメアは背筋に悪寒が走る。

「とりあえずルフィ、この柱ぶっ壊してくれるか？後は任せる。」
「よしきた！」
やることは決まった。あの趣味の悪い蝋の破壊とナミたちの救出、そしてバロックワークスの幹部達をぶっ飛ばすことだ。
『フンッ!!』
初めての正面からの戦いにメアは意気込んでいた。

カラーズトラップ

早くナミたちを救わなければいけないルフィたちの前に、一つ問題が立ち塞がる。
先ほどまではＭｒ．３と戦っていたというのに、いきなり蝋でできたセットを壊すのはいやだと言い始めたのだ。
『なんで…』
まるで別人になってしまったようだ。どうしようかとメアはルフィを見たときにあることに気が付く。
あしのあれ…なんだろう?…
ルフィの足元には黒い何かのマークの様なものが書かれてあった。ついさっきまであんなものは無かった。
とりあえずあれの上からルフィを退かそうとメアはエスパー能力を使い、一瞬ルフィを浮かせてマークの上から退かせる。
『だいじょぶ?るふぃ?』
「あれェ?何か俺今変だった?」
「そうか！Ｍｓ．ゴールデンウィーク！あなたの仕業ね!!」

〝カラーズトラップ〟

どうやらあれは敵の描いたものらしい。感情の色さえもリアルに写し出し、絵の具を伝い人の心に暗示をかける。黒の絵の具はどんな大切な仲間の言葉も裏切りたくなるとのこと。

これは非常にマズい。ルフィには暗示などの類いは必要以上に効いてしまう。

あいて…わるいかも…

メアはちょっぴり不安げなようすだ。しかしそれでも早くしなければナミたちは蝋人形にされてしまう。この状況では自分が何とかしなければと、メアは気合いを入れ直す。

「ルフィさん早く!!」

「よしお前ら今助けるぞー!!…ぶはははははははは!!!お前らのことより笑いたいぞ!!!!」

「なんでーーー!?!?!?」

「オメーーー!?!?!?」

「今度は何ーーー!?!?」

「カラーズトラップ、笑いの黄色。ダメじゃない動いちゃ。」

今度は服にマークが描かれてしまった。ナミが服を脱ぐよう言っても笑いが止まらなさすぎて服が脱げないようだ。ナミはメアに何とかするように頼む。

「メアー！アンタだけが頼りなの！ルフィを何とかして!!」
『わかった!!』
そう返事をしたメアはエスパーで服を何とか脱がそうとするが、Ｍｓ．ゴールデンウィークがこちらにもカラーズトラップを仕掛けてこようとし避けるので一杯一杯だ。
はやくしないと、みんなかたまっちゃうのに!!
もどかしさからかメアに一瞬焦りが見える。その隙を逃さずに、Ｍｓ．ゴールデンウィークはメアにカラーズトラップを施す。
「カラーズトラップ、悲しみの青。」
『ふ、ふえええぇぇぇぇぇん!!』
「メアまで…!!」
悲しみの青によりメアは涙が零れる。
気持ちがドンドンブルーになっていく。
うぅ…かなしい…かなしいよぉ…
『ふえええぇぇぇぇぇん!!!』
僅かに残る理性としかしどうにも抗えない悲しみでメアは泣きじゃくることしか出来ない。
そしてルフィはＭｒ．５から逃げるウソップたちとの衝突で背中の絵の具が少し取

れたようだ。
しかし再びＭｓ．ゴールデンウィークが仕掛ける。
「カラーズトラップ、闘牛の赤。」
どうやら今度は赤のマークにしかルフィは攻撃出来ないらしい。さながら赤いマントに突進する闘牛の如く。
「だあああああぁぁぁもうお前許さん!!どっか行ってろ!!ゴムゴムのォ!!バズーカァ…」
「面白い?」
「ダメだ、戦いの相性が悪すぎる…パワーが全部空回り…」
仕上げにＭｓ．ゴールデンウィークは背中の黄色と悲しみの青を混ぜる。
「カラーズトラップ、和みの緑。」
「ズズ…お茶がウメぇ…」
「「アホかーーー!!!」」
「もう、メアも何してるのよ!!」
『うぅ…だって…』
メアは未だ泣き止まずむしろナミに怒られたと泣いてしまった。
だが、その大粒の涙も無駄では無かったようだ。メアの服に描かれたマークは正面で

あり、それが涙によって滲み効力を無くしていく。
『…やっとおさまった…』
何とかカラーズトラップから脱出したメア。
早くルフィを救わなければとウソップと合流し、カルーの背中に飛び乗る。
「必殺火薬星!!」
しかしその爆発はＭｓ．ゴールデンウィークではなく、ルフィを襲う。
『るふぃにあたったよ!?なんで!?』
ウソップの狙撃の腕を知っているメアは狙いを外した事に驚く。だがウソップに取っては予想通りだったようだ。
「いいんだよ！ルフィの服を燃やしたんだ!!それよりも弾が飛んで来ねぇ…？」
その瞬間爆発が起こる。Ｍｒ．５の能力により弾も見えないまま爆発するようだ。
「クソっ…無茶苦茶だ…弾が無ェだと…!?カルー、メア大丈夫か!?」
「クワァ…」
『うん…』
「おい、目ェ覚めたかよ…!!」
「あぁ!!覚めたサンキュー!!」
ようやくルフィも本調子になったようだ。メアはホッと一息つく。

「もう食らわ無ェぞ、あんな絵の具!!もう一人だって死なせてたまるかァ!!怒ったぞ俺はァ!!」

しかしＭｒ．５は仲間たちは手遅れだという。もう立派な蝋人形になると。

そこに森からＭｒ．３が出てくる。

「キャンドルゥゥゥゥゥ!!シャンディアァァァ!!」

何やら妙ちくりんな格好になっている。

「なんだアイツ…」

『なに…あれ…？』

けれどそのふざけた見た目とは裏腹にかつて４２００万の賞金首を仕留めたという。実力は確かなようだ。

「こうなったら私はもはや無敵!!鉄の硬度を誇る蝋でまろやかに体を包み込んだこの鎧…!!今の私に…死角は無い!!」

「…か、カッコイイ!!」

「見とれてる場合かーーー!!戦え!!」

「クワアアアアァァァ!!」

『えぇ…』

メアにはそのルフィの感性は理解できなかった。

そんなギャグをしている間に塗装が終わったようだった。見た目のセンスはともかく、確かに実力はあった。ルフィの攻撃が簡単には通らないようだ。
「ダメだ…！固くて攻撃が効かない…！」
『どうしよ…』
固まれば強度が鉄にまでなる蝋をどうやって壊せば良いのか。
『うそっぷ、どうにかできない？』
「どうにかってたって、お前…」
『だってさいしょはあんなにどろどろなんだよ!?なにかほうほうがあればどろどろにできない!?』
「蝋…？そうか、何で気づかなかったんだ…!!蝋は火で溶けるじゃねーか!!」
『じゃあ、みんなとかす!!』
「ルフィ!!コイツの蝋は火で溶ける!!いくら固くても蝋は蝋なんだ!!」
ゾロや巨人のブロギーたちもまだ固まって時間が浅い。救える可能性があるということだ。
「何イ!?ホントか!?」
「うん、ホントよ。」
「君が白状するな!!」

その問いになぜかＭｓ．ゴールデンウィークが答える。
しかし蝋人形までのタイムリミットは残り三十秒。それまでに救えなければ心臓も止まってしまう。
『はやくしなきゃ…!!』
「三十秒もいらねェ!!今助ける、必殺火薬星!!」
「フリーズブレスオン!!」
「ウソップーー!!!!」
蝋を火薬星で溶かそうとしたウソップを爆発が襲う。
『うそっぷ!!』
「クワアアアアア!!」
「勝機も無いと言ったのが聞こえなかったか?」
敵もそう簡単に溶かさせてはくれないようだ。
『うそっぷ!!うそっぷしっかり!!』
「クソっ…時間が…!!」
「やめておけ。」
「ぐわあぁぁぁ!!」
『るふぃ!!…?』

既に瀕死の筈なのにそれでもウソップは起き上がり、何か策を考えたようだ。
「いいか…このロープを…」
「あ～ら楽しそうね！何を企んでるの？アタシも混ぜてくれない？」
「…カルー…走れ…走れェ!!!何でも良いから蝋燭立ての周りを駆け回るんだ!!」
メアは素早くカルーに飛び乗る。
『かるー!!さぽーとはするから!!』
「！クワアアア

無いよりはマシだ。
「クワアアアアアアアアアアアアア!!」
『がんばって!!かるー!!』
ルフィがＭｒ．３の頭で燃えている炎に目を付けた。
「火で溶けるならこの火を使って溶かしてやる!!」
「ルフィ…!!そんな小さな火じゃ間に合わ無ェ!!カルーのロープに火を付けろ!!」
「クワアアアアアアアア!!」
『るふぃ!!はやくつけて、みんなをたすけて!!』
「鳥のロープに?」
「油たっぷりのスペシャルロープだ…!!」
「おーし!!みんなー!!起きろー!!」
『みんな!!おきてー!!』

うあああああああああちゃあああああ
リトルガーデンで巨大な爆発が起こった。

誇り

先ほどまでは美しい緑があったこの場所は、今や轟々と炎が燃え広がっていた。
ナミたちの居たキャンドルのセットもまた炎に包まれている。蝋が溶けたとしてもこれでは炎にやられてしまうのではとメアは心配になる。
すごい、ひ…なみたち、もえてないといいけど…
勢い良く燃える炎は空高くまで届いている。
そんなことを考えていたら溶けた蝋が上から降ってきた。メアは蝋を避けるカルーに必死に掴まっていたが、森へと逃げるＭｒ．３とＭｓ．ゴールデンウィークを見つけるとそちらへと向かうようにカルーに指示する。
『！かるー、あっち、ふたりにげた！おいかけて！』
「クワアアアアアア!!」
カルーも大切な主人を傷つけられ、あの二人への怒りがあるのだろう。威勢の良い返事と共に追いかけてくれた。
「鳥ィ!!メアァ!!」
「クワアアアア!!クワアアアアア!!」

「アイツらを許すな!!」
「クワアアアアァァ!!」
『うん!!』
「闘いを穢すヤツは男じゃ無ェ!!!」
　随分森の深くまで入って来たようだ。すると突然Ｍｒ．３が大量に現れる。恐らくはＭｒ．３のドルドルの能力とＭｓ．ゴールデンウィークによる塗装によってできた蝋人形なのだろう。
「よく来たな、ようこそドルドルの館へ。」
「なんだこりゃ！」
『たぶん、みすたー、すりーとかの、のうりょくだよ！』
「さぁ、私がどこにいるか分かるカネ？」
　大量の蝋人形にカルーとメアは戸惑う。これではまともに動く事すら躊躇われる。
一体本物はどこにいるのだろうか…。
「どうやら相手が悪かったようだネ。我らバロックワークスきっての頭脳派コンビ、本能のみで動くようなパワー馬鹿の君には我々を捕らえることはできん。」
「私はＭｒ．３。与えられた任務は完璧に遂行する。さぁ、足を踏み入れたまえよ。フフ！ハハハハハハ!!」

『どうしよう、るふぃ…』
　メアは困ったようにルフィに聞くが、ルフィは何も答えない。るふぃ？とメアが再び声を掛けようと思ったその時、
「ゴムゴムのォ!!スタンプーーーーー!!」
「!?な…ぜ…私が、本物だと…!?」
「勘。」
　まさかの勘。メアは呆気にとられた。全くの偶然なのか、しかしこんな偶然があるのだろうか。
　だが、そんなメアの考えは次の瞬間吹っ飛んだ。
　森の奥の方、一人の少女が顔を俯けて歩く。その姿は間違いなくＭｓ．ゴールデンウィークだった。
　メアとカルーは彼女の姿に怒りをあらわにする。
「クワアアアアアアアアアア!!」
『…ゆるさないから…』
「キャアアアアアアアアアアア!!」
　Ｍｓ．ゴールデンウィークの悲鳴がリトルガーデンの森に響き渡った。

ーーー

そう言ってブロギーがドリーを軽く叩く。
「イテテテ、傷には触るな…ギャギャギャ!!」
お返しとばかりにドリーも軽くブロギーを叩く。
そうすればまた軽い喧嘩になってしまった。
「やるのか貴様!!」
「叩き潰してくれる!!」
「何でまた喧嘩してんのよ!!」
でも…なんだか、たのしそう
メアはこの二人の間には本当に百年もの友情があるのだと実感した。

ドリーとブロギーは己の首に掛かっていた賞金の事などすっかり忘れていたようだ。
それでもビビは元はといえば自分の所為だと言うが、ナミにほっぺたを抓られる。
いたそう…
「そういうことは言わないの!」
「そうだぞビビ! 何しょげてんだ、煎餅食うか?」
「アンタそれどっから持ってきたの?」
『めあも!たべる!』

ルフィたちに至ってはどこからか持ってきた煎餅をボリボリと食べている。
「取りあえず煎餅パーティーだ!!」
『せんべーぱーてい?』
メアは初めての煎餅の堅さの前に四苦八苦しつつ、しゃぶり付いている。
「煎餅じゃ盛り上がら無ェだろ。」
「そうか?乾杯だって出来るぞ!」
「誰がアンタを恨んでる?」
その様子にビビの心も少し軽くなったようだ。
「乾杯ーー!!」
「あー、こら勿体無いだろ。ったく食いモン粗末にしやがって」
「あー!何すんだよ!誰が食わねェって言ったよ!!」
ルフィとウソップが取っ組み合いになる。
『キャッキャ!!』
その光景にメアは楽しそうに笑い声を上げる。
「しかし、次の島へのログが一年ってのは深刻だな…」
「そうよ、笑いごとじゃないの!」
その後改まりドリーとブロギーはルフィたちに礼を言う。

「お前達には助けられてしまった、何か礼をしたい。」
「そいじゃあ、なぁオッサンたちログを何とかしてくれよ!」
　しかし流石にログばかりは二人でもどうにもならないらしい。
　そこにすっかり忘れていたある人物がやってきた。
「ナミさーーーん♡♡ビビちゅわーーーん♡♡メアちゅわーーーん♡♡オマケ共!!」
「よう!!サンジ!!」
『しゃんじ!!』
「無事だったんだね♡良かった♡♡」
　ウソップとカルーはその姿に今頃現れやがってと怒りを抑えきれないようだ。
　なぜサンジが今まで現れなかったのか。それはＭｒ．０と電々虫で会話していたからだと言う。
　ジャングルの中に可笑しなアジトがあり、そこで自分たちの事は始末したと報告したらしい。
「じゃあ、私たちは死んだことになってるのね。」
「これで折角追っ手はこねーってのに肝心の俺たちがここを動けねーなんて…」
　そう嘆くウソップ。
「動けねェ?まだ何かこの島に用があんのか?折角〝こういうもん〟を手に入れたんだ

が。」

サンジが取り出したのは今一味が喉から手が出るほど欲しいアラバスタへのエターナルポースだった。

「アラバスタへのエターナルポースだァ!!」

「やったーーーー!!!!」

『やったーー!!!』

もはや諦め気味であった一味はそのエターナルポースの存在に歓喜をあらわにする。

「ありがとう、サンジさん!!一時はどうなることかと…!!」

「イヤイヤァ♡どういたしまして♡♡そんなに喜んでもらえるとは♡♡」

サンジもビビに抱きつかれて嬉しそうだ。

「おーし!みんな煎餅パーティーだー!!」

メアも新しい煎餅でナミと煎餅でタッチする。

「おい、マズいぞルフィ。残り三枚じゃ煎餅パーティーが出来無ェ!」

「何ィ!?」

「そんなことやってる場合じゃないでしょ!行くわよキャプテン!グズグズやってる暇はないの!」

宴好きのルフィも流石に急ぎの用の為に今回はこれで出港のようだ。

残りの煎餅を慌てて噛み砕き、メアも準備へと船に向かう。
「じゃあ、丸いオッサンに巨人のオッサン！俺たち行くよ！」
「そうか…まぁ急ぎの様子だ。」
「残念だが、止めはしねェ。国が無事だと良いな。」
「ええ、ありがと！」
「じぁなーー!!もう死ぬなよーー!!」
「クワァァァァァァァ!!」
「俺はいつかエルバフへ行くぜ!!」
『じゃーねー!!ばいばーーい!!』

ーーー

「よく見ろ!!俺のトカゲの勝ちだ!!」
『どっちでもいいよー…』
「いいじゃねーか、どっちも旨そうだ!」
「「テメーは黙ってろ!!」」
「ありゃー」
　ゾロとサンジの喧嘩の原因は狩り勝負らしい。どちらがより大きな獲物を取ったかというものだ。正直他の面々からすればどちらでもいいというのが本音だが。
「あーあ、アンタらいつまでやってんの?どうせ全部は乗らないんだから必要な分だけ切り出して!船出すわよ。」
「ハーイ!ナミさん!」
　それでも尚ゾロは食い下がる。
「なぁ、ウソップ!どう見ても俺の勝ちだろ?」
「あぁ?興味無ェ。」
「引き分けじゃダメなの?」
「早くしなさいーーー!!!」
　痺れを切らしたナミに怒鳴られ二人は慌てて恐竜の肉を切り出す。そして準備が終わり、とうとうこのリトルガーデンともお別れの時が来たようだ。

「出港だーー!!」
　ルフィのかけ声と共に船が出港する。ルフィはまだ恐竜の肉を乗せたがっていたようだが、これ以上は保存仕切れない上に船を沈める気かとサンジとナミに怒られる。
「あー!あれオッサンたちだ!見送りに来てくれたんだな!」
『ほんとだ!!』
　メアも身を乗り出してその姿を見る。

「この島に来た人間たちが、」
「次の島へと辿り着けぬ最大の理由がこの先にある。」
　ドリーとブロギーは語る。
「お前らは決して我らの誇りを守ってくれた。」
「ならば我らも如何なる敵があろうと、」
「友の誇りは消して折らせん。」
「我らを信じて真っ直ぐ進め!!例え何が起ころうとも真っ直ぐにな!!」

「分かった!!」
「何だ一体…?」
「何が分かったんだ…?」
「何があっても真っ直ぐ進む!!」
『……』
なにがおこるんだろう…?
メアはこの先の出来事にソワソワと落ち着かない様子だ。

「お別れだ。」
「いつかまた会おう。」
「必ず。」

「見て!!前!!」
ナミの指差した先には巨人族の二人にも引けを取らないくらいの巨大な金魚がいた。
このままではこの金魚に飲み込まれてしまう。
「何だコイツは…金魚か?」
『きんぎょ…?あれがきんぎょ?』

金魚を初めて見るメアは一人あれが金魚なのかと?気に思う。
「き、巨大金魚!?どこかで聞いたような…?」
「舵きって!!急いで!!食べられちゃう!!ウソップ早く!!」
「!ダメだ!!真っ直ぐ進め!!そうだろルフィ!!」
「勿論だ。」
しかし巨大な金魚の口の中、喉の奥まで見えてきた。それにナミはラブーンの時とは違うと焦る。それでもルフィは船を動かす気は無いようだ。ゾロにも諦めろと言われ、ナミはルフィに投げられた煎餅を齧る。
「ルフィ!!アイツら信頼出来るんだろうな!?」
「うん!!」
「正気!?本当にあの怪物に突っ込んでいくの!?」
「ダメ!!もう間に合わない!!」
メリー号が完全に金魚の口の中へと入る。とうとう金魚の口が閉められた。

その瞬間、光が見えた。

「「覇国!!」」

病気

「うひょー!!飛び出たーーー!!!」

巨大な金魚に飲み込まれたかと思ったゴーイング・メリー号は、ドリーとブロギーの技、覇国により無事に海へと戻ってこられた。

「振り返るなよ!!行くぞ!!真っ直ぐ!!」

海ごと削り取るかのような光景がこの技の凄まじさを物語っている。

「「友よ!!さぁ、行け!!」」

「ゲーギャギャギャギャギャ!!」

「ガバババババババ!!」

見事に折れた二本の武器を海へと投げ捨て、二人は麦わらの一味の姿を見送った。

「みんな、俺はな!!いつか絶対エルバフへ!!戦士の村へ行くぞォ!!」

「おう!!よーし!!」
「きょーきょー巨人♪エールバフバフエールバフバフバフ♪みんな高いぞ巨人だし♪」
『きょーじーん♪きょじーんはおっおきいなー♪』
ルフィ、ウソップ、メアはリトルガーデンを出ても興奮が収まらず、オリジナルの歌を歌っている。
「元気ね…アイツら。」
対称的にナミは何だかグッタリしている。
「フゥ…何だかアタシ、さっきのでどっと疲れちゃった。ビビ、これ指針見ててくれる？…」
ナミがビビにアラバスタへのエターナルポースを手渡す。
「ええ。」
「クワァ？」
渡された指針を見ているビビの表情はどこか重たげだ。
「これでやっとアラバスタへと帰れるわね。ま、最もアラバスタへの航海が無事に済めばの話だけど。」
「ええ、私は必ず帰らなきゃ。だって今王国を救う方法は…」

私にしかできないのだから。イガラムの覚悟を思い出し、ビビは改めてその思いを胸に刻む。
「必ず生きてアラバスタへ…」
その様子に一味も深刻そうな表情になる。しかしその空気を変えようとサンジがスイーツを持って階段を降りてくる。
「そう力むことは無ェよ、ビビちゃん。俺がいる！」
サンジはそう自分を指差して言うと今日のリラックスおやつをビビへと差し出す。
「サンジさん…」
ビビもその気遣いに少し緊張がほぐれたようだ。
「「うまほーーーー!!!」」
「クワァァァァァァァァ!!」
『わぁ!!』
「野郎共の分はキッチンだ!!」
そう告げられるや否やルフィ、ウソップ、カルーはキッチンへと急ぐ。野郎で無いメアはサンジの持つ皿から一つおやつを口に運び、その美味しさに震えていた。
『んま!!』
「フフ…」

「……」
『…なみだいじょーぶ?』
心配したメアが声を掛ける。
「大丈夫よ、メア。気にしないで。」
そうナミは言うものの、額には大粒の汗が浮かんでいる。勿論メアは暑くなど無い。明らかに可笑しい。
「ビビ?ごめん、アタシちょっと……部屋で…」
メアには先ほどそう言ったが、もはや目の焦点が合わずナミは限界を感じていた。
「いいわよナミさん。針路なら私が見てるから部屋でゆっくり休んで。」
「うう…」
『なみ!?』
ドサリとナミの体は崩れ落ちた。その様子にビビとメアはナミの元へと駆け寄る。
ビビが額に手を当てる。
「大丈夫!?みんな来て!!大変!!」
『たいへん!!』
「何だァどうしたビビ?!」
「ナミさんが酷い熱よ!」

「!?!?ナミさんがァ!?!?」

ナミはもはや意識も朦朧としているようで、息をするので精一杯といった感じだ。

一同は取りあえずナミをベッドへと運ぶ。

「ナ〝ミ〝さ〝ん〝死〝ぬ〝の〝か〝な〝ァ〜ビ〝ビ〝ち〝ゃ〝ん〝…」

部屋には荒いナミの息づかいが響く。ビビはそんなナミの額に濡らしたタオルを絞って乗せる。

「恐らく気候の所為。グランドラインに入った船乗りは必ずぶつかるという壁の一つは異常気象による発病。どこかの海で名を挙げたどんな屈強な海賊でも、これによって突然死亡するなんてザラにある話。」

ちょっとした病状でも死を招くとビビは続ける。

「い〝い〝〜〜ナ〝ミ〝さ〝ん〝…」

サンジはナミのその苦しそうな姿に泣き続ける。

「この船に少しでも医学を齧ってる人はいないの?」

そのビビの問いに対してサンジ以外の残りの三人がナミを指差す。つまりそのナミがダウンしてしまった今誰もいないということだ。

「でも肉食えば治るよ病気はァ!なァ!サンジ!」

「そりゃあ基本的な病人食は作るつもりだがよ…あくまで看護の領域だ。それで治ると

は限らねェ…そもそも普段の航海中から俺はナミさんとビビちゃんとメアちゃんの食事にはテメーらの百倍気ィ使って作ってる。新鮮な肉や野菜で完璧な栄養配分。腐りかけた食いモンはちゃ～んとオメーらに」

「っておい!!」

「それにしちゃあウメェよな!」

サンジがこの船のコックである限り、普段の栄養の摂取に関しては一切の問題を起こさないという。だが病人食となるとそれには種類があり、どういう症状で何が必要なのか、その診断が自分には出来ないと続ける。

「ほんじゃー全部食えば良いじゃん。」

「そういう事する元気が無ェのを病人っつーんだよ…」

「よ、四十度!?また熱が上がった…!」

『なみぃ…』

メアは涙目でナミを見る。

「アラバスタへ着けば当然医者もいるだろォ?あとどれくらいかかるビビ?」

「分からないけど…一週間では無理。」

例えアラバスタに着いたとしても、それまでにナミが手遅れになっていたのでは意味が無い。

「病気ってそんなにツレーのか？」
「いやァそれはかかったこと無ェし…」
『？』
「あなたたち一体何者なのーー!?!?」
　言わずもがなメアもまだ病気にはかかったことはない。
　辛いに決まっている。四十度の高熱なんて早々でるものではないとビビは語る。
「もしかしたら命に関わる病気かもしれない…」
「「!?えーーーーーー!?!?!?

「ダメよ…」
「ナミさん!?」
「おー! 治った!?」
「治るか!!」
　意識を取り戻したものの、やはりナミは辛そうだ。
「アタシのデスクの引き出しに新聞があるでしょう?」
　ナミはその新聞を見るようにビビに言う。
「そ、そんな…そんな馬鹿な…」
　周りの面々もアラバスタの事かと詰め寄る。
「国王軍の兵士三十万人が反乱軍に寝返った…もともと国王軍六十万、反乱軍四十万の鎮圧戦だったのに…コレじゃあ一気に形成が…」
「これでアラバスタの暴動はいよいよ本格化するわ…三日前の新聞よそれ、ごめんねアンタに見せても船の速度は変わらないから、不安にさせるよりもと思って隠しといたの…分かったルフィ?」
「ん～大変そうな印象を受けた。」
「そう。思った以上に伝わって良かったわ。」
「でもお前医者に見てもらわねェと…」

『そーだよ、なみ…』
「平気、その体温計壊れてんのね。四十度なんて人の体温じゃないもん、きっと日射病かなんかよ。」
「医者になんて掛かんなくても勝手に治るわ、とにかく今は予定通り真っ直ぐアラバスタを目指しましょう。…心配してくれてありがとう…」
　そう言うとナミは甲板へと足を運ぶ。
「おう、何だ治ったのか！」
「馬鹿、強がりだ。」
『…なみ…』
　きっと辛いのにビビの為を思って無理してる…そんなことはメアにだって分かった。
「このままじゃ直に国中で大量の血が流れる戦争になる…それだけは阻止しなきゃ…アラバスタ王国はもう終わり…クロコダイルに乗っ取られちゃう…」
「もう無事に帰り着くだけじゃダメなんだ…一刻も早く帰らなきゃ…間に合わないと百万人の国民が無意味な殺し合いをすることになる…」
「百万人もいんのかァ!?人が!?」
「何ちゅーモンを背負ってんだビビちゃん…」
『びび…』

ひゃくまんにん…こくみん…せんそう…ころしあい…
メアの頭には様々な言葉が駆け巡る。意味の分からないものもある、しかしそれらがとても重い意味を持つことだけは分かった。
けどなみは…
だがナミの状態は非常に良くない。命に関わるのなら一刻を争う。けれどそんなに時間を使ったらアラバスタ王国は…
どうしたらいいんだろう…
「おい、テメーら出てこい仕事だ!!」
ゾロのかけ声にビビ以外の皆が甲板へと出て来る。
「なーにー?」
「テメーの号令じゃやる気でねーな」
「黙って動け!シートについて左舷から風を受けろ。」
「何事だナミさん?波も静かで良い天気だぜ?」
一見穏やかに感じる気候での突然の指示にサンジが疑問に思い、ナミに問う。
「…風。」
「風?」
「真っ正面から大きな風がくる。多分ね…?」

ルフィが急にナミの額に手を当てる。その手は直ぐに熱々になってしまった。
「あちぃー！あちぃーぞお前!!やっぱ船止めて医者に行こう!!」
「余計な事しないでよ！これがアタシの平熱なの！馬鹿やってないでロープを引いて!!」
「ナミさん、そりゃビビちゃんの為だってのは分かるけどよ…あんまり無理すっと…」
「クェェ…」
カルーも心配そうに鳴く。
「平気だっていってるでしょ!?」
ナミは強がるが直ぐに手すりに手をつき、呼吸も荒くなる。
『…なみ…つらそう…』
「おい、ナミ…お前やっぱり…」
「いいから早く船を動かして!!」
そのナミの剣幕に押される形で皆、船を動かす。
メアはそんな中辛そうなナミに近寄り、だいじょーぶ?と声を掛ける。
「…ありがと。けど一体何だろ…嵐とは少し違うみたい…」
『…?』
一体何の話をしているのだろうか。

そんなことを考えている間に船は進行方向を大きく変える。そしてビビが部屋から出てきた。
「みんなにお願いがあるの!!船に乗せてもらっておいてこんなこと言うのも何だけど、今私の国は大変な事態に陥っていてとにかく先を急ぎたい。一刻の猶予も許されない。だからこの船を最高速度でアラバスタ王国へ進めて欲しいの!!」
「「……」」
『……』
「当然よ、約束したじゃない!」
「だったら直ぐに医者のいる島を探しましょう!!一刻も早くナミさんの病気を治してそしてアラバスタへ!それがこの船の〝最高速度〟でしょ?」
「そうさ!!それ以上スピードは出ねェ!!」
『びび…!!』
「いいのか?お前は王女として国民百万人の心配をすべきだろう?」
「そうよ!だから早くナミさんの病気を治さなきゃ!!」
「よく言ったビビちゃん!!惚れ直したぜ俺は!!」
「いい度胸だ。」
皆もその決断に同意を示す。

「悪いわね…」
「無理しないでナミさん…」
「ごめん、ビビ、やっぱアタシ…ちょっとヤバいみたい…」
『なみ!!』
「ナミさんしっかり!!」
「うおああああああ!?!?何だありゃあああああああ!?!?!?!?」
突然ルフィが大声を上げたと思った先には、!?何と巨大な竜巻が姿を現していた。
「あれは…!サイクロン!!」
「でけェーーー!!!」
「ちょっちょっとまってあの方角は…!!」
「さっきまでこの船が向かってた方角だ!!」
「あ、あのまま真っ直ぐ行ってたら直撃だったぞォ!!」
真っ黒い雲からはバリバリと雷が鳴り響き、波も荒れ狂っている。
改めてナミの凄さを感じたメア。
「よっしゃ!!それじゃあ急ごうか!!このまま医者探しに行くぞーーー!!!!」
「「「『おーーーーーー!!!』」」」
そして二度とゾロに舵は任せないとメアは心の中で誓った。

ドラム島

「なんなのこの揺れは!?」
「しっかり舵取れよ!!ナミさんに何かあったらオロすぞテメーら!!」
『わわわっ!!』
　急に船が大きく揺れる。外で何かあったのだろうか…気になるがナミのことも心配だ。向こうにはルフィとゾロもいる、簡単にはやられはしないだろうと思いメアは部屋に残る。
『なみ、だいじょーぶ?』
　幸い、ナミは気がついていないようだ。
「マーハハハハハハ!!」
　何者かの声が外から聞こえてきて、サンジはここをビビとメアに任せ部屋の外へとでる。
『なんだろうね、びび?』
「さぁ、分からないわ…でもどこかで聞いたことが…?」
『??』

ダダン!!ダダン!!
突如銃声が鳴り響く。
「銃声!?メア、カルー、ナミさんを見てて!すぐ戻るから!」
『わかった!』
「クワアーー!!」
突然の銃声にビビまでもが甲板へと行ってしまった。本当に一体何が起こっているのだろうか。ナミのためにも急がなきゃいけないのにとメアの中には焦る気持ちが生まれる。
『ってあせっても、ふねのすぴーどはかわらないもんね…スゥーハー…』
無意識の内に焦る気持ちを深呼吸で整え、ナミの看病をカルーと共に続ける。
「クワァ…」
カルーもちょっと心配そうだ。そんなカルーにメアは優しく話しかける。
『だいじょーぶだよかるー!あっちにはるふぃたちがいるもん!!わるいやつならやっつけちゃうよ!!』
「クワァァァ!!」
メアの励ましによりカルーも元気になったみたいだ。
そこにビビが戻ってくる。

『だいじょーぶだった!?』
「クワア!?」
「大丈夫よ、メア、カルー。ちょっと騒ぎになっただけよ。ルフィさんが片付けてくれたし。」
『そっか!!』
それを聞き、やっぱりルフィは強いんだと思い直してこれで医者探しへ戻れるとメアは安心する。
けれどそれからも中々医者どころか島さえも見つからなかった。

ーーー

「あのなァ…」
サンジとビビが呆れたようにする。メアも肉で治るとは思わないが、これがルフィなりの心配の仕方なのだろう。耳や顎を伸ばして結んでみたり、ふざけて笑わそうとしている。
「笑わねェ…全然…」
勿論ナミは笑わない。そもそもそういう事をして笑う元気が無いから病人なのだと、ビビやサンジは心の中でもう何回目になるか分からないツッコミをいれる。
「水とかぶっかけたら、熱、引かねーかな？」
「アホかーーーー!!!!」
「参ったな、今日はもう日が暮れるぜビビちゃん。」
「ええ、そうね。そろそろどこかに碇を下ろしましょう。ナミさんの指示無しで夜の航海は出来ないわ。」
「そうだな…」
皆ナミが心配なだけなのだ。心配の仕方がおかしい人物が約一名いるだけで。

ーーー

ーーーーーーーーーーー

真夜中、月も高く上る頃やっとナミの意識が戻ったようだ。見渡してみれば見張りに行ったのであろうサンジ以外の全員がこの部屋に集合して寝ているではないか。
メアとビビはナミの寝ている布団にもたれて眠っているし、他の男共も床に雑魚寝している。
『ん…なみ…?』
どうやらベッドにうつ伏せに寝ていたメアは、どうやらナミが起きたときの物音で目が覚めてしまったようだ。
『んぅ…なみ…ねてなきゃだめ…』
「分かった分かった。」
半分寝ぼけたメアによって布団に横になるように促されるナミ。
ちょっと前まで生まれたばっかりで、夜中アタシに怖い夢を見たって泣きついてきてたのに…
ナミは少し前までのメアに思いを馳せる。今じゃルフィよりもしっかりしてるかもと考えると自然と笑みが溢れる。
『なみ?』

不意に笑ったナミに対してメアは不思議そうな顔を浮かべる。それになんでもないと答える。

『こわいゆめみた？ならめあがおうた、うたってあげる!!』

別に怖い夢を見た訳ではないのだが、前にやってあげたことのお返しとばかりにメアが歌ってくれるようなので聞いてみることにする。

『～～♪～～♪～～～～♪』

……この歌は…アタシがメアに歌ってあげた歌だ…

元々はベルメールさんが私に歌ってくれた歌。懐かしいなとナミは思い出に浸る。

『～～♪～～～♪』

……そういえばアタシも歌ってもらってたな…

『～～～♪～～♪～～～～♪』

…何だか眠くなってきた…このまま眠ってしまおうか…

『～～～♪～～～～～♪～～～～♪』

『おやすみ、なみ』

おやすみ、メア…

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

「ナミー！見てみろほらー!!…おかしいな…やっぱり笑わねぇ…」
『るふぃ、それは…』
次の日ゾロは何やらドン引きしているメアと何かしているルフィを発見した。
「どうしたルフィ？」
「んん？」
でーーーんと効果音が付きそうなルフィのその顔は額には肉と書かれマジックで太眉、睫毛をプラス、唇もなにやら赤くなっている。
……正直いうとかなり化け物じみた顔だった。
「?!?ヤメろ気味悪ィ!!!!」
「ありがとーん!!」
当然ゾロは驚くが、期待通りの反応をもらいルフィは何だか楽しげであった。
「島があったぞォ!!」
サンジの声が聞こえてくる。どうやら島が見てたようだ。医者のいる島だといいのだが。
「島かァ!!そうか島か!!島があったか!!おいナミ!!島だってよ!!病気治るぞ!!島だとよ!!しーま!!しーま!!しーま!!」
「見て来いよ、ここはいいから。」

『いってらっさい。』
そういうとムズムズとしていたルフィは甲板へ飛び出し、島を確認しにいった。
ルフィなりの心配なのだろうが、あれではうるさくてかわない。
『るふぃ、さむくないのかな?』
ふと、メアはルフィの恰好を思い出す。いつもの服装で袖すら無い服というのはこの気候では寒すぎやしないだろうか。メアは寒くて寒くて震えているというのに。
「馬鹿は風邪引かねェっていうしな。」
…るふぃのこと、ばかっていった…
まぁ、メアも否定はしないが。そういうものなのだろうか…アレは。本人が寒くないというのなら良いのだろうか。
そんな会話をしている中も船は刻一刻と島へと近づいていった。

メアが見たその島の第一印象は真っ白というものだった。その島は一面が雪と氷に覆われており、ビビの言っていた典型的な冬島なのだろう。
島の奥には大きな塔のような山らしきものが見える。
「こんなに雪が…!!幸せだァ!!俺!!」
「こりゃあスゲーな何だあの山は…」

「ところでルフィお前寒くねェのか？その恰好で…」
現在の気温はマイナス十度熊が冬眠の準備を始める温度だとビビも言う。
メアも甲板に出ると風があり、さらに寒く感じてしまう。
「え？あぁ…え？って寒ゥ!!」
「っていやおせーよ!!」
『ほんとばか…』
やっぱりゾロのいったようにルフィは馬鹿だと思ったメアだった。

雪解け水の滝が見える。この辺りに船を止められそうだ。それでだれが行くとゾロが皆に尋ねる。
「俺が行く!!」
「俺もだ!!」
『めあもいく!!』
「よーし行ってこい!!」
しかし思わぬ形で人は見つかったようだ。
「そこまでだ海賊共!!」
見れば島民と思わしき人々がメリー号の周りを取り囲んでいた。その出で立ちは物

騒で銃をこちらに構えている。
「おい、人が居たぞ。」
「でも…ヤバそうな雰囲気だ…」
みるからに島民たちはピリピリしている。本来ならばあまり立ち寄るべき島ではないのだろう。だが、ナミのことを思えば折角島に人がいるというチャンス。これを逃せば次はいつ人がいる島に出会えるかは分からない。
故に上陸をしたいというのが一味の本音だった。
「海賊共に告ぐ。速やかにここから立ち去りたまえ。今すぐにだ！」
島民のリーダーらしき体格の良い男が現れ、一味の面々にすぐに立ち去るように警告する。
「俺たち医者を探しに来たんだ！」
「病人がいるんです！」
「そんな手には乗らねェぞ!!薄汚ェ海賊め!!」
「ここは我々の島だ!!上陸などさせてたまるか!!」
「さぁ、すぐに碇を上げて出て行け!!さもなくばその船ごと吹き飛ばすぞ!!」
なんだかやけにここの島民たちは海賊を嫌っている。過去に何かあったのだろうか…？メアはゾロの足に掴まりながらそんなことを考えていた。

「おーおー酷く嫌われてんな。初対面だってのに」
そんなことを言ったサンジ対して口答えするなと島民の一人が発砲してくる。
それに怒ったサンジだが、すんでのところでビビがそれを止める。しかし島民は怖くなったのかさらに発砲を重ねてきた。

ーーーズドン!!!

「ビビーーーーー!!!!」
ビビが撃たれた。
その事実にメアは呆然と立ちすくんでしまった。
ルフィはビビを撃った島民を攻撃しにいこうとするが、それを撃たれたはずのビビが必死に止める。
『びび!?』
「戦えばいいってもんじゃ無いわ!!傷なら平気腕を掠っただけよ…」
ビビはそういうと島民たちに膝をついて頭を下げる。
「だったら上陸はしませんから、医師を呼んでいただけませんか。仲間が重病で苦しんでいます。助けてください、お願いします。」

「…ビビ…」
「あなたは船長失格よルフィ。無茶をすれば全てが片付くとは限らない。この喧嘩を買ったら、ナミさんはどうなるの。」
ビビの腕の傷口からは血が流れる。
「あぁ、ごめん。俺間違ってた。医者を呼んでください。仲間を、助けてください。」
ルフィもビビに習い膝をついて頭を下げる。
『なみがしんじゃうかもしれないの!!たすけてください!!おねがいします!!』
メアも島民たちへと涙目で訴えながら頭を下げる。
「……村へ、案内する。着いてきたまえ。」
その様子にリーダーらしき男はどうやら許してくれたようだ。島民たちも銃をしまい、船から遠ざかっていく。
どうやらビビはただの王女ではないらしい。

一同は男に連れられて村へと向かっていた。
「一つ忠告しておく。我が国の医者は魔女が一人いるだけだ。」
「あん!?魔女ォ!?」
「何だそりゃあ…訳分かんねー国だな、大体何て国なんだよここは!」

そうナミをおぶったサンジが聞く。
「この国に名前はまだ無い。」
「え…名前の無い国、そんなことってあるんですか？」
この国には名前は無いらしい。メアは自分が名前を付けるとしたら、雪でいっぱいの国だからゆきゆきランドとかいいかなーとか？気に考えていた。
「うわあああああぁぁぁぁ!!熊だあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!皆～死んだフリをしろ～」
「ハイキングベアだ、危険は無い。登山マナーの一礼を忘れるな。」
冬島には不思議な熊がいるものだとメアは思った。

「ここが我々の村、ビッグホーンだ。」
とうとう村へとやってこれたようだ。村には見たことのない動物もいる。メアはその物珍しさに目を輝かせる。
「あ、おい見ろルフィ!!ハイキングベアだ!!」
「またか！」
ルフィとウソップが恰幅の良い女性をハイキングベアと間違え、一礼をしている。
すごい…しつれい…

メアにもあれが物凄く失礼なのは分かった。
それにしてもこの男の人はずいぶん村の人たちから慕われているようだ。次から次に皆が声を掛けてくる。
ドルトンと呼ばれていた男に案内され、皆は彼の家に入る。
「申し遅れたが、私の名はドルトン。この島の護衛隊長をしている。我々の手荒な歓迎を許してくれ。」
ドルトンはどこかでビビを見たことがあるような気がすると言っていた。ビビははぐらかしていたが、どこかで会ったことがあるのだろうか。
「それより、魔女について教えてください。さっきナミさんの体温を測ったら４２度もあったんです。」
「よ、４２度!?」
「三日前から熱は上がる一方なんです。」
「これ以上上がったら死んでしまうぞ!!」
「ええ、だけど病気の原因も対処法も私たちには分からなくて…」
「何でもいいから医者がいるんだ!!その魔女ってのはどこにいんだよ!!」
会話をする時間すら焦れったいとばかりに聞くサンジにドルトンは答える。
「魔女か…窓の外に山が見えるだろう?」

「あぁ、あのやけに高い…」
　窓を見ようとしたサンジだが思わぬものが見える。
「ハイパー雪だるさんだ!!」
「雪の怪獣シロラーだ!!」
「「へーイ!!!!!」」
「テメーらぶっ飛ばすぞ!!」
　雪だるさんとシロラーはサンジによって破壊された。
「あの山々の名はドラムロッキー。真ん中の一番高い頂上の城が見えるか？」
「城ォ？」
『ほんとだ!!おしろ!!』
「今や王の居ない城だ。」
「あぁ、確かに。」
　サンジに持ち上げてもらい窓の外を見たメアは、絵本でしか見たことのないお城に少し興奮する。
「あの城が何か？」
「人々が魔女と呼ぶこの国唯一の医者、ドクターくれははあの城に住んでいる。」
「何ィ!?よりによって何であんな遠い所に!?じゃあすぐ呼んでくれ!!急患なんだ!!」

「そうしたくても通信手段が無い。」
「ああん!?」
それでも医者かよ、どんなヤツだとサンジはちょっとキレそうだ。医者としての腕は確かだが、少々変わりものの婆さんだそうで、もう１４０近い高齢だとドルトンは言う。
ひゃ…ひゃくよんじゅう…すごいねんれいだ…
「ひ、１４０!?そっちが大丈夫か…?」
「あとそうだな、梅干しが好きだ。」
さすがの女好きのサンジもコレには少々驚いているらしい。しかし山の上にいたのではそう簡単に降りれないだろう、この国の人たちは一体病気や怪我をどうしているのかとビビは尋ねる。
「彼女は気まぐれに山を降りる。そして患者を探し、処置を施しては報酬にその家の欲しいものをありったけ奪って帰って行く。」
「そりゃ、たちの悪いババアだな。」
「おいおいまるで海賊だな。」
どうやらとんでもないお婆さんのようだ。無事にナミを治療してもらえるかメアはちょっぴり心配になる。
「でもそんなお婆さんがどうやってあの山から?」

「…妙な噂なんだが、月夜の晩に彼女がソリに乗って空を駈け下りてくるところを数名が目撃したという話だ。それが魔女と呼ばれる由縁でな。それに見たことも無い奇妙な生き物と一緒にいたという者もいる。」
　その話にウソップは何か出るんだと一人騒ぐ。
　みたこともないいきもの…どんないきものだろう…!!
　反対にメアは未知の生物の存在にわくわくしていた。
「確かに唯一の医者ではあるが、あまり関わりになりたくない婆さんだ…次に山を降りてくる日をここで待つしかないな。」
「そんなァ…」
「くそ野郎…そんなの待ってられるかよ!こうしている間にもナミさんが…!」
「おい、ナミ。ナミ、聞こえるかー?」
「「ってお前は何やってんだーーー!?!?!」」
『るふぃ!?』
　ルフィはナミの頬をペチペチと叩き、起こす。
「あのなァ、山ァ登んねェと医者いねェんだ。山登るぞ。」
　ルフィはナミを山の上の城まで運び、医者に見せるという。
「無茶言うな!!お前ナミさんに何させる気だ!?」

「いいよ、おぶってくから。」
「それでも悪化するに決まってるわ!!」
「何だよ、早く見せた方が良いだろう?」
「それはそうだけど無理よ、あの絶壁と高度を見て!!」
「行けるよ。」
「テメーが行けてもナミさんへの負担はハンパじゃねーぞ!!」
「でもーホラッもし落っこちても下雪だしよ!」
「あの山から転落したら健康な人でも即死よ!?」
「あのなァ常人よりも六度も熱が上がった病人だぞ!?分かってんのかお前!?」
　ルフィ以外皆は反対のようだ。メアもどちらかというと賛成はしていない。でも早く見せた方が良いだろうけど…それでもあの山は高すぎる…ぐるぐると思考が回る。
「…うぅ…」
「(早く…治さなきゃ…!!
　ビビの…為にも…早く…!!)」
「よろしく!キャプテン!!」
「そうこなきゃな!任しとけ!!」
　どうやら山を登るルートに決定したようだ。

「あっきれたぜ!!船長も船長なら、航海士も航海士だ!!」
「自分の体調分かってんのかナミさん…?」
「本当に大丈夫?何時間もかかる道よ…」
「オッサン肉くれ、肉!!」
「肉…?」
「よし、俺も行く!」
　サンジもこの山登りに同行するようだ。
「いいかルフィ、お前が一度でも転んだらナミは死ぬと思え!!」
「えぇ、一度でもかァ!?」
「待って!じっとしてて、ちゃんと縛っておかなきゃ…」
　ナミをおぶりその下を剣で支え、さらに布で固定しているようだ。
「これでいいわ。じゃあ私はここで待たせてもらうから。却って足を引っぱっちゃうし。」
「俺もだ!!」
「分かった!!」
『めあはいく!!』

「「!?!?」」
「おいおい、メアにはちと厳しくねェか…?」
「メアは私たちとここで待ってましょう?」
『いや!!』
ナミが危険な今、メアまでもを守り山の頂上へ行くことは正直とても厳しい。
ウソップとビビが一緒に待つように言うが、メアはそれを聞き入れようとしない。
『やぁだぁ!!おいてっちゃやだ!!めあもいくもん!!』
遂には涙目になりながら訴える。こうなってはそう簡単にメアは折れないことをこの一味はよく知っている。
「メア。」
そんなメアに話しかけたのは、意外にもサンジであった。
『いくの!!めあもいく!!』
「……分かるよ。悔しいんだよね、俺も同じさ。」
その言葉にメアは騒ぐのを止める。
「その気持ち、俺がしっかり受け取った。ナミさんは俺とルフィでちゃんと医者に診せてくるからよ、少しばかりそこで待ってちゃくれねェか?」
そんな風に言うサンジにメアも少し考えているようだ。

「…な？」
『…うん!!』
「よし!!よく言った!!」
　そういうとサンジはメアの頭をぐりぐりと撫でる。それにメアはすっかり機嫌を良くしたようだった。
　それを見てウソップとビビはホッとする。
「じゃあナミ、しっかり掴まってろよ!!」
「…うん…」
「本気で行くなら止めるつもりは無いが、せめて反対側の山から登るといい。ここからのコースにはラパーンがいる。肉食の凶暴なウサギだ。集団に出会したら命は無いぞ。」
「ウサギィ？でも急いでるんだ、平気だろォ？なぁ？」
「あぁ、蹴る!!」
「蹴るって!?馬鹿な!?死にに行くようなもんだぞ!?」
「大丈夫!!じゃあ行くかサンジ!!ナミが死ぬ前にー!!」
「縁起でも無ェこと言うんじゃねェこのくそ野郎!!」
「ハッハッハッ!!」

そう笑いながらルフィたちは行ってしまった。
「本当に大丈夫か…？」
「あぁ、まぁあの二人は心配ねェが…」
「問題はナミさんの体力がついていけるかどうか…無事に着けるといいけど…」
『なみ……』
三人はルフィたちの姿が見えなくなっても、ずっと山の方を見守っていた。
「どうした君たち？中へ入りたまえ、外は寒い。」
「いいです、私は…外にいたいから。」
「お、俺も…」
『めあも！』
「…そうか。」
その様子にドルトンも中へ入るのをやめ、雪の上へドカリと座る。
「えっ!?」
「では私も付き合おう。」
ずいぶん気の良い人のようだ。

「昔はね、ちゃんといたんだよ。」
「「えっ？」」
「医者さ、訳あって全員居なくなってしまったんだ。どれも優秀な医者ばかりだった。実際医療先進国と言われてさえいたのだからな。」
「それがなぜ？」
　ビビは尋ねる。
「この国はほんの数ヶ月前に一度滅びているんだ。海賊の手によって。」
「えぇ!?」
「国がァ!?」
『!?』
　でもこれで納得した。ここの国の人たちの、異常なほどの海賊への嫌悪。それはここからきているのであろう。
「それで私たちにあんなに過敏に…」
「そうだ。みんな海賊という言葉には…まだ…どうもね。君たちにはすまなかったが、たった五人の海賊団だった。」
「船長は黒ひげと名乗り、我らにとって絶望的名力でこの国を瞬く間に滅ぼしたのだ。」
「たった五人の海賊に!?嘘でしょう!?」

「黒ひげ!?」

『……』

その強さはビビもウソップも話を聞いただけでは信じられないようだった。

ちなみにメアは難しい話に飽きて雪でウサギを作り始めた。

「だが、この国にとってはそれで良かったという者もいる。」

「国が潰れて良いわけないじゃない!!」

「そうだ!!そんな馬鹿な話があるか!!」

「…ありがとう。」

ドルトンの突然のお礼の言葉にビビは驚く。

「だがそれというのも、それまでの国の王政が国民にとって悲惨なものだったからだ。

元の国の名はドラム王国、王の名はワポル。」

「最低の国王だった……!!」

ワポル、その名は確かルフィを食っていた海賊の名前ではなかったか。

どうやらこの国でも一騒動ありそうだ。

「君たち、ワポルを知っているのか!?」
「知ってるも何も、俺たちの船を襲って来やがった海賊の名だ。まぁ、俺が追い払ってやったが…」
「今思い出してみりゃ、確かにドラム王国がどうとか…」
「ええ、間違いないわ。はっきりと思い出した!私子供の頃父に連れられていった王たちの会議で、一度彼と会ってるもの」
「王たちの会議?君は一体…」
「あ、あいや、その、とにかく会いました、ワポルに。昨日のことです、ここへくる途中に。」
「昨日!?それは本当かね…」
「でもじゃあ一体どういうこと?彼は王ではなく海賊を名乗っていた。」
「海賊など一時のカモフラージュだ。ワポルはこの島に帰ろうとしてこの海を彷徨っているに過ぎない。」
「じゃああの船に乗っていた人たちはこの国を襲った黒ひげ海賊団に敵わず、島を追われたのね。」
「敵わず…違う!!」
「えっ?」

「あの時ワポルの軍勢は戦おうとすらしなかった。こともあろうに海賊たちの強さを知った途端、あっさりと国を捨て、誰よりも早くワポルは海へ逃げ出したのだ!!」

あれには国中が失望したとドルトンは続ける。

そんなワポルにビビは怒りが抑えられないようだった。

「これが一国の…」

「それが一国の王のやることなの!?」

『びび…』

「ヒドすぎる…そんなの…王が国民を見捨てるなんて…!!」

「その通りだ。だがとにかくもうワポルの悪政は終わった。この島の残った国民は今、団結して新しい国を作ろうとしているのだ。だから我らが今一番恐れてるのはワポルの帰還…!!王政の復活だ…!!人々が不安定な今それだけは避けねばならん!!」

「この島に新しく平和な国を築く為に!!」

夜中（番外編）

『うぅ…なみぃ…』

ナミはそんな弱々しく自分を呼ぶ声が聞こえ、目が覚めた。こんな月も無く、真っ暗な夜にそんな声を出すのは決まって一人。

「はいはい、どうしたのメア？」

ナミはグズグズと泣いているメアに声を掛け、優しくポンポンと小さな頭を撫でる。

『こわい…ゆめ…みたの…』

最近メアはよくこうして怖い夢を見て起きることが多くなってきた。まるで赤子のようだとナミは思う。赤子の夜泣きに付き合うのは親の役目、この子を拾っちゃったのは私たちだし仕方ないと割り切ってベッドから下りる。

『うぅ…？』

未だにグズグズとしているメアを抱きかかえ、ナミは部屋を出て、キッチンへ向かう。キッチンに来たらメアを椅子に座らせて冷蔵庫から牛乳を、棚の上から蜂蜜を取り出す。

「メア！ホットミルク飲みましょう！」

『ほっとみるく！』

こんな月も無く、真っ暗な夜に泣いてしまうメアを宥めるにはホットミルクがもってこいなのだ。メアの顔も先ほどとは違い、いつもの可愛らしい笑顔に戻る。

「今日はどんな夢だったの？」

牛乳を火にかけながらナミが問う。

『えっとね…すっごくつよくて、こわいやつがいてね…るふぃがたおそうとするんだけど…るふぃがぼろぼろになっちゃうの…』

そういってメアは顔を俯かせる。それを聞き、ナミはなるほどねっと納得していた。

「（メアは誰かが傷ついたりすることを、私たちの誰よりも嫌がるもんね…）」

海賊である以上は戦闘は避けられない。しかしメアは誰かが傷つくことを嫌う傾向があった。普通であればそれは褒められるべきものなのだろうが、海賊であるのならその純粋さは少し心配になる。

「（…でも今は私たちが守ってあげよう…）」

いつかメアが海賊であることとその優しさの間で悩む日が来るかもしれないけれど。

「（それまでは変わらないでいてほしいな…なんて、）」

ワガママだろうか、けれど自分にはもう無いその純粋さを無くしてもらいたくはないとナミは一人思う。

そんなこんなしている内に牛乳が温まったようだ。コップに移し替え、蜂蜜を入れる。

「ほら出来たわよ、ホットミルク。」

『わぁ!!』

メアは喜び、ホットミルクをふーふーと冷ましながら飲む。その笑顔をじっと見ていたナミは徐にメアに対して言葉を投げる。

「大丈夫よ。」

『??』

「さっき見た夢のこと。安心しなさい、ルフィは簡単にはやられたりしないわよ。」

そう言ってポンポンと頭を撫でる。その言葉に安心したのかメアは段々と眠くなってきたようだ。

ささっとコップを洗ってしまい、来たときと同じように再びメアを抱っこするとナミはキッチンを後にする。

見ればメアはもう夢半ばといった様子で、その寝顔はふにゃふにゃとしていて思わず指で頬を突っつきたくなる。

部屋に戻り、メアをベッドに寝かせる。

『んん…』

起こしてしまったか。そうだ、子守り歌を歌ってあげようか。

「～～～♪～～～♪～～～～♪」

「～～～♪～～～♪～～～～♪」

『…すう……』

もう今夜は悪夢を見る心配はなさそうだ

「おやすみ、メア。」

雪崩

メアたちがルフィとナミ、サンジを見送ってから幾分か時間が経った。
「大分激しくなってきたな…」
吹雪は止むどころか激しさを増している。
うぅ…さむい…
さすがにメアもこの吹雪には寒そうに震えている。
「(ナミさん…どうか無事で…)」
ビビは心の中で祈りを捧げる。ドルトンはその様子をジッと見ていた。
「君たちは一体何者なんだね?」
「何者って…」
「医者も無しでたった六人で旅をするなんて、あまりにも無謀だ。」
「俺たちゃ海賊さ。だからアンタたちも銃を向けたんだろ。まぁ人数は少ないけどよォ、この勇敢なる海の戦士ウソップ様がいる限り問題はな『かいぞくだよ!』」
「ほぉ…」
「でも確かに医者が欲しいことは欲しい。この島でそういうヤツを仲間に出来たらって

思ったりもしたんだけど、医者があの城に住む魔女たった一人とはなァ…」
「…不思議な組み合わせだ。どうも私たちの想像する海賊とは違うようだ。」
『そうかな?』
「ドルトンさん!ドルトンさん!」
　ドルトンに声を掛けたのは、ウソップとルフィがハイキングベアと間違えたおばさんだ。またもや一礼をしているウソップをメアはジト目で見る。
「やぁ、これはどうも。」
「あなた、Ｄｒ．くれはを探してるんですって?」
「ええ、その通りです。が、病人はもう…」
「丁度今ね、隣町のココアウィードに来てるらしいわよ!」
「「『なんですとーー!?!?』」」
「それじゃすれ違いかよ!?!?」
　メアはナミが医者に診せるまではどうにかもってほしいとだけ願う。一同は急いでソリに乗り、隣町のココアウィードに向かった。
「スマン、私のミスだ。」
「「え?」」
「昨日ドクターが山を降りてきたという情報があったもので、もう数日下山は無いと踏

んでいたんだが…」
「気にすんな！アンタのせいじゃねーよ！」
『そうだよ！どるとんさん、いいひとだよ！』
「問題はルフィとサンジの異常な体力だ。俺たちが今更雪山を追いかけたところで、とても追いつけねェだろうぜ。」
「そのココアウィードって町に魔女がいるんなら、頼んで至急城へ帰ってもらうんだ！」
「ええ、そうね。それ以外方法が無いわ。」
「…許してくれ、医者すらままならんこの国を。」
「そ、そんな別にドルトンさんが謝ることじゃ無いわ。」
「そうだぜ！」
『そーだよ！』
「……急ごう!!」
　ドルトンは過去に一体何かあったのだろう…メアは時折暗い表情を見せる彼を心配そうに見ていた。
「アンタ、アンタこそ何者なんだ？ただの村人なんかには見えないぜ。アンタの話し方には軍人の匂いがする。」
「……私は元国王の、ワポルの部下だったのだ。」

「『!?!?』」

話を聞けばどうやら彼は先代の国王の時代より仕える国の守備隊の隊長だったようだ。だか国王が亡くなり、息子のワポルが王の座に就いたとき、この国は変わってしまったらしい。ワポルは思い付きで二十名の優秀な医者だけを残し、その医者たちをイッシー・トゥエンティと名付け、それ以外の医者は国外へ追放する法律を作り出した。

「それじゃあ、病気になったヤツはワポルに縋ってそのイッシー・トゥエンティに診てもらうしかなかったのか!?」

「法外な治療費を払ってな。」

「それでは国民の命を人質にとって国を支配してるのも同じ…!!そんなのは政治なんかじゃない!!犯罪だわ……!!」

『びび…』

国民を第一に思う彼女からしてみればこれはとんでもない卑劣な行為なのだろう。いやビビでなくともこの行為は許されざるものであると思う。

「(やはりな…間違いない……!)」

ーーー

ーーーーーーーーーー

「はあああああぁぁぁぁぁぁ!?!?何だって!?!?もうこの町を出たって!?それもついさっきだって!?!?」

『ありゃりゃ…』

「さっき僕の病気を治してくれたんだ！」

　見れば足に包帯を巻いた少年がソファの横になっている。その表情は元気そうだ。

確かに医者として優れているらしい。

「ドクターを探してるのかい？ドルトンさん。」

「急患なんだ。ドクターの行き先を知らないか？」

「Ｄｒ．くれはならギャスタの方へ向かったと誰かが言ってたぜ。」

「ギャスタへ!?」

「どこだ、それ？」

「ビッグホーンを挟んでこの町とは反対の方向にある町だ。」

「またすれ違いかよ!?」

「スケートの盛んな町だ。」

「いやそれ関係ないから！聞いてねェし！」

「落ち着いてウソップさん！とにかく行きましょう、ここまで来たら迷ってる暇は無いわ。」
　どうやらまたすれ違いになってしまい、それでも追いかけるしかないとビビは言う。
「ドルトンさん!!ここにいたのか……」
「君は…確か今日は見張り役では…」
「うぅ…」
　突然怪我だらけの男が入ってきて倒れそうになる、が間一髪、ドルトンが支えこむ。
「どうした!?何事だ!?この酷い傷はどうしたというのだ!?」
「…俺以外の見張りは全員やられちまった…」
「何!?」
「突然…海岸から潜水帆船が現れて…みんなアイツらにやられたんだ…」
「アイツらとは誰なんだ!!落ち着いて話せ!!」
「ドルトンさん!!助けてくれ!!俺たちの力じゃ……!!このままじゃ…!!」
「何だ？」
　事情が全く分からないウソップたちは困惑する。
「……ヤツらか!!」
「ワポルだ!!ワポルのヤツが帰ってきやがった……!!!」

人々の間に衝撃が走る。一瞬にして酒場が騒がしくなった。
「あ!·おい!·ドルトンさん!!」
ドルトンはやはりワポルに思うところがあるのだろう。一人港の方へ向かっていってしまった。

ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

「おいビビ、ホントにこっちであってんだろうな?·魔女のいるギャスタって町は。」
「そう言われるとちょっと自信無いんだけど…」
ウソップ、ビビ、メアの三人はドルトンの乗っていたソリを借り、ギャスタへとむかっていた。
「自信無いじゃマズイだろ?·いいかもしルフィたちがやっとの思いで城に着いて、医者がいなかったらアイツら〝おい何やってんだ〟ってことになる訳だな。俺たちは早く医者を見つけて城に戻るように言わないと。」

「それは分かってるけど…」
「分かってんなら何とかしてくれよ、王女だろ？」
「そんなこと関係無いでしょう!?」
『そんなにいうなら、うそっぷがやればいいじゃん』
「それもそうね、ハイ。」
　メアにも言われ、ビビは地図をウソップに手渡す。
「っ馬鹿言うな!!一面雪だらけなんだぜ!?地図なんて…」
「要は分からないのね？」
「おう!!全く分かりません!!」
　ウソップは堂々と胸を張る。
『…わかんないんだ』
「いばんなくても良いでしょう？」
　そんなウソップにビビとメアは呆れてしまう。
「とにかくこの道の途中にギャスタへの看板があるはずなの。それを見落とさないで。」
「おう!!任しとけ!!」
『うん!!』
　そう言って通り過ぎた所に、雪に埋もれたギャスタと書かれた看板がひっそりと立っ

ていた。

「おい、マズイぞ雪深くて止まっちまった。」
「明らかに山を登っちゃったみたい…」
『なんか…いやなよかん…』
「え？メアどういうこと？」
　突然地面が揺れ始める。
「あ？」
「何？この地響き…!?ウソップさん!?まさかこれって…」
「…!!あれだ!!雪崩…!!」
　ウソップとビビはようやくメアの言っていた嫌な予感が分かった。しかしそれならそうともっと早く知りたかった。
「おい!!マズイぞ!!逃げろ!!」
「でももうそこまで来てる!!」
『あわわわ!!』
　あっという間に三人は雪崩に巻き込まれてしまった。

ーーー

『び…び？』

雪崩に巻き込まれ雪に埋もれていたメアを、何とかビビが救出してくれたようだ。

「良かった…無事で。」

『たすけてくれてありがと、びび。あ！びび!!ウソップは!?』

「そうだったわ!!ウソップさん!?」

メアとビビは無事だったもののウソップの姿は見当たらず、二人は焦りを感じる。まさかもっと遠くに流されたのだろうか、二人は必死で辺りを見渡す。

そして雪の中にウソップのトレードマークである長っ鼻がニョッキと飛び出ていた。

二人はウソップの周りの雪をかき分けて何とか救出を試みる。

「ウソップさん!!しっかりして!!目を覚まして!!」

『うそっぷ!!しっかり!!』

二人の懸命な呼び掛けにより、ウソップはほんの少しだけではあるものの身動ぎする。

とりあえずウソップが生きている事にホッとした二人だが、このままでは凍死も時間の問題だと二人でどうにか雪の中からウソップを引きずり出す。

「しっかりして!!ウソップさん!!」

『おきてー!!』

「ウソップさん!!」
「なんだよビビ起こすなよ～今綺麗な夢見てたんだ。まるでこの世のものでは無いような綺麗な花畑と綺麗な川と…」
「あの世寸前じゃないのよ!?起きて!!寝ちゃだめ!!起きて!!」
『うそっぷしんじややだーー!!』
まだ生きてはいたものの、あの世まであと一歩の所であるウソップを二人は懸命に呼び戻す。
すると突然ウソップが奇声を上げた。しかしまだ覚醒した訳ではなく、夢半ばといったようだ。
その様子にビビは死んじゃいやとウソップの顔にビンタを繰り返す。それをメアは引き気味に眺めていた。

「いやー助かったぜビビ!・メア!・九死に一生とはこのことだな。生きてて良かったよ、しかし…」
心なしか俺の顔腫れてないかとウソップは尋ねる。それにビビは目を合わせずに霜焼けだと必死にフォローする。そんなやり取りを見ていたメアはただ黙って沈黙を貫

いた。
　突然にビビの足元が崩れ何かが現れる。
「うおおおーー!?何じゃーー!?」
「あー参った参った、花畑が見えちまったぜ…」
　それは何故か上半身裸のゾロであった。三人は突然のことに唖然としてしまっている。
「この寒いのにいきなり雪崩とはツいてねェなァ…でもまァこれも一つの寒中水泳か…?」
『ぞろ』
「あァン?おォビビ、メア。……?」
　ウソップの鼻がヒクヒクと動く。
「おォウソップか!お前ら何やってんだこんな所で?」
「『それはこっちのセリフだ!!』」
　本当にゾロは馬鹿だとメアはつくづく思い直した。

城

メアは冷たくなり赤くなった自分の耳に手を当てる。

先程突如として雪の下から出てきたゾロは寒中水泳をしていたそうだ。メアは寒中水泳とは何かよく分からないが、どうやらこのとんでもない寒さの中で泳いでいたようだ。

とりあえずメアは思った。アホか。

ウソップもバカだろと言っているし、自分は間違っていないと思う。

ビビもナミは精神的疲労で倒れたのではないかと口にこそ出さなかったが一人考えていた。

「見てあれ。人がいるわ。」

『ほんとだ!』

「おい、あの建物は…見覚えがあるぞ!」

「え?…本当だわ!ここはビッグホーンよ!私たち戻って来ちゃったんだわ!」

『でもなんかあんまりよくないかんじ。』

「どういうことだ?」

「とりあえず行ってみましょう。」
　住民とそれから見覚えの無い服を着た人たちがいる。その手には銃が握られており、何やら雰囲気は険悪だ。
　聞けばドルトンが雪崩の下敷きになってしまったと言う。銃をもっているヤツらが邪魔をして雪を掘り出せないのだそうだ。
『そんな…』
　今もこの冷たく寒い雪の中にいるというのか。その事実にメアは胸が締め付けられるようだった。
「ウソップ、あの服見覚えあるぜ。アイツら海で俺たちを襲ってきた連中だろう？違うか？」
「あ、あぁそうだ。」
「じゃあ敵だな。」
「あ？」
「敵だろ？何だ味方か？」
「敵だけど…何をそんなに…？」
『ぞろ？』
　ウソップたちがゾロの問いを疑問に思うや否や、ゾロはその銃を持った男に殴りか

かった。
「!?Ｍｒ．ブシドー!?」
「うはははは!!あったけ～借りるぜ！」
「ってお前その為に!?」
『まぁ、そんなことだろうとおもった…』
　男の身ぐるみを剥いで上着を奪う。世にいう追い剥ぎだ。まぁ私たち海賊だからとメアはこれ以上何も考えないようにした。
「お前見ろ!!ソイツら怒らせるぞ!!」
「貴様!!ワポル様を吹っ飛ばした奴が乗っていた船の!!」
「ほう？懲りないね諸君。」
　そして襲いかかる兵士から剣を奪い、あっという間に片付けてしまった。
「何だ終わりか。張り合いの無エヤツらだ。」
『ないすぞろ!!』
「凄い…」
「よーしよくやったゾロ!!俺の指示通りだー!!」
　ゾロが兵士を倒したお陰でドルトンを探しだせると住民たちは総出で雪の中を掘る。
「で、何なんだこの騒ぎは一体？」

『どるとんさん!!なだれ!!ゆき!!』
「あー話は後だ！俺たちも手伝うんだよ！」
住民たちに交じりメアもその小さな紅葉のような手で辺りの雪を掻き分ける。
『どるとんさん…』
手袋をしていても指先からどんどん雪の冷たさが伝わってきて凍ってしまいそうだ。
「うう…つめたい……」
時折手に息を吹き掛けてもその場しのぎにしかならない。しかしこうしている今にもドルトンは雪の下で死が近づいている。そう思うとどんなに冷たくても手を動かさずにはいられなかった。
「いたぞォ!!」
発見した住民の声に皆が駆け寄る。ゾロだけはこの事態がサッパリ分かっていないようだが。
「何!?いたか!?」
「良かった!!」
『どるとんさん!!』
しかし彼はかなり深刻な状態であった。
心臓が、止まっている。

メアは一体何を言っているのか分からなかった。
ただドルトンが危険な状態であると皆の表情から読み取った。
「ドルトンさん!!ドルトンさん!!目を開けてお願い!!ドルトン!!」
「ビビ…」
何も出来ない。自分には何も出来ない。力が無い。そうだ、ナミの時だって同じだった。自分はただ見ていることしか出来なかった。
メアは自分の無力さにただ打ちひしがれていた。

「ドルトンは生きている。」
「「!?」」
「イッシートゥエンティ!?」
「体が冷凍状態にあるだけだ。」
「我々に任せてくれないか?」
サングラスとマスク、そしてピンクの手術服と手袋を着けた者たちが現れた。あれがドルトンの話にいたイッシートゥエンティらしい。
助かるのか?だが確か彼らは王の元の医者であったはずだ。ドルトンを助けるには彼らの手を借りる他に方法は無い。しかし信用しても良いものだろうか。そう思って

いるのは住民たちも同じだった。
「おい、医者がいるじゃねェか。この国は医者がいねェはずじゃなかったのか？」
「コイツらイッシートゥエンティってな、ワポル専属の医者なんだ。つまり悪医者だ！」
「そうだ！信用ならねェぞ!!ワポルに、王の権力に屈したお前らに、ドルトンさんを任せろだと!?」
「ドルトンさんをどうする気だ!?」
「彼を救いたくば言う通りにしろ!!」
　医者の一人が声を荒らげる。
「ワシたちだって医者なんだ。ワポルたちの強さにねじ伏せられようとも、医療の研究は常に進めてきた。この国の患者たちの為に…」
「とあるヤブ医者に諦めるなと教えられたからだ。もう失ってはならないんだ、そういう馬鹿な男を…」

ーーー

ーーーーーーーーーー

「やっぱり、山に登りましょう！ウソップさん、メア、Ｍｒ．ブシドー！」
「あァ？」
「じっとしていられないわ！あの大雪崩でルフィさんやナミさんたちがとうなったか心配よ!!ナミさんは凄い高熱があるのよ！もしものことがあったら…」
「ナミが心配、その上ドルトンさんも心配でアラバスタも心配か…ビビ、落ち着けよ。お前は何もかも背負い過ぎだ！」
　それにビビははっとした表情を浮かべる。
「ナミにはルフィやサンジがついてる、何とかやってるさ。アイツらなら大丈夫！俺はアイツらを信じてる！」
『うそっぷ…！』
　ウソップの言葉によってビビは冷静さを取り戻したようだ。
「ありがとうウソップさん。私…」

「お前は山登るの怖いだけだろ。」
「だってなオメー！雪男だのクマウサギだのいるらしいんだぞ!!」
「初めっからそう言えよ。」
「『……。』」
　折角カッコイイことを言ったのにこれでは台無しである。ビビとメアは呆れてそのやり取りを見ていたが、メアがビビの手に触れる。
『だいじょうぶだよ、びび。』
　そう言ってメアはニコリと笑う。
「…そうね、また私焦ってたみたい。」
　ビビもメアに微笑み返す。
　すると突然近くの民家の扉が開き、先程まで治療を受けていたドルトンが出てきた。
「ドルトンさん?」
「『ドルトンさん!!』」
　ウソップは戸惑ったように、ビビとメアは嬉しそうにその名を呼ぶ。
「だから誰なんだありゃ一体。」
『どるとんさんだよ!!』
「いやだからソイツが何だってんだよ…」

メアがゾロに説明しているが子供であるが故にその説明には脈絡がない為、ゾロには全く伝わっていない。

そしてどうやらドルトンは城に向かう考えのようだ。

たとえ自分の体が傷つこうとも、ワポルが城に、国王に戻ればこの国は永遠に腐ってしまうとドルトンは言う。

「その体で戦える訳が無い!!」

「俺たちだって敵う相手じゃ無ェし…」

「私がケリを付けてみせる…どんな卑劣な手を使おうとも…!!」

ドルトンはそう言って歩きだす。そしてその前にウソップが立ち塞がった。

「乗れ、俺が連れてってやる。城へ!遠慮なんか要らねェ!アンタの決意を無駄にしたくねェだけだ!」

それでもウソップとドルトンでは体格差が違い過ぎる。

ドルトンの足は雪に着く程で、一歩踏み出すのにもかなり辛いようだ。

「ウソップさん…」

『うそっぷ!!メアも手伝う!!』

そういってメアはドルトンの足の方を持った。ちなみにエスパーの能力を使えば少しの間浮かせられるが、時間が限られる上にそもそもメア自身も能力のことをすっかり

忘れていた。
『うんしょ!!うんしょ!!』
「おいウソップくん、やはり無理が…」
「無理じゃねェ!!連れて行く!!国の為に闘うんだろ!?アンタのケジメを付けるんだろ!?安心しろ、絶対に連れて行く!!」
『うーーん……!!』
　しかしやはりウソップとメアにはドルトンは重すぎるようだ。
「ったくバカ野郎が…」
『うーーん……!!わっ!?』
「山、登りゃあいいんだな?」
「ゾロ……!!」
　一人でドルトンを軽々と担いでしまったゾロにウソップとメアは何となく不貞腐れた子供みたいな表情を浮かべる。
『むー…』
「お前までそんな顔してんじゃねェよ。」
　ゾロに言われてもメアはほっぺたを膨らませたままさまで、拗ねてますアピール続行の姿勢だ。

そんな三人にビビは駆け寄る。
「待ってくれ！そうまでして行くというのなら、城へ行くロープウェイがある。」
「馬鹿な、城へのロープはもう一本も張られていないんだぞ!?」
「あるんだ、一本。誰かが白いロープを張り直している。ギャスタの外れの大木から城へ！」
ギャスタは確かドクターくれはが最後に向かった街のはずだ。
『じゃあはやくいこう!!ぎゃすた!!』

そこからはてんやわんやでドルトンさんが行くならと、ビッグホーンの住民たちも沢山ロープウェイに乗り込んできてゴンドラは少々手狭である。
「こりゃいい眺めだな。」
『だねー。みんなしろくてきれー。』
「そうだなーって乗りすぎじゃねェのか!?」
「傷を負ったドルトンさんを放っておけるか！」
「俺たちだって戦うぞ！」
「いや分かったけどさ…狭ェぞこれじゃあ…」
ゴンドラに乗ったものの、やはりドルトンの状態はあまり良くないようで息をするの

も辛そうだ。
「ドルトンさん…無理しないで…」
見かねてビビが声をかける。ドルトンの表情が険しいのは傷の所為だけでは無さそうだ。
メアも心配してドルトンの側に駆け寄ろうとしたその時、
「ごうっ、カハッ!!」
ドルトンが血を吐いた。その光景を見たメアは思わずその足を止めてしまった。
「ドルトンさん!?しっかりしてください!!あぁどうしよう…」
この場に医者はいない、つまり誰もドルトンを救うことが出来ないのだ。その事実に体が震える。どうしよう、どうしよう、どうにもならない問いかけがメアの頭の中を駆け巡る。ビビが必死に声をかけるが所詮それも気休め程度にしかならないだろう。
『どるとんさん!!』
ようやくメアの震える足が動いた。その声は足と同じく震えていて、顔はもう涙でぐしょぐしょだ。
「大丈夫だ…」
ドルトンはそう言ったもののやはり苦しそうだ。
「必ずこの国を終わらせてやる…歴史がなんだァ!!」

そう叫ぶドルトンの目は重傷を負っても闘志が宿っていた。その瞳にメアは何も言えなくなってしまう。

「国の統制がなんだァ!!国に心を望んで何が悪い…!!」

その言葉にビビの表情が変わった。一国の王女として思うところがあるのだろうか。

そしてドルトンが懐から何かを取り出す。

「ドルトンさん!?」

「何を!?」

それは

「ダイナマイトォ!?」

「いいか皆、城へ着いて私が城内へ入ったら伏せていろ…!!」

メアも驚いたがそれだけ本気なのだろう。

「見ろ!!城のてっぺんに誰かいるぞォ!?」

その言葉にゴンドラの外を見れば確かに誰かいる。何故だかメアにはあれがルフィだと分かった。

そして何かが吹き飛ばされた。

もしかして…あれ、わぽる?

ゴンドラが頂上に着きゾロ、ウソップが最初に降りる。

　それに続いてビビとメアもゴンドラを降りた。
「メア、足元気をつけてね。」
『うん、ありがとびび。』
　城へと続く階段を上る途中何か大きな音がした。階段を上りきった頂上、そこには先に降りたはずのウソップとゾロ、そして何故かルフィがいた。
『どういうこと…？』
「さぁ…？」
「ははーははは!!!!!」
「何してくれてんだテメェ!!」
「何だお前たちか!!あははは!!ゾロの服何か見覚えがあったから、まーたアイツらの仲間かと思ってさ!!オメーらも登ってきたんだな。ウソップ、オメー登れねェとか言ってなかったか？」
「ハッハッハー馬鹿言え!!俺はそこに山があれば登る男だぜ…しかしこの絶壁はちょっとした冒険だったなァ…!!」
「ロープウェイで登ってきたの、ルフィさん。」
『すっごいけしきだったよ!!』
　メアはルフィの足元に抱きつき初ゴンドラの感想を言う。

「ナミさんとサンジさんは無事なの？」
『なの？』
「あぁ！元気になった！」
「!!…良かった…!!」
『なみ、よくなったんだね!!』
　その言葉に安心したビビとメア。ルフィも嬉しそうに笑い足元にいるメアの頭を撫でる。
「で？お前は城のてっぺんで何してたんだ？」
「王様をぶっ飛ばしてた!!」
　そこへドルトンがやって来る。
「じゃあやはり空の彼方へと飛んで行ったのは、ワポル…!?君がヤツを…!?」
「あぁ!!そうだけど？」
　ちなみに先程からウソップが一人で得意の大ボラを吹いているが特に誰も聞いてはいない。
「それでヤツの幹部二人は…？」
「トナカイがぶっ飛ばした!!」
『となかい？』

メアはトナカイの意味が分からずに頭に?を浮かべる。
「あの二人をトナカイが…!?」
「あそうだウソップ！聞いてくれよ、新しい仲間を見つけたんだ!!」
「ん?何い!?」
「トナカイ…」
ドルトンは一人トナカイという言葉を頭の中に巡らせる。
そこに雪を踏む足音が聞こえ、ドルトンはその方向を向くとそこにはピンク色の帽子を被った小さな角の生えた青っ鼻の生き物がいた。
ドルトンにはその生き物に思い当たる節があった。
「君はあの時の…そうか、あれからずっと戦ってくれていたんだな…。」
ドルトンは膝を付き、その生き物に土下座をする。
「ありがとう…ドラムはきっと…きっと生まれ変わる」
そこにゴンドラに乗っていた人々が降りてきた。
「あ!?」
「な、何だあの生き物は!?」
「ト、トナカイ!?」
「違う、ありゃあ、ば、ば、ば、バケモ…」

「おいよさないか」
「ぎゃーー!!化け物だーー!!」
「わぁ!!かわいい!!」
　折角ドルトンが住民たちの言葉を止めたのにウソップが化け物呼ばわりしてしまう。
その叫びにショックを受けたのか青っ鼻の生き物は逃げてしまう。
「あー!!化け物っていうな!!見つけた仲間ってアイツなんだぞ!!」
「何!?あれが!?」
「ショック受けて逃げちまったじゃねーか!!待てよー!!化け物ー!!」
「『おい』!」
　だから化け物言うな。

チョッパー

『なみーー!!』
「メア!!」
『だいじょうぶ？おねつなおった？えっとえっと…』
「落ち着いて、メア。熱もだいぶ下がったし、まだ完治はしてないけどもう大丈夫よ。」
『そっか!!よかった!!』
　メアは城の中、ビビと共に部屋に入るとそこにいたナミに矢継ぎ早に質問する。そしてもう心配が無いと分かるとニコリと満面の笑みを浮かべた。
『なみー、ぎゅーってして？』
「もーしょうがないわね、ほらおいで。」
　今までずっとベッドの住民で意識の無かったナミに対して、メアはずっと心配で寂しくて、不安を感じていた。まだ完治はしていないとはいえ、良くなったナミを見て今まで我慢していた分メアは甘えたくなったのだ。ナミもそれを分かっているので腕を広げて応える。
『ぎゅーー!!』

「メアは温かいわね。そうだ、サンジ君から色々聞いたけどちゃんと麓の街で待っててくれたのね。」
『うん!!』
「メア、沢山頑張ったものね。」
ベッドの脇に座るビビもメアの頑張りをよく知っていた。
『なみー』
「なーにメア?」
『なんでもない!よんでみただけー!』
えへへーと可愛いらしく笑うメアの頭をナミは撫でる。サンジから聞いたがどうやらこの城に来るまでの山を登るとメアも言っていたらしい。最終的にはサンジが説得して山の麓の街で待っていてもらうことになったとか。本当に色々心配させちゃったわねと、ナミはその柔らかな藍色の髪を指で梳かしながら考える。
メアは甘えることが出来なかった分を取り戻すようにぎゅうぎゅうと抱きつく。この子はまだ小さい。まだまだ甘えたい盛りなのだろう。ナミは心配をかけてしまった分を存分に甘やかしてあげようと思う。
そしてさっきからドクターくれはによって治療を受けているサンジの悲鳴が響き渡っている。治療とはいえこれは大丈夫なのだろうか。メアは恐ろしくてとても聞い

ていられない。
「やっぱり悪化してたよ。無理するからさ。」
『さんじ、だいじょぶなの？おばあちゃん？』
「大丈夫さ、チビ助。アタシは医者だよ、ちゃんとした治療さ。」
『…そうなの？』
　あのサンジの悲鳴は尋常ではないものだったが。しかしこれ以上この人に何か言うのはちょっと嫌な予感がするのでメアは口を噤んだ。
「さてとドルトン、この城の武器庫の鍵ってのは何処にあるんだい？知ってるね？」
「……？武器庫？何故あなたがそんな物を？」
「どうしようとアタシの勝手さね。」
「あの鍵は昔からワポルが携帯していたので、ずっとそうならワポルと一緒に空へ…」
「何？本当かい？困ったね…」
「ドクトリーヌ。」
　そこにナミが声をかける。メアはその声色からして何か交渉をする時の声だと分かった。
「ウチのクルーの治療代なんだけど、全部タダに。それと私を今すぐ退院させてくれない？」

「そりゃあ無理な頼みだと分かってて言ってみただけかい？治療代はお前たちの船の積荷と有り金全部、お前はあと二日はここで安静にしててもらうよ。」
「ナミさん、そうよ、ちゃんと診てもらわなきゃ」
『そうだよなみー』
　治療代云々は兎も角としてもナミの体調に関する話はビビとメアはドクトリーヌに同意だ。
「平気よ、だって死ぬ気がしないもん！」
「それは根拠にならないわよ！」
『なみってばー！ちゃんとねてなきゃだよ！』
　チャリン
『あっ』
「武器庫の鍵、必要なんでしょう？」
　ナミが交渉の道具として使ったのはワポルが持っている筈の武器庫の鍵だ。何故かナミが持っていたのか、メアは疑問符を浮かべている。
「なっ!?君が何故その鍵を!?」
「本物なのかい…!?どういうこったい!?」

「スったの。」
　あっけらかんといった様子でナミは言う。メアはスるって何?とビビに聞いていた。
「このアタシに条件を突き付けるとはいい度胸だ、ホントに呆れた小娘だよお前は…良いだろう、治療代は要らないよ。ただしそれだけさ。もう一方の条件は呑めないね、医者として。」
「ちょっとまって!!それじゃあ鍵は渡せないわよ!!返して!!」
　するとドクトリーヌはナミの方を指さす。
「いいかい小娘!!これからアタシは用事があって部屋空けるよ。奥の部屋にアタシのコートが入ったタンスがあるし、別に誰を見張りに立ててる訳でもない。それに背骨の若造の治療はもう終わってんだ。いいね、決して逃げ出すんじゃないよ!!」
　そう言うとドクトリーヌはビッグホーンの住民たちを連れてどこかへ行ってしまった。
「コート着てサンジ君連れて今の内に逃げ出せってさ。」
「私にも、そう聞こえた。」
『ええ!?そうなの!?』
　純粋過ぎるメアだけは意味が分かっていなかったが。
「じゃ、サンジ君連れて早くこの城を出ましょう。」

「そうね。」
『さんじー!だいじょぶー?』
メアはドクトリーヌの治療を受けてぐったりとしているサンジに声をかける。しかし先程の叫び声からも分かるようにとんでもなく痛かったのだろう、返事は無い。
『なみーさんじぐったりしてるよー?どうしよ?』
「しょうがないから私たちで運ぶしかないわね。ビビ、手伝って。」
「えぇ。ナミさんは無理しないでね。」
「大丈夫よ。」
ドルトンは彼女たちの会話を聞き、麦わらの一味との別れが近いことを悟った。
『どるとんさん。』
「ん?何だい?」
サンジの元へ行くのかと思っていたメアが、不意にこちらへとことこ歩いてくる。
『どるとんさんはけが、だいじょぶ?』
「あぁ、ドクターくれはに治療してもらったしね。もう大丈夫だ。」
『そっか!よかった!!』
そう言うとメアは先程ナミに見せた笑顔と同じ笑顔をドルトンにも向ける。それにはついこちらも笑顔になってしまうものだ。

『どるとんさん、どるとんさんはきっといいおうさまになるよ!!』
「え!?いや…私に王なんて…」
『だってどるとんさん、やさしいもん。わぽるはやさしくないから、わたしきらい!』
うえーとメアは顔を顰める。
『だから、だからね、きっとだいじょうぶ。どるとんさんがおうさまなら、きっといいくにになるよ!』
「そうですよ。あなたには国民を思いやる気持ちがある。国王として一番大切なものをもっていると私も思います。」
ねー!とメアはビビと顔を見合わせる。ビビもドルトンが国王になることに賛成のようだ。
「メア!ビビ!そろそろ行きましょう!」
『じゃあね!どるとんさん!』
「それじゃあ!お元気で!」
「あぁ、君たちも体に気をつけてな。」
ばいばーいとメアたちは手を振りながらサンジを引きずって部屋を後にする。ドルトンは彼女たちの姿が見えなくなっても、去り際に残してくれた言葉が胸の中を巡っていた。

『うんしょ！うんしょ！』
「メアは凄いわね。」
『えへへーそうでしょ！そうでしょ！』
　サンジをメアのエスパー能力で浮かしながら城の外へと運び出す。ビビはメアのエスパーを使うところを見るのは初めてだったので、最初はとても驚いていた。
「それにしても卵から生まれてエスパーが使えるなんて、メアは不思議だらけね。」
「もうすっかり慣れてたけどやっぱり不思議よね。」
　そんな会話をしながらナミ、ビビ、メアの三人は城の外へとサンジを連れて出る。
『あ、となかいちゃんだ!!』
「トニー君？」
　どうやらトナカイはルフィの熱烈な勧誘を受けているようだ。
「おいお前一緒に海賊やろう!!なぁ!!」
「…無理だよ」
「無理じゃ無いさァ!!楽しいのに!!」
「いや意味分かんねェから!!」
　無茶苦茶なルフィの暴論にウソップがツッコミを入れる。
「…だって…だって俺はトナカイだ!!角だって蹄だってあるし、青っ鼻だし!!」

《お前たちにアイツの心が癒せるかい？》

　その言葉にナミはドクトリーヌから言われたことを思い出した。きっとあれが人間からもトナカイからも差別されてきた彼の本心なのだろう。

「そりゃあ海賊にはなりたいけどさ、俺は人間の仲間でも無いんだぞ!!化け物だし!!俺なんかお前たちの仲間にはなれないよ…！だから!!…だから、お礼を。…お前たちには感謝してるんだ。誘ってくれてありがとう。」

　一人ぼっちだったのだろう。きっと寂しい思いもしてきたのだろう。彼の辛さは彼にしか分からないけれど、多分嬉しいのだ。彼は、チョッパーは。こんなこと初めてどうしたらいいのか分からないだけなのだろう。

「俺はここに残るけど……いつかまたさ、気が向いたらここへ…」

「うるせェ!!行こうーーーーーー!!!」

　そんなことどうだっていいといったルフィの勧誘にチョッパーの目には涙が溜まっていく。

「フフフ。」

「フフン。」

「……」

「フフ。」
『よかったね!!』
「うるせェって勧誘があるかよ…」
「おおおわあああああァァァァァァん!!!!!」

「おいナミ、お前体の方は本当に大丈夫なのか。」
「平気、バッチリよ!」
「おい、俺たちも挨拶しに行こう。医者の婆さんとドングリのオッサンによ!」
「バカね、ドクトリーヌと二人にしてあげなさいよ。六年間も二人で生活してたのよ、きっと涙のお別れになるんだから…」
ナミのその言葉にメアは何故だかフラグという言葉が思い浮かんだ。
ふらぐってなんだろ?あとでびびにきいてみよ
そんなメアはせっせとウソップを見習って雪だるまを作っていた。体が小さいのでできる雪だるまも小さくて可愛らしいものである。
「ドクトリーヌも表向きはああだけど、本当は心の優しい人なのよ。」

「ふーん。そうかァ？」
「じゃあ俺たちは本当にこのまま行くんだな？」
「勿論よ。チョッパーが来たら山を降りてすぐ出航するわ、アラバスタへ！ビビもこれで納得でしょ？」
「ええ、医者がついて来てくれるなら。」
「医者ァ？」
『いしゃ？』

一体誰の事だろうとルフィに習ってメアは復唱する。もしかしてチョッパーがお医者さんなのかなとよく当たるメアの勘が告げる。
「そしたらロープウェイの準備をしとこう。おいルフィ！手伝えよ！」
「ロープウェイがあったとはなァ。すげェーなァー！」
『つぎはるふぃっくるー！』
メアは雪だるまを完成させて、次は雪でルフィを作ろうとしていた。だが子供であり、雪で何かを作ったことなど無いメア作のルフィはたいへん無惨なことになっていた。
『…あれれ？』

「メア、何を作ったの？」
ビビが声をかける。〝るふぃ〟とメアが答えると、ビビは雪像を見て固まってしまった。恐らくはコメントを考えていたのだろうが、かける言葉が無かったのだろう。
「…とっても…ステキね。」
それが精一杯のビビのコメントだった。
「おい、来たぞアイツ。あっ!?」
「えぇ!?どういうこと!?追われてる!?」
ドクトリーヌに別れを告げているはずのチョッパーが、何故かドクトリーヌに追われているではないか。
「おぉい、ロープウェイ出す準備ができ…うぇ？」
「んん？」
「みんなソリに乗って!!山を降りるぞ!!」
「うおおりゃあああああァァァァ!!!!」
「「「『何イイイ!?!?!』」」」
気絶しているサンジ以外の全員が叫ぶ。でも心の中でメアは何となくこうなることが分かっていた気がした。
しょうじき…ここまでのはよそうがいだった…

ドクトリーヌ、パワフル過ぎる…ここにいる全員がそう思った。

「いい気持ちだった！おい、もっかいやってくれ！」

「バカ、もう出航するのよ。」

「し、死ぬかと思った…」

『す！すご！すごかった!!』

!?ここはどこだ!?」

「あぁ、サンジさん！気がついた？」

ソリで山から降りるのは、先のロープウェイとはまた違う景色や顔に当たる風、ハラハラ感など、メアを興奮させるには十分過ぎるものだった。

――どこからか大砲を撃つ音がした。どうやら城の方角から聞こえてくるようだ。

一味も立ち止まって今来た方を振り返る。

「すっげェ…」

「あぁ…」

「綺麗…」

『めあしってるよ！あれ！』

そこにあったのは満開の

『さくら!!』

ピンク色の桜だった。

「ドクター…ドクトリーヌ……うぅ…ううぅ……うぅ…」
「うおおおおおおぉぉぉぉん!!!!!おおおおおおぉぉぉぉん!!!!」

バロックワークス

ルフィたちは離れゆくドラム島を船の上から眺める。
海に出ても尚、城に咲いた桜の美しさには目を見張るものがある。チョッパーはただ黙ってじっとその様子を眺めていた。
「おい、チョッパーのヤツ大丈夫か？」
「今はそっとしといてあげましょう。」
「ヤツは今、男の旅立ちってヤツを体験してんのさ。」
「生まれてから一度も出たことの無かった島を、今初めて出ようとしてるんですものね。」

「いってきます。ドクター、ドクトリーヌ。とうとう始まるんだ、俺の冒険が！」
メアにはチョッパーの思いがまだあまり良く分からなかった。ビビに聞くと、それはメアがこの船を離れて別の船に乗るのと同じくらい大変なことよと教えてくれた。
メアはこの船で生まれた、つまりこの船がチョッパーでいうところの故郷、大切な場所だ。そこから離れて過ごすことは確かに並大抵の覚悟ではないだろう。

でもチョッパーは決心した。海賊になることを、この一味に入ることを。
ならば自分に出来るのはそんなチョッパーを温かく歓迎することだ。
『きょうはうたげだね！』
この一味では何かあると宴をする。メアは宴が好きだ。皆が笑顔になれるから。だから早くチョッパーの笑うところを見たいなとメアは思った。

それから暫くして、一味は月と桜を肴に宴を始めていた。
男共はルフィの鼻割り箸で大爆笑している。メアは宴は確かに好きだが、この鼻割り箸が何なのかは未だによく分からなかった。
「チョッパー！おいチョッパー！テメこのヤロウいつまでボーっとしてんだ！」
そういうとウソップは飲めとチョッパーを連れてきて酒を手渡す。
「こっち来て歌え！」
「お前も鼻割り箸やってみろ！」
「ええ…」
その勢いにチョッパーはタジタジといった様子で、堪らずルフィたちから少し距離を置く。
「ビックリした？あんたも大変なヤツらの仲間になったモンよねー。」

「な、かま…」
「そう。非常識な連中だけど、これからは仲間なんだからアンタも慣れなくちゃね！」
　ナミのその言葉にチョッパーはちょっぴり嬉しそうに鼻をヒクヒクさせた。
「カルー！アナタどうして川で凍ってたりしたの!?」
「へへ、大方足でも滑らせたんだろ？ドジなヤツだ！」
「黙ってＭｒ．ブシドー！」
「クワァクワクワァ…」
「うん、うん。ゾロってヤツが川で泳いでいていなくなったから大変だと思って、川へ飛び込んだら凍っちゃったんだって。」
「アンタの所為じゃないのよ!!」
　全ての根源であったゾロをナミが殴る。あのときのかん…何たら水泳かとメアは思い出していた。
「トニー君アナタ、カルーの言葉が分かるの!?」
「うん、俺は元々動物だからね。動物と話せるんだ。」
「動物と…話せる…」
「凄いチョッパー！医術に加えてそんな能力もあるなんて！」
「!?バカヤロウ!!そんな褒められても嬉しくねェよ!!コノヤロウが!!」

「ところでナミ、医術ってなんの事だ?」
今回ほとんど城にいなかったゾロは、チョッパーのことをまだよく知らないようだ。
「チョッパーは医者なのよ!ドクターくれはにありったけの医術を叩き込まれた超一流のね!」
「「何イ!?」」
『やっぱりおいしゃさんなんだね!』
自分の予想が当たっていたメアはわーいと嬉しそうである。
「チョッパーお前医者なのか!?」
「すっげェェ!!」
「嘘だろ!?」
「呆れた、アンタたち何者のつもりでチョッパーを勧誘してたの!?」
「七段変形面白トナカイ。」
「非常食。」
『ええ!?』
こんなかわいいのに食べちゃうなんてダメーとメアはサンジに抗議する。分かった分かったとサンジはメアを宥めるが、本当に分かったのか少々疑問である。
「あ!?しまった俺慌てて飛び出してきたから医療道具忘れてきた!!」

「嘘！じゃあこれは!?」
「え？…俺のリュック！」
「ソリに積んであったわよ。」
「何で…？」
「何でってアナタ自分で旅の支度してきたんじゃないの？」
「…あ…」
そこでチョッパーは気づいた。全てドクトリーヌのしたことだと。口ではあんなことを言っていたが、何だかんだ自分のことを思ってくれていたのだと。
「結局、アンタの考えてること全部見透かされちゃってた訳だ。」
チョッパーの目にはさっきようやく止まったはずの涙がまた浮かぶ。
「素敵な人ね。」
「うん。」
ナミとチョッパーの会話を聞き、メアはドクトリーヌのことを思いだす。確かにナミたちと城から抜け出した時も素直に言わず、随分と遠回しな言い方をしていた。
でも、ちょっと不器用なだけで優しい人なのだろう。
そしてそんなドクトリーヌのことがチョッパーは大好きなのだろう。
「つたく人がせっかく浸ってるのに…ねぇチョッパー…チョッパー？」

黙っていると思ったチョッパーはルフィと同じように鼻割り箸をしていた。
「すなーーー!!」
『ちょっぱー…』
感動が台無しである。

「よーし、テメェら注目!!」
ガチャンガシャン!!
クワァクワァ!!
ウソップのそんな声など気にせずにゾロとサンジは喧嘩、カルーは料理を喉に詰まらせている。
「サンジィ!!肉ゥ!!」
品の欠片も無く、ひたすらに騒がしいだけのこの空間。
「俺さ…」
そしてチョッパーは未だ鼻割り箸のままである。
「聞けよテメェら!!」
「俺…こんなに楽しいの初めてだ!!」

「うん!!」
『そっか!!』
「新しい仲間に乾杯だァァ!!!」
「「「「「「『おーーー!!!!乾杯!!!!』」」」」」」

ーーー

一味の中では取り分け幼いメアは周りを年上にばかり囲まれていた。世間的に見ればルフィたちも決して歳を重ねている訳では無いが、０歳児であるメアよりは長く生きている。だから大抵のことは尋ねれば知っていたし、自分よりも知識も経験も豊富だ。

だからこんな風に自分と同じようにまっさらな反応を見せる相手はメアには今までいなかったのだ。

「ん？」

『あれ？』

「あぁ？」

その時、黒い大きな影がメリー号を覆う。

「!?何だアレ!?」

「カモメだ!!」

『でもおっきくない？』

「そうよ、あんなに大きいカモメはいないわよ。」

「おおーい、カァモメェーー!!」

『あんまりよぶのはよくないとおもうけど…』

メアの忠告も虚しく、ルフィの声に反応するかのように巨大な怪鳥がこちらへと進路

を変えた。
「来たァァァァ!!」
「ほら見ろ、やっぱりカモメじゃねェか！」
「それどころじゃないでしょ!!アンタが呼ぶからよ!!来ちゃったじゃないのよ!!」
「すっげェ!!大冒険だ!!」
　ルフィはまだカモメと言い張るし、チョッパーはワクワク顔だ。
「きゃあああァァァァァ!!!!」
　水しぶきとナミの悲鳴が上がる。
「…ちょっとルフィは？」
　顔を上げたナミの視界には今まで船首にいたルフィの姿は無く、チョッパーとメアに尋ねる。
『たべられちゃった。』
　メアは指を上空を指してのんびりとした声で述べる。
「いやっふううゥゥゥゥ!!!!」
「何やってんのよーー!!!!」
「大変だーー!!ルフィが食われた!!」
　チョッパーは慌てて他の一味の元へと向かう。

しかしゾロたちは呑気にトランプをしていた。
「そんなことしてる場合じゃないだろ!?ルフィが大変何だってば!!」
「助けてくれっつったか?」
「言ってない。」
「なら問題ない、ほっとけよ。」
『そうだよ、ちょっぱー。ほっといてだいしょぶだよ。』
チョッパーのことを追いかけてきたメアも放っておくように言う。でもとチョッパーは未だルフィのことが心配なようだが、そんなにヤワなものならこの船の船長などやれる訳がないのだ。
「ゴムゴムのオ!!」
『あ。』
腕をゼンマイのように捻り出したルフィにあればマズいとメアは呟き、その場をそっと離れる。メアの行動の意味が分からずに混乱しているチョッパーは上空を見上げ、圧倒される。
「プロペラァーーーー!!!!!」
「スゲェ…!」
そして怪鳥がルフィと共にメリー号の甲板へと落ちてきた。

「「「わあああああァァァァァァ!?!?!!」」」
なぜメアが避難したのかが分かったチョッパーであった。
「おーいサンジ肉取ってきたぞ!!あん？何だオメーら寝てんのか？」
「「オメーの所為だろ!!」」
「どーしてくれんだよ、俺良い手だったんだぞ!!」
「そっか、悪ィ!!」
「おぉ!!スゲェな!!」
「これでやっとまともな飯が食えるぜ！」
「食えんのか!?」
『さあ？』
まぁでもこの船のコックにかかればどんな食材でも美味しくなるのだから心配は要らないだろう。
「ん？チョッパー？どうした？」
「…うん、…あのさ、海賊って、海賊ってやっぱスゲェや!!」
「そっかー!!スゲェか!!」
「ちょっとアンタたち!!この船はもうすぐアラバスタへ着くのよ。遊んでる余裕なんて無いわよ！ほら！」

「「「うぃーす」」」

階段を降りながらチョッパーは尋ねる。

「ねぇ、アラバスタって？」

「ビビのお父さんが治める国よ。」

「そのアラバスタを今クロコダイルっつー悪党が乗っ取ろうとしてるんだ。」

「クロコダイルってのは七武海の一人だそうだぜ。」

「七武海？」

『そういえばわたしもよくわかんない。』

海賊に成り立てのチョッパーはまだ七武海の存在も知らないようだ。ぶっちゃけメアもよく分かってはいない。

「ヤツらは世界政府公認の海賊なのよ。」

「海賊が政府公認!?」

「あぁ、ヤツらは圧倒的に強い!!んでもって海賊を片っ端から潰しちまうんだ。だから政府は彼らを公認して海賊潰しを認めてるんだな。」

『あーそういうことだったんだね！』

ナミとウソップがチョッパーの為に七武海の制度を説明する。海賊潰す、だから政府が認めるんだね！と言うメアに本当に分かってんのかとウソップはツッコミを入れる。

「クロコダイルかァ。早く会ってみてェな!!」
「クロコダイルはアラバスタでは英雄なの。街を襲う海賊を潰してくれるから。でもそれはクロコダイルの表の顔にすぎない…。」
「ヤツは影で糸を引いてアラバスタに内乱を起こしているの。アラバスタを乗っ取るために…。誰もその事に気づいていないのよ…、国民も…お父様も…。」
『ひどい…』
「よォしとにかくお前そのクロコダイルをやっつけりゃあいいんだろ?」
「えぇ、まず内乱を抑えて国からバロックワークスを追い出すことが出来れば。」
「バロックワークス…?」
「あーそっか、それもよく分かんなかったんだよな。実は俺もよォ、イマイチよく分かんねェんだ。バロックワークスってシステムが複雑で。」
「システムは単純よ。」
　ビビはバロックワークスについて二人に分かりやすく説明をする。
「まず頂点にボスのクロコダイル。つまりＭｒ．０がいる。そのボスの指令を直接受けるエージェントが十二人と一匹いるの。彼らはそれぞれ女性エージェントとペアを組んで行動する。」
「Ｍｒ．１とＭｓ．ダブルフィンガー。Ｍｒ．２だけはペアがいないけど。」

「Ｍｒ．３ってのはリトルガーデンのロウソク男だな？」
「ええ、Ｍｓ．ゴールデンウィークとペアを組んでいた。」
「ああ、あの子…。」
　その時のことを思い出してメアはちょっぴり苦い顔をする。
「Ｍｒ．４はＭｓ．メリークリスマスとペア。この二人のことは私もよく掴んでないの…。」
「あとハナクソ男。」
「Ｍｒ．５か。」
「ハナクソ？」
「おぉ、ハナクソが爆弾になってんだよ。」
「Ｍｒ．５は全身が兵器なのよ。」
「Ｍｓ．バレンタインはキロキロの実の能力者ね。」
「体重を自由に変えられる女だろ？」
「Ｍｒ．１からＭｒ．５までがオフィサーエイジェントと呼ばれていて、全員が悪魔の実の能力者。本当に重要な任務の時しか動かない。Ｍｒ．６からＭｒ．１３までは社員を率いてグランドラインの入口で会社の資金集めをするのが仕事。」
「そういや変なサルとニワトリもいたな。」

「Ｍｒ．１３とＭｓ．フライデーね。彼らは懲罰隊なの。任務失敗者へのお仕置が主な仕事よ。」
「その他にオフィサーエージェントの部下、ビリオンズが２００人。フロンティアエージェントの部下、ミリオンズが１８００人。これが秘密犯罪結社バロックワークスよ。」
「ってこたァ１８００と２００だから…」
「２０００人もいるのか!?」
「２０００人!?」
　その桁外れの社員の多さにウソップとチョッパーは驚愕する。
「よオしよーく分かった。とにかくそのクロコダイルをぶっ飛ばしたらいいんだろ!?」
「オメー絶対分かってねーだろ」
「バロックワークス社の最後の大仕事がアラバスタ乗っ取りならば、」
「そのオフィサーエージェントとやらは残り全員ずらりと、」
「アラバスタに集結する。」
「ええ。」
「そっかーじゃとにかくそのクロコダイルってヤツを…」
「もういい。お前は黙ってろ。」
「あ、そう?」

ワガママ（番外編）

「コラー！メア!!」
『や!!』
　メアは成長の証なのか最近はワガママを言うことも増えてきた。大抵のものは子供らしく可愛らしいものなのでついつい言うことを聞いてしまうのだが、今回はどうもそうではないらしい。
　なぜならばメアを注意したのが普段彼女に激甘なサンジであるからだ。いつもであればメアのワガママにＮｏと言うことはほとんど無いが食に関しては話が別。生まれてからしばらく経ち、食の好き嫌いも出てきたのかメアは特に野菜など苦いものを嫌う傾向にあった。他にも食わず嫌いもしばしばしているようが、まぁ大方サンジに食べさせてもらっているようだ。
「野菜もしっかり食べなきゃだめだぞ？」
『…や』
　今度は優しげな声でサンジは話しかけるが、メアは首を横にプイッと向ける。
　恐らくこれは自然なことなのだろうとサンジは思う。子供が苦い食べ物を嫌うのは

本能的に毒を避ける為である。そして甘いものを優先的に摂取することでまずは体を大きくするのだ。

しかし勿論だがメリー号のコックがサンジである限り、（女であるナミとメアは特に）食事に腐った物など使う訳も無い上に栄養バランス的に見てもしっかりしている。

つまりメアが皿に残った野菜を食べない理由は無いのだ。

『うー……！るふぃ！あげる！』

「お、何だそれ食っていいのか？」

「オメーは自分の分食ってろルフィ!!」

ルフィがメアの皿に残っている料理を見て手を伸ばそうとするが、それをサンジが得意の蹴りを入れて阻止する。

もう少しの所で野菜を食べてもらえたはずのメアは作戦失敗とばかりに頬を膨らませる。

『…うそっぷ～』

「悪ィがダメだ、俺がサンジに怒られちまう。」

『むー…』

次はウソップを頼ろうとしたようだが、ウソップもサンジの足蹴りをくらうのは嫌なようで協力は断られてしまう。

この様子では多分ゾロやナミに頼ろうとしても結果は同じだろう。

「うー…」

それでも渋るメアにサンジはとうとう奥の手を使った。

「メア、それが食えたらデザートのイチゴ、もう一つオマケな。」

『!!』

その一言にメアの顔がパァァァと輝く。サンジのデザートがとても好きなメアには効果抜群のようだ。

そしてあれだけ渋っていた野菜をパクリと口に入れる。

『!?にがくない…!?』

「だから言ったろ。」

野菜が苦手になってからはメアの舌に合うような調理、味付けをしているのだから苦くないのは当然だ。

よし、ちゃんと食ったなとサンジはメアの頭を撫でる。

えへへーとメアももっと褒めて欲しそうに頭を差し出す。可愛いヤツめともっとグリグリと撫でるとメアはキャーと言いつつも楽しそうだ。

しかしこのケースはまだ良い方だ。メアは周りの反応をよく見ている。その所為で最近ある厄介な技を覚えたのだ。

それを初めて使ったのはナミとお風呂に入っていた時のこと。
「メア気持ちいい？」
『いいゆかげん～』
どこで覚えてきたのよとナミはメアと湯船に浸かりながら笑う。メアはお風呂が大好きである。浴槽に浮かぶアヒルやメアの為にとウソップが作った様々なオモチャがあるからだ。本当はルフィたちともメアは入りたかったが、そういうことに厳しいサンジから小さいとはいえレディと野郎が一緒に風呂に入るのはダメと言われてしまい毎日ナミやビビと二人でお風呂に入る日々だ。
『なみ！』
「ん？」
『ぶしゃー!!』
メアは水鉄砲をナミの方に向けて撃つ。ナミもやったなこのー！と自分の手を水鉄砲代わりにして撃つ。それにメアはきゃっきゃと弾んだ声を上げる。
「そろそろ逆上せちゃうから上がりましょう。」
『……』
「メア？」
『や!!』

もうお風呂から上がろうとするナミに対して先程とは打って変わり静かになったメアにナミは問いかける。そのメアから返って来たのは拒否の言葉であった。

メアはお風呂が大好きであるのは先程も申し上げたが、最近はワガママ期の為かお風呂から出ることを拒むことがしょっちゅうあった。

「もういっぱい遊んだでしょ?アヒルさんにバイバイしなさい。」

『やだ!!』

これにはナミも頭を悩ませる。ルフィやゾロのように全く風呂に入らないのも困るが、これはこれで参ってしまう。

だがメアも必死だ。他のオモチャはいつでも遊べるが、お風呂にあるオモチャは一日にたった一回しか遊べない。だからもっと長くお風呂に入っていたいのだ。ナミが必死でメアをお風呂から出そうとするように、メアもメアでできるだけ長く留まろうとする。そしてメアの考えた秘策がこれだ。

『なみ〜、おねがい!』

「うっ!!」

両手を顔の横に持ってきて小首を傾げたおねだりポーズ。これがまぁ可愛いこと。

堪らずナミは言うことを聞きそうになってしまう。

『おねがい〜!』

「!!っ!!」
『〜〜!!』
「もう、ちょっとだけよ!」
『やったーー!!』
後にナミはあんな顔でおねだりされたら聞いてあげたくなっちゃうじゃないと悔しげに語る。
一味の中でも取り分け幼いメアはとんでもない技を習得しつつあった。

特訓（番外編）

アラバスタへと進むゴーイング・メリー号。その船の上でメアは一人考えていた。今の自分は皆に比べ力不足である。その証拠にドラム島では自分は何も出来なかった。アラバスタへ着けば当然バロックワークスとの戦闘があるだろう。そして今度こそ皆の役に立ちたい。だからメアは決心したのだ。

自分の能力の特訓をしようということを。

『よし!』

やる気は十二分に満ち溢れている。しかし困ったことに、どうやって特訓をすれば良いのかは全くと言っていいほど分からない。

ふとメアの頭には一つのアイデアが浮かんだ。いつも修行をしているゾロに話を聞いてみることだ。それ以外に考えが思い付かなかったのもあり、取り敢えずメアはゾロの所へ足を運んだ。

『ぞろ!』

「何だメアか、どうした?」

メアの考えていたようにゾロは甲板でいつものように修行をしていた。普段は修行をしているゾロの邪魔はしないようにしているメアが話しかけて来たことにゾロは不思議に感じているようだった。

『めあもとっくんするの!!』

「はァ??」

ゾロからすればメアの話の流れがさっぱり分からないので頭に疑問符を浮かべている。

どういうことかと聞き出せば要は強くなりたいのだということだ。なるほど、それで自分の所へ来たのかとゾロやっと納得したようだ。

だが普通の人間ならともかくメアの能力については何が出来るのか、どれくらいの力が秘められているのか何もかもがさっぱり分からない。メアの希望は能力の強化だ。これでは特訓のしようが無い。

「そもそもどれくらい能力を使えるんだ?」

『わかんない。』

あっけらかんとメアは言う。それに対してゾロはじゃあ今やってみたら良いじゃねえかと、試しに自分が持っていたダンベルを浮かせてみろとメアに言った。

じゃあいくねーとメアがダンベルを浮かせてみせる。己の手から完全に離れた所で

ゾロはカウントを始めた。

一、二、三……

最初は余裕そうなメアであったが徐々に限界は近づいてくる。

十七、十八、十九……

『〜〜〜!!』

二十を超えたあたりから、メアの手は段々プルプルと小刻みに震え始めてきた。

『〜〜!!もうむり!!』

最後の方は根気だけで何とか凌いでいたが、それも限界を迎え、メアはダンベルを落としそうになったが、それをゾロは難なく拾う。

「記録は三十五秒だな。」

『はぁはぁ…』

限界ギリギリまで能力を使ったことなど無かったメアは息も絶え絶えといった様子だ。

「おい、大丈夫か？」
『はー…はー…』
　これは思った以上に疲れるなとメアは開始五分もしない内に床に突っ伏していた。
「よし、じゃあ次は四十秒を目指してみたらどうだ？」
『……』
「どうした？」
『…なんか、きもちわるい……』
「お、おい!?チョッパー!!」

　ゾロが慌ててチョッパーを呼ぶ。チョッパーはその声の様子に何事かとすぐに駆けつけてくれ、女部屋までメアを運んでいった。そのチョッパーの見立てによれば、能力の副作用の可能性が高いということだ。安静にしていれば収まるであろうと言う。
「メア、大丈夫か？」
『うん…ちょっと、らくになったから。』
　メアは今女部屋のベッドに横になっていた。
　しかしこれでは、何だか全く特訓どころではなくなってしまった。
『めあ、だめだめだね…』

「え!?何でた!?」
　事情の分からないチョッパーに今までの経緯を説明する。そうしている内にますます自分の不甲斐なさでメアは凹んでしまう。
「メアは全然ダメダメなんかじゃないぞ!!」
『でもめあは、いっつもみんなにまもってもらってる。ほんとはわたしもみんなといっしょにたたかいたいの!!』
「メア…」
　もう守られてばかりでは居たくない、自分も皆を守りたいのだ。
　それが嘘偽りの無い、メアの本音だった。
『やっぱりわたし、とっくんつづけるよ!!』
「ええ!?でも無茶は…」
『びびのためだもん!!こんなのどうってことないよ!!』
　そう言うとメアはぴょんとベッドから飛び降りて部屋を出ていってしまう。
「メア!?待てよ!?」
　その後をチョッパーは慌てて追いかける。
『ぞろー!!やっぱりわたし、とっくんするよ!!』
「さっき倒れたばっかじゃねェか、大丈夫なのかよ?」

特訓するといって聞かないメアに対し、チョッパーと同じくゾロも難色を示す。
『だって…だって…これじゃあだめなの!!もっとつよくなりたいの!!』
「……」
その言葉を聞きゾロは暫し考える。メアは今までは生まれたばかりということもあって、特にサンジやナミ辺りが過保護とも言えるくらいに戦いからは遠ざけていた。しかしこれから向かうアラバスタではそうも言っていられないだろう。ただでさえこの一味は少数であり、バロックワークスを相手取るとあればメアのことを守りながら戦えるとは限らない。メアが強くなろうとしているのであれば、これは良いことなのではないかとゾロは思う。
「よし！その特訓俺が付き合ってやる！」
「ええ!?」
『ほんと!?』
わーいとはしゃぐメアとは対称的にチョッパーはどこか心配そうな顔である。ゾロはチョッパーの頭をガシガシと撫でると心配ねェよと声をかける。
「いきなり無茶はさせねェよ。あのラブコックとナミのヤツに怒られちまうからな。」
『あ、ちょっぱーばっかりずるい！めあもなでて！』
「あーほら、分かったから騒ぐなよ。」

『んふふー!』

ゾロはメアのおねだりを聞いてやり右手でチョッパー、左手でメアの頭を撫でる。特訓するとは言ったものの、こういうところはまだまだ甘えん坊だとは思う。

そのメアの様子を見ていたチョッパーは、先程女部屋で自分自身の思いを語っていた時とは違い、なんだかとても幼くて守ってあげなくてはいけないような気持ちになった。

「一度特訓するってテメェで言ったんだ、俺は厳しいぞ。」

『だいじょうぶだよ!!がんばる!!』

「ホントかァ?」

『ほんとだもん!やれるから!』

えいえいおー!とメアはやる気満々だ。チョッパーもゾロと同じくメアの特訓に付き合うことにした。また倒れられては大変だからという理由もあるが、チョッパーの中でメアは何となく目が離せないような存在になっていた。

「こいつはいつもこうなんだ。まだまだ危なっかくてな。」

ボソリとゾロはメアに聞こえないような声でチョッパーに呟く。

恐らくゾロも、いやゾロ以外の皆も自分と同じような思いなのだとチョッパーは何となく気付いた。

「お前も気長に見守ってやってくれ。」
そうゾロは言い、メアと特訓の内容についてああでもない、こうでもないと話し合う。
「（何だか…妹みたいだな…）」
チョッパーはそんな感情を胸に、特訓に勤しむ二人を見つめていた。

Mr．2

メアは困惑していた。
『(なんだろう…このひと…)』
困惑するのも無理はない。
何せメアの視線の先に居たのは…

「もう…死ぬかと思ったわ…」
オカマであった。
メア、初のオカマとの遭遇である。

海底火山により船が蒸気で包まれた際にこのオカマは、ルフィとウソップの手によって釣りの餌にされていたカルーに掴まったのだそうだ。
そしてカルーから手を離してしまい、溺れていたところを助けたのだ。
「やーホントにスワンスワン。見ず知らずの海賊さんに命を助けてもらうなんて、この御恩一生忘れません！後、温かいスープを一杯頂けるかしら？」

「「「「無ェよ!!」」」」」
「こっちが腹減ってんだ!!」

ちなみに食料は数分前ルフィ、ウソップ、チョッパー、カルーの所為で底を尽いている状況である。
「あら!!アナタかわゆいわね!!後そこのおチビちゃんも!!好みよ～食べちゃいた～い♥チュッ♥」
『!?（ブルブルッ）』
「うっ…変な人…」
オカマの投げキッスにより、メアとビビの背筋には寒気が走る。
余談だが、メアは投げキッスとは背筋が凍るものと覚えた。
「オメー泳げねェんだな。」
「そうなのよ。アチシは悪魔の実を食べたのよ。」
「へーどんな実なんだ?」
「そうね、じゃあアチシの迎えの船が来るまでなんだスィー、余興代わりに見せてあげるわ！」

「これがアチシの能力よーーーん!!」
　そう言うとオカマはルフィを思いっきり弾き飛ばした。
「「「「『!?!?』」」」」
「何を…!?」
　ゾロが慌てて刀を抜く。
「待って待ってよゥ!!余興だっていったじゃないのよゥ!!」
「なっ…!?」
　しかしその次の瞬間にはそのオカマの姿に圧倒されてしまった。だが、それも無理はない。

「ジョーダンじゃないわよゥ!!」
「あ!?俺だァ!?」
　なぜならばルフィと瓜二つの顔になっていたからだ。
『わぁー……』
　これにはメアも目を疑った。そっくりとか、似ているとかそういうレベルの話ではないのだ。全く同じ顔が二つ。これが悪魔の実の力によるものなのだろう。

「ビビったビビったビビった!?アーッハッハッハ!!」
　オカマが自分の左手で顔を触れば、ルフィの顔からあの濃い化粧をした顔へと元に戻る。
　これがマネマネの実の能力だとオカマは話す。
「声も…!!」
「体格まで同じだったぜ…!!」
「す、すっげェー!!」
　オカマはビビとメア以外の残りの面々に右手で触れていく。サンジがここにいないのは食料を食い荒らした船長がまだ何か食べたいと騒いだ為に、食料庫を片っ端から調べてくれているからだ。
「まァ最も殴る必要は無いんだけどねェ～。」
　殴ったのは本当に余興らしい。
「ハァイ見てて！」
　次の瞬間にはオカマの顔はウソップに変わる。
「この右手で！」
　次はゾロの顔だ。
「顔にさえ触れれば！」

お次はチョッパー。
「この通り誰の真似でも」
最後はナミ。
「出来るって訳よ！…体もね！」
「「うおおおおぉ!!」」
「やめろォ!!」
ナミの体を見せたオカマは当然殴られた。
「残念だけどアチシの能力はこれ以上見せる訳には…」
「オメーすっげェー!!もっとやれーー!!」
「うおおおお!!!!!」
これ以上は能力を使うのを渋るオカマだが、もっと能力を見たいルフィたちに煽られてその気になったようだ。
「あーんもうしょーがないわねェん!!じゃあ見せちゃおーかしらん!!」
「ノリノリじゃない…」
ゾロとナミは少し離れた所にいる。ルフィたちほどの興味は無いらしい。
オカマの能力はメモリー機能付きだそうで、見たことの無い人物の顔へ次々と変わっていく。

その中でビビの顔色が変わったのをメアだけが見ていた。
『びび?』
どうしたのと続けようとした言葉は、ビビが余りにも深刻そうな顔をしたので、声にはならなかった。
「くっだらねェ…」
ゾロとナミはつまらなそうにそのオカマのショーを見ている。
「ドゥだった?アチシの隠しゲイ!普段は決して人には見せないのよゥ!!」
ビビは先程からずっと顔色が悪い。何かおかしな所があったかとオカマの能力を思い出すが、メアには思い当たることは何も無い。しかしビビのこの様子からして、何も無い訳が無いのだ。メアは頭をグリグリとして必死に思い出そうとする。
そんなメアとビビのことは露知らず、ルフィ、ウソップ、チョッパーはすっかりオカマと仲良くなったようだった。一緒に肩を組んでよく分からない歌を歌い、盛り上がっている。
そこへオカマの迎えの船が来たようだ。
「もう、お別れの時間…残念ね…」
「「えええェェェェェ!?!?!」」
「行かないでくれよォ…」

ウソップが涙目で懇願する。
「悲しむんじゃないわよぅ!!旅に別れは付き物…でもこれだけは忘れないで。友情ってやつは付き合った時間とは関係ナッシング!!」
「また会おうぜーーー!!!」
「さぁ行くのよお前たち!!」
「ハッ!!Ｍｒ．２ボン・クレー様!!」
「Ｍｒ．２!?!?!」
ここにいる全員に衝撃が走る。
「ビビ!!オメー知らなかったのか!?」
「えぇ…私、Ｍｒ．２とＭｒ．１のペアにはあったことが無いの…能力も知らないし…噂には聞いていたのに…」
そういうとビビは崩れ落ちる。
『びび、だいじょうぶ?』
慌ててメアが駆け寄る。
「大丈夫よ……Ｍｒ．２は大柄のバレリーナで、オネェ口調で、白鳥のコートを愛用して、背中には盆暮れと…」
「「気付けよ」」

堪らずルフィたちがツッコミを入れる。
これにはメアも少し呆れ顔だ。意外とビビは天然なのだろうか。
「どうしたんだ？ビビ？」
しかしＭｒ．２と気付かなかったにしてはビビの顔色の悪さは少し不可解なところがある。
「さっき、あいつが見せた過去のメモリーの中に…メモリーの中に…父の顔があったわ…アラバスタ国王、ネフェルタリ・コブラの顔が…」
『びびのおとーさんのかおが!?』
「テメェが例えば王に成り済ませるとしたら、そうとう良からぬこともできるよな…」
「そりゃあ厄介なヤツを取り逃しちまったな…」
「アイツ敵だったのか!?」
王に成りすまして行う犯罪。メアは自分にはきっと想像も出来ないような悪い事をしようとしていることだけは分かった。
「確かに敵に回したら厄介な相手よ。アイツがこれから私たちを敵と認識しちゃったら、さっきのメモリーでこの中の誰かに化けられたりしたら…私たち仲間を信用出来なくなる。」
「そーかァ？」

今のナミの説明をルフィは全く分かっていないようだ。
「あのねェルフィ…」
「まァ待てよ。確かにコイツの意見には根拠は無ェが、アイツにビビる必要は無ェって点では正しい。今アイツに会えたことをラッキーだと考えるべきだ。対策が打てるだろ？」
『たしかに！』
アラバスタに着いてから不意打ちであんな能力に出会っては勝ち目は無かったかもしれないが、今対策を考えられればそれは逆に心強い。
「でもどうやって？」
「それは…」
その時船を凄まじい揺れが襲った。
「ニャア〃ア〃ア〃ア〃ア〃」
「何か出たーーーーー!!!!!!」
「海猫!!」
『うみねこ？』
「「海獣だーーー!!」」
海猫は動物図鑑で鳥だったと思うけどと、メアは思い出す。しかし目の前のアレは巨

大な猫のようだ。
「四日ぶりの飯だァーー!!!!」
「飯だァーー!!!!」
　ルフィとゾロのその気迫に海猫も怯えたのか何だか顔色が悪い。
「うおっ引きやがった!!」
「バックバック!!」
「出来るかァ!!」
　そこへ食料庫にいたサンジが駆け着ける。
「おっ?逃がすんじゃねェぞ!!確実に仕留めろ!!どう料理してくれようか!!この化け猫が!!」
「ダメッ!!」
　そんな均衡状態に終止符を打ったのは意外にもビビであった。三人の頭をモップで殴りつける。その隙に海猫は海底へ逃げてしまった。
「ビビ!!こんにゃろ何すんだ!!」
「な、何でビビちゃん……?」
　三人は訳が分からないといった様子だ。
「食べちゃダメなの!!アラバスタで海猫は神聖な生き物だから。」

「早く言え！」
「海には色々いるんだな…」
「へへっあんなものにビビるとはお前もまだまだだな。よォし俺がカームベルトで勇敢に海王類と戦った時の話をしよう…」
「海王類と!?」
「食いモンが逃げた…」
『るふぃ、てすりたべないでね？』
　ルフィは名残惜しそうに船の手すりをガジガジと噛んでいる。
「だけど安心して。もう少しでお腹一杯食べられるから…」
「本当かァ!?今度は何猫が出るんだァ!?」
　ルフィの中で猫というのはあくまでも食料の一つに過ぎないらしい。
　チョッパーも最初は非常食扱いだったもんなぁとメアは考えた。恐らく船長の辞書には愛玩動物という言葉は無いのだろう。
「ビビ、風と気候が安定してきたみたい。」
「ええ、アラバスタの気候海域に入ったの。海猫が現れたのもその証拠。」
「後ろに見える〝アレら〟もアラバスタに近い証拠だろ。」
　ゾロの発言通りに後ろにはバロックワークスと書かれた船が両手では数え切れない

ほど見えてきた。
『おふねがいっぱい!!』
「船があんなに!!いつの間に!!」
「おい、あれ全部バロックワークスのマーク入ってんじゃねェか!!」
「社員たちが集まり始めているんだわ…恐らくビリオンズ、オフィサーエージェントの部下たちよ…」
「敵は２００人は堅いって訳だ。」
「それもバロックワークス社精鋭２００人…ウィスキーピークの賞金稼ぎとは訳が違う…」
「い、今の内に砲撃するかァ!?」
そう言ってウソップが砲台を構える。
「早くやっちまおうぜ!!」
「行ってぶっ飛ばした方が早ェよ!!」
そうウソップを止めたルフィだったが、飯を食うのが先だと言い始める。
「気にすんな、ありゃ雑魚だ。」
「そうさ、本物の標的を見失っちまったら終わりだぜ?こっちは九人しか居ねェんだ。」
珍しく意見の合ったゾロとサンジによってその場は収められた。

　そして一味はＭｒ．２への打開策の為に腕に包帯を巻くことにした。勿論それだけではＭｒ．２がその情報を聞き入れた時に真似をされてしまう。しかしその包帯の下に更に印があったなら…簡単には真似をされないだろう。
「とにかくしっかり締めとけ。今回の相手は謎が多すぎる。」
「なるほど！」
「これを確認すれば仲間を疑わずに済むわね！」
「そんなに似ちまうのか？その…マネマネの実に変身されちまうと。」
『すごかったよ!!えーと…すいかふたつ？』
　メアはサンジに包帯を巻いてもらっている。
「いや、それを言うなら瓜二つだろ!!でも確かに似てるなんて問題じゃねェ!!同じなんだ!!惜しいな～見るべきだったぜ！俺たちなんか一緒に踊った程だ！」
「俺は男のバレリーナには興味無ェ。」
「クワァ…」
　ふとメアがカルーの方に視線を向けるとカルーは包帯でグルグル巻きになってしまっていた。
『かるー!?どうしてこんなになっちゃったの!?』
　慌てて解いてあげようとするも複雑に絡み合った包帯はそう簡単には解けない。

『えぇー!?ほどけないよー!?さんじーー!!』
「ハイハイ、リトルプリンセス。」
　そしてサンジはいとも容易くメアの代わりにカルーの包帯を解く。
『わー!!すごーい!!』
「別にこれくらいのこと、なんてこと無いよ。」
『よかったね！かるー!!』
「クワァァァ!!」
『じゃあつぎはわたしがやってあげる!!』
　メアはそう言うとカルーの左の翼にグルグルと包帯を巻く。思いの外綺麗に巻けた翼の包帯にメアは満足気な表情だ。
『さんじ！どう!?きれーにまけたよ!!』
「あぁ、上手じゃねェか。」
　えへへーと膝の上に上ってきたメアの頭をサンジは撫でる。
「あんなヤツが敵の中に居ると分かると、迂闊に単独行動も取れねェからな。」
「なぁ、俺は何をすればいいんだ？」
「出来ることをやればいい！それ以上はやる必要はねェ!!勝てねェ敵からは逃げてよし!!」

「オメーそれ、自分に言ってねェか？」
『あはは！』
「クワァックワァッ!!」
「俺に出来ることか…分かった!!」
　チョッパーは何か分かったようだし、ウソップの言葉は案外的を射ているのかも知れない。
「島が見えてきたぞォーーー!!!!」
「ナノハナという町に停めましょう。船を隠さなきゃ。」
「よゥし!!これから何が起こっても、左腕のこれが仲間の印だ!!」
　仲間の印……私たちだけの印…その言葉の響きにメアは高揚感を抑えきれない。
「じゃあ上陸するぞォ!!飯屋へ!!後アラバスタ！」
「「「「『ついでかよ！』」」」」」
『びび』
「ん？」
『なんか……いいね！こーゆーの!!』

「そうね!!」

アラバスタ

『ついた!!あらばすた!!』

麦わらの一味はビビの故郷であるアラバスタで船を泊めた。目の前には見渡す限りの砂漠が広がっている。

「これがアラバスタの町か!」

「飯〜〜〜〜!!」

「良い?みんなに言っとくけど、くれぐれも本能での行動は慎んでよ。」

「は〜いナミさん♡」

「それを一番言い聞かせなきゃならねェヤツがもう居ねェぜ。」

「飯屋ーーー

毎度の事とはいえ、一端の船長なのだからもう少ししっかりしてほしいとビビたちはしみじみ思う。
「心配無ェよ、騒がしい所を探せば良い。居るはずだ。」
「言えてる。」
「もー、自分が賞金首だってことを自覚して欲しいのよね…特にこういう大きな国では…」
ナミの言うことは最もだが、メアは多分それは一生無理だと思った。しかしそれを言うのも何だか酷なので言葉にはしなかったが。
「放っとけよ、どうにでもなる。とりあえず飯屋と、考えるのはそれからだ。」
「どいつもこいつも…」
「…私とカルーは一緒には行けないわ。」
「え？」
『どして？』
「何だ？腹の具合でも…」
「ここでは顔が知られ過ぎてるから…」
確かにビビは王女である。その姿を見られたら国民が王女だと分かってしまったとしても不思議ではない。

「違ェねェ。」
「だーい丈夫。俺がビビちゃんの分まで買い出ししてくっからさ。」
「クワァァァァ!?」
　その時突然カルーが悲鳴のような鳴き声をあげた。
『？』
「お？」
「どうしたの？」
　そう問われ、カルーが自らの翼で指したのは何とＭｒ．３と船体に刻まれた船であった。
「Ｍｒ．３の船!!」
「あんにゃろう、くたばって無かったのか…!」
「間違いないわ！あの船は確か、ドルドルの実の力を動力にしているはず！」
「来てやがんのか…」
「厄介だな…俺たちは顔が割れている。」
　Ｍｒ．２が既に自分たちを敵と認識しているかは分からないが、それよりも前に顔が割れてしまっているゾロとナミは確実にアウトだ。のこのこと町へ出ては見つかってしまうかも知れない。

『どうしよう…』
「大丈夫だ！俺に考えがある！」

『だからってこれは…』
　ウソップの策は至極単純だった。サンジ、メア、チョッパー以外の人間を大きな布で覆い隠すというものだ。
「どこにいるか分からねェからな。目立たねェように行動するんだ。」
「十分目立ってると思うのよね…」
　メアは周りの人達の好奇の目に晒されて何となく気分が悪かった。
『むー…』
「もう少しの辛抱だ、我慢してくれ。な？」
『…わかった…』
　サンジにそう宥められてはメアは頷く他になかった。
「良し良い子だ！後で町で買い出しする時好きな物一つ買ってやるからな。」
『ほんと!?』
「財布の上限を超えなければだが、な。」

サンジのその言葉にたちまちメアは周りの目など忘れて上機嫌になる。何だかんだこういうところはまだまだ子供らしさを感じさせるとサンジは思う。
「よしもういいだろう。みんな出てこいよ。」
『ついたよー!』
「全くこんな格好で町を歩くなんて…」
「よーしみんなもういいぞー!」
「とっくに脱いでるよ。」
「クワァ」
「誰にも気付かれなかったみてェだな!」
「だとしたら奇跡よ。」
まさかのアホみたいな方法で町の中へと入った一味だったが、先程からビビの様子が何だかおかしい。サンジが話しかけてもどこか上の空だ。
「どうしたの?」
「ごめんなさい、ちょっとホッとしてたもので…少なくともこの町の様子を見る限りではまだ大丈夫みたいだから。安心は出来ないでしょうけど…間に合いそう…」
『びび…』
「…そうね、平和な町に見えるわね。」

「おいビビ、反乱を食い止める手段はあるって言ってたな。これからどうする、俺たちは何をすればいい。間に合いそうってんなら行動は早い方が良いだろ？」
「それはそうだけど、約束は私をアラバスタへ送り届けるってこと…イタッ！」
「呆れた、まだそんなこと言ってるの？」
『みずくさいよ！びび！』
「ナミさん…メア…」
「ここまで一緒に旅してきてて今更放っておける訳無いでしょ？」
「そうだぜビビ！メアの言う通り水臭いこと言うなよ！」
「七武海にも興味あるしな。」
「アンタのそれは余計！とにかくいらん事考えるんじゃないの！」
「どうせ俺以外は命を狙われてるんだしな。」
「サンジさん…」
「そういうこと！」
「大体この国が潰れたらアンタを送ってきた恩賞が貰えないじゃない。分かった？」
「ハッハイ」
　どうやらナミは恩賞についてはしっかりと覚えているらしい。ナミはこう見えてお金のことになると結構強かなところがあるのだ。

「分かれば宜しい!!」
『もーなみってば…』
「地獄に落ちろ…」
「ありがとゾロ、アンタの貸しも忘れてないからね?」
「テメェ…!!」
「お化けになっても取り立てるわよ〜!」
「な!?この…!!」
「４０万ベリーしっかり返して貰うからね!」
「増えてんぞおめェ!!」
『ぞろ。なみからおかねかりたら、かえすのたいへんだよ?』
「身をもって経験済みだァ…」
「早く返さないともっと増えるわよ〜!」
「おいウソップ何とか言えよ!」
「いやいい。」
「ナミさんが正しい!!」
「んだとォ!?」
そんな一味の様子にカルーとチョッパーは顔を見合わせて笑った。

ーーー

「大丈夫！俺に出来ることはやりたいんだ！」
『めあもいく！めあはおかまに、かおさわられてないし！』
「そういえばそうだったな。」
「でもメアはＭｒ．３と会ってるわよね？大丈夫かしら…」
『かみかえればだいじょぶ！なみ！みつあみにして！』
「確かに髪型で印象って結構変わるしね。任せて！うんと可愛くしてあげる！」
　そしてサンジとチョッパー、髪を三つ編みにしてもらい上機嫌なメアが物資の調達へと町に来ていた。
『～～～♪～～～～♪』
「メア嬉しそうだな！」
『だってだって、なみにすっごくかわいくしてもらったんだもん！』
「あァ、良く似合ってるぜ。リトルプリンセス。」
『えへへー！ありがとー！』
「…？何かいい匂いがするぞ？」
『ほんとだーなんだろー？』
「あの店だな。」
　そういってサンジは店の店主に何を焼いているのか話を聞く。

「鹿肉だとよ。」
「!?」
　チョッパーはそれを聞き、慌てて首を振る。
「流石歴史のある国だな。面白い食材も沢山あるぜ。」
　そうサンジはいう。コックとしても見どころのある町なのだろう。
　そしてさっきからチョッパーが頻りに周りの匂いを嗅いでいる。
『どうしたの?ちょっぱー?』
「食べ物に混じって変な匂いがする…」
『(スンスン)ほんとだー!』
「変な…?あァ、こりゃ香水の香りだな。」
「香水?」
「ほれ、あの店で売ってんだ。」
　それを聞き、チョッパーは嫌そうな表情を浮かべた。
「俺この匂いあんまり好きじゃ無いな〜、っておい!」
　どうやらサンジは香水を売っている店から出てきた女性をナンパしているようだ。
『ちょっぱー。つれもどすよ。』
「うん。」

「お姉さん素敵な服ですねェ。神秘的なその香りも貴方の魅力の前では霞んでさえ思える…どうでしょうそこでお茶でも…ってアーー!!」
「キャー!!」
　チョッパーがサンジのズボンを引っ張ったせいで、パンツが丸出しになってしまった。その姿に女性たちは悲鳴をあげてそそくさと行ってしまった。
「何だよチョッパー!!良いとこなんだぞ!!」
「何やってんだよ、買い物が先だろ？」
「分かってるよ!!」
「あーダメだこの匂い…気持ち悪くなってきた…」
「いーよいーよ、無理すんな。買い物はしとくからよ、向こうで待ってな。じゃーな～！…お姉～～さ～～～ん♡」
『まったくもう…でもちょっぱーはやすんでていいよ。』
「え、でも…」
『…さんじにははなしがあるから。』
「う、うん…」
　その時のメアの様子を、チョッパーは後にナミに似て凄く怖かったと語った。

「あァ素敵なお姉さん！この砂漠の太陽にも負けないようなその美しい肌！その透き通るようなアナタの美しさに僕はもう！虜です!!」
「アハハ…」
　メアは町の中で先程とはまた違う女性をナンパしているサンジを見つけた。
『……』
　メアの中では今までにない感情が渦巻いていた。
　サンジは自分のことを可愛いと言ったのに、他の女性にデレデレと鼻の下を伸ばしてしまっている。それが何となく面白くない。
　その感情が嫉妬ということをメアはまだ知らない為、故にモヤモヤとしたままサンジを連れ戻しに二人の間へと入った。
『さんじ!!』
「げっメアちゃん…」
『ごめんね、おねーさん。このひといつもこうだからきにしないでね！』
「あらそうなの？あなたの妹さん？可愛いわね。」
「あ、いや、そういう訳じゃ…」
『そうなの！おにーちゃんいっつもなんぱばっかりでこまってるの！』

勿論サンジとメアは兄妹では無いが、女性の勘違いをこれ幸いとばかりにメアは便乗する。
「そうだったの…アナタも妹さんは大事にしなきゃダメよ?」
「え、あの、いや…」
『そうだよ!かいものにいくんでしょ?』
「え、あ、ウン、ソウダネ…」
サンジはメアから逃げられないことを悟った。
「じゃあ私はこれで。」
『じゃーねー!』

「あァ、綺麗なレディ…」
『もーいつまでおねーさんのことみてるわけ?』
そう言うとメアはほっぺたを膨らましいかにも怒ってますよといった様子だ。勿論その姿もとても可愛らしいのだが。
『きょーはわたしいがいのおんなのこ、ほめちゃだめ!』
「メ、メアちゃん?」
いつもとは違う様子のメアにサンジは困惑する。

『だって…わたしのほうがかわいいもん…』
「グハァ!!」
メアのその可愛らしい嫉妬にサンジは胸を撃ち抜かれたようだ。今も地面に這いつくばって可愛さに悶えている。
『さんじ?』
いつまでも返事が無いのでメアはサンジの顔を覗き込む。
「いや、大丈夫だよ。さァ買い物に行こうか、リトルプリンセス。」
『!うん!!』
その言葉にメアはニッコリと弾けるような笑みを見せる。その可愛らしさにまたしてもサンジは悶えそうになった。

ーーー

『もうのこりのかいものする？』
「それもそうだな。」
そう言うとサンジとメアは再び町中へ向かい、今度は水と食料を買いに行く。
『さんじ、にもつおもくない？めあもつ？』
「大丈夫だよ。レディに持たせる訳にはいかねェからな。」
『でも、めあもおてつだいしたい！』
「…んー…じゃあこっちの服持ってくれ。」
サンジはメアとチョッパーの分の服をメアに渡す。持ってくれと言いつつ、軽い荷物を渡す当たりにサンジの気遣いが窺える。
まぁメアは勿論そんなことにも気付く訳もなく、お手伝いが出来るとはしゃいでいるが。
「重くないかい？」
『うん！実はね、えすぱーでうかしてるんだよ！』
「そうなのか？」
町中など人が多い所では能力を使わないようにメアはナミやサンジから口酸っぱく言われている。そのためメアは荷物に手を添えた状態で能力を使い、傍から見ればただ荷物を手に持っているだけにしか見えない。

「へェ、便利なモンだな。」
『でしょ？あ、何かいい匂いする！』
「そうだな、甘い香りがするぜ。」
『あそこじゃない？』
　メアが指を指したのはお菓子屋さんのようで、一口サイズのお菓子が何やら蜜の様なものに沈められている。
「おい、店主。これは何だ？」
「お、観光客かいアンタ？これはザラビアってお菓子でね、簡単に言えば蜜がたっぷり染み込んだ小さいドーナツってとこかな。」
「ほ～。」
『さんじ！わたしあれたべたい！なんでもひとつ、かってくれるんだよね！』
「そうだな、おい店主このザラビアってのをくれ。」
「毎度あり！」
　サンジはザラビアを買い、一つメアに渡す。メアは渡されたザラビアに早速かぶりつく。すると中から蜜がじゅわりと口に溢れてくる。
　サンジも一つ食べてみるがこれが甘い。甘すぎると言ってもいいくらいだ。しかし体力の消耗が激しい砂漠ではこの甘さが体に染み渡るような気もする。

メアはこの甘さを気に入ったようで、もう一つちょうだいとサンジにねだる。
「ほら、これで最後だからな。これ以上は昼ご飯が食べられなくなる。」
『えー!!』
ぶーと文句を言うメアだが、食に関してはサンジにおねだりは通用しないのは分かりきっているので早々に諦める。
「おーい!!サンジ!!メア!!」
『ちょっぱー!!』
「お前、どこ行ってたんだ。」
「ちょっと色々とな…」
『ちょっぱーもたべる?ザラビアだよ!』
「何か甘い匂いすると思ったらそれか!美味しいのか?」
『あまくて、おいしかったよ!はいあーん!』
「あー」
メアはチョッパーにあーんとさせてザラビアを口に入れる。ちなみにこれがナミだったらサンジは口煩くなっていただろう。幸い幼女と動物というコンビなので微笑ましく見守っていたが。
「よし、そろそろ戻るか。」

『なみたち、おようふくきにいってくれるかな？』
「気に入るさ！美しいナミさんとビビちゃんにピッタリだからな！」
『へへーそうだねー！』
　そんな会話をしながら三人はナミたちの所へ戻って行った。

ーーー

「言うだけムダね…」
『びびそのふく、やだったの…？』
サンジとビビの会話を聞き、どことなくショックを受けたような顔をメアはしている。
『めあかわいいから、ふたりににあうとおもったの…やだった…？』
「え!?えっと、そういう訳じゃなくてね…」
『ごめんね…』
「はうぅ!?」
メアは既に涙目になってしまっている。ビビは何だか物凄い罪悪感に襲われた。
「いいじゃない、私は気に入ったわよメア。ありがとね。」
そこにナミが助け舟を出す。その言葉を聞き、メアの機嫌は回復したようだった。メアの目にはもう先程の涙は無い。それを見てビビはホッと胸を撫で下ろす。
「メアも可愛いの着てるじゃない！似合ってるわよ。」
『ほんと!?やった!!』
メアは可愛い子供服を着ていた。これはサンジに見繕ってもらったものだ。
に見繕ってもらったものだ。
「とにかくだ、これで当初の目的通り物資は揃った訳だな？」

「ええ。」
「ユバだっけ？これから行く所は。」
「そうなんだけど、その前に砂漠の旅が待ってる。恐らく今あなた達が想像してる以上にキツい旅になる筈よ。…この先は何が起きるか分からない、一歩間違えたら命の保証も出来ない灼熱の旅…そんな所へみんなを連れて行くのはまだちょっと戸惑いがあるんだけど…私はこの国に平和を取り戻したいの！」
「だから…だから改めて私からお願いしたい…みんな！みんなの力を私に貸してください!!どうか…」
「やっと言ったわね。」
「えっ…」
　ビビの言葉を仲間たちは当然といったように受け止める。
「待ってたわよ！」
「何が起こるか分からねェのは海と一緒だろ？ビビちゃん。」
「あァ、今までと変わらねェな。」
「俺砂漠って楽しみだ！」
『わたしもびびのためにがんばるよ!!』
「よーしみんな!!張り切ってユバへ向かうとするか!!」

「「「「「『おーーー!!』」」」」」

「みんな…」

「誰か足りなく無い？」

「「「「「「『ルフィ!!』」」」」」」